
larme ~ 短編集 ~

池本いつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

l a r m e ｝ 短編集｝

【Nコード】

N 5 3 2 8 L

【作者名】

池本いつき

【あらすじ】

短編集です。短編で投稿すると数が増えたとき見にくいかなあ、とおもったので、連載のほうで投稿しました。甘かったり、切なかったり、痛かったりすることもあるので、注意書きにお気をつけください。

恋の始まりだったり、好きだと再確認してみたりします。ぜひどうぞ。ブログに載ってたものだったり、拍手採録だったりします。

はじめに（前書き）

読むに当たっての説明書のような感じで見ていただければ。

はじめに

短編を詰め込んだページです。甘かったり、痛かったり、切なかつたりするかもしれません。惚け話だつたりすることもあります。また拍手の採録だつたりするのもあります。

前書きに注意を書くので、読んでくだされば多分、避難することは出来ると思います。（死ネタその他モロモロハ絶対に書くようにしたいと思います！！　が注意書きが必要だという作品を見つければ、ぜひ一報を）

続き物もありますが、その場合は明記します。大体、2〜3話くらいです。続くとしても。それ以上続くのであれば、連載として載せる予定です。（もしくは、章分けをするはずです）

今まで連載してあるものの短編はそちのページに載せるので、ここにあるのは連載ものにしない予定のものばかり。
気に入っていただければいいのですが。

ちなみに『larme』はフランス語で『涙』や料理などでは『少し』という意味があるそうです。（女性名詞だそうですね）　カタカナ表記にすると、多分ラルムです。

この場合は少しの、とか欠片の、みたいな意味で使っております。フランス語が堪能なわけではない（むしろそれがフランス語ということさえ分らない）無知な人間ですので、感覚的に使ってます。

ただ響きが綺麗だったので。ただし、『』がつくと『Larme』（＝兵器）になり、とんでもないことに。

ここでは涙のように零れた欠片たちを並べていけたらと思います。お話の雫たちが、読者様方に届くことを祈って。

追記

割り込み投稿できるということを先日知り（遅い）ましたので、もしかしたら、割り込み投稿するかもしれません。ので、ときどき日付なんかを確認していただけると、嬉しいかなあ……とか。

偉そうですよ、ごめんなさい。上手く伝えられる方法をあまり知らないのです。

活動報告には書くようにしますので、そちらもどうぞよろしくお願いたします。

バイト（前書き）

本屋でバイトの男の子と、そのお客さん。

甘いのかといわれれば、甘くないですけど、恋の始まりのなものを一つ。短め。

バイト

一ヶ月に一回。それは月初めにやってくる。だから俺は、いつもその周辺は休みを取らない。

だって、一ヶ月に一回の楽しみだから。

月初め……それは一日だったり、三日だったりするけれど。彼女はやってくる。近くの……俺の通っている高校よりも少しだけ駅よりの高校の制服を着た彼女。

セミロング……と言うと最近知った長さの髪をさらさらと流したまま、他のところへは目もくれず、レジ前の新刊コーナーへとやってくる。

少しだけ眉を寄せて、表紙を目で追う。探し物がどこにも見つからないのだろう、人差し指で表紙の表面をなぞるように一つずつ確認していく。

その仕草が面白くて、毎回、『もう少し左にありますよ』とか、『上ですよ』とか言ってしまうくなる。

「あ……」

彼女が小さく声を上げる。それも毎度のこと。毎度のことだけど、何故か俺の方まで嬉しくなる。そんな笑顔を、彼女は目当ての本が見つかった時に浮かべる。

そしてとても大事そうに、その本を手取るのだ。

多分、その笑顔にやられたんだろうな、と冷静な方の自分は思う。その時ばかりは、本になりたいとか、普通の時では思いもしないことを思ってしまう。

そして彼女は笑顔のまま、こちらへとやって来る。レジは二

人いるが、もう一人の人はやりと笑って言うのだ。

『あんたがして来なさいよ。そして今度こそ話しかけるのよ!!』

三十をいくつか過ぎたおばさんは、母親というよりも年の離れた姉のような存在だ。そんなおばさんに、俺の心は見透かされている。
「すみません」

このセリフも毎度のこと。だから振り向いて笑顔で『ハイ』と返事をするのだ。多分、本のことしか頭にない彼女は知らないと思うけど。

「カバーをおかけしましょうか？」

「あ、お願いします」

本当は、毎回聞いているから聞かなくても分かってるんだけど。だけど、少しでも彼女の声が聞きたくて。

少しだけ、勇気を出してみようか。どうせバイトとお客さんの間柄なのだし。おばさんだつて、よくお客さんと話してるし。

「お買い上げありがとうございます」

何を話そう。どうしたら、振り向いてくれるだろう。この本を手渡してしまえば、もう一ヶ月会えないのに、中々言葉は出てきてくれない。

何か、何か言わなくちゃいけないのに。

そう思いながら、彼女に本を手渡した。そして声をかけようとして口を開いたその時。今度は彼女がしっかりとこちらを見た。

あれ、おかしいな。いつも本しか見ないのに……。

「あ、あの。いつも、レジをしてくれる人ですよね？」

少しだけ顔を上気させて、彼女がこちらを見る。頷くことしか、できなかった。

「あの。いつもあなたがレジをやってくれるから……。いつも、笑顔で返事してくれるから……。その」

言いよどんで、俯いて。受け取ったばかりの本をきゅっと握り締めたのが分かった。紙袋が妙に歪んだ。

「お、お礼が言いたくて。あの。ありがとうございます」

多分それが、始まりだ。彼女の瞳に映った自分は……。初めて見るぐらい、真っ赤だった。

どうやって返そうか。どうやって、返事すれば……。

おばさんがこちらを見て、にやけてるなんて知らずに、俺は口を開く。そこから出てくる言葉は、俺にだって何なのかは分からない。分からないけど、それが。

始まりの合図。

バイト（後書き）

私の短編なんてこんなものですが、よろしければお付き合いください。

優しい物語（前書き）

悲恋っぽい感じの恋愛モノ。悲恋なのかと言われれば、明言できないんですが、多分悲恋です。死ネタと言われれば、死ネタ、かな。恋愛色薄めです。魔女とか出てくるので、そういうのが苦手な方もお気をつけください。

優しい物語

スツと薫る木の香り。誰も……何もいないのではないかと思うほどの静けさ。時折、忘れたように風が吹き、その時だけ木々が生命を取り戻したように揺れた。しかしそれ以外は、何も起こらない。

その中に魔女が住む屋敷がある。一匹の猫を抱き、ゆらゆらと前後に揺れる安楽椅子に座った魔女。安楽椅子に座るには、若すぎるように見える女は日の光が当たると、嬉しそうに目を細めた。

透けるような白い肌を持ち、その皮膚にはシワ一つ、シミ一つない。彫刻等のように白い肌とは対照的に、髪は闇より深い黒だった。全てを見通す瞳はよどむことなく、かといって美しく澄んでいるわけでもなかった。

美しい、少女とも妙齡の女とも取れる女の顔は神秘的な雰囲気の内包していた。ゆるりと細められた瞳は、魔女にはありがちな冷たさを奥に潜めていた。

「マーシュ」

小さな声で、猫を呼ぶ。“マーシュ”と呼ばれた猫はあくびでそれに答えた。「冷たい仔ね」とたしなめる言葉も聞こえていないように振舞う。

「もうすぐ、ね」

その言葉が意味することを分かっているのか、いないのか。マーシュは小さく身じろぎした。その時、トントンとドアがノックされる。

魔女はゆっくりとした動作で椅子から立ち上がった。まるでそれを予想していたかのように……。淡い紫のドレスがひらり、ひらりと美しく翻る。

魔女はその美しくも冷たい顔を綻ばせ、ドアを開けた。

「あ……」

まさか人が出てくるとは思っていなかったのか、ノックした本人は驚いたような顔で魔女を見つめる。

ノックしたのは一五歳ほどの少女だった。長く、亜麻色の髪は一つの大きなみつあみにしていて、服も魔女とは違う簡素で動きやすそうなドレスだ。

「あの、あたし、森で迷っちゃって……。雨も降ってきたから、それで」

おどおどと自分の置かれている状況を説明する。その話を本当に聞いているのか、魔女はドアを大きく開けた。

「お入りなさい。温かいお茶を入れましょう」

魔女は目を一層細め、優しく微笑んだ。

そして、自分が先程座っていた安楽椅子の隣にあるソファアを指し示す。少女は遠慮がちにそれへ腰掛けると、魔女が出した紅茶のカップを手にとった。

ふわりと薫る、甘い香り。そして、紅茶の名の通りの深い緋色をもつ液体を見つめた。その美しい色合いに誘われて少女はカップを口に付ける。

「おいしい」

呟くような感想を言うと、魔女はニツコリと笑う。マーシュはふあと口を開けた。

「どうしてこんなところへ来たのです？」

さらさらと川のせせらぎにも似ている言葉の羅列。優しい響きの中にどこか混じる、寂し気な色合い。その声に少女はほっと息をついた。

「あ、あたし、ルーナって言います。綺麗な花を探してたら、いきなり雨が降ってきて。どこか休むところはないか探していたら、いつの間にかこの家があったから」

ゆっくりとしたその声は、カップから立ち上る湯気と共に空気へ溶けた。

魔女はその言葉を聞き、小さく目を見開いた。ルーナが来て、初

めてその穏やかかつ冷たい表情を変えたのだ。

驚いたような表情を出し、まじまじとルーナを見つめる。そして何かが分かったように口を動かして、何事か囁いた。しかしそれもすぐに元の表情に戻る。

それから優しく頷いた。魔女は横目で窓を見やり、それからルーナに向き直る。

「ならば雨が止むまでここで休めばいいでしょう。その間、独り暮らしで寂しいわたしの話し相手になってくださる？」

首を傾げると黒髪がふわりと揺れる。

サラリと髪が落ちる様子にルーナは見惚れた。いつの間にかマーシュは魔女の膝を離れ、ルーナの足に頭を摺り寄せている。グルグルと喉を鳴らし、ルーナの関心を引こうとした。

それを見た魔女は、納得したように頷く。先程の笑顔より嬉しそうに、喜色を滲ませた。

「マーシュ」

魔女が静かに猫の名を呼ぶ。

すると、マーシュは大人しくルーナから離れ、魔女の膝に飛び乗った。黒のように見える毛色は深い紺色で艶のある毛並みだった。

そして、黄金の鋭い瞳と澄んだ碧眼を持っていた。どこかしら神秘的な雰囲気を持つマーシュの表情は魔女に似ていた。

魔女は触り心地のよさそうな毛を撫で付けると、ルーナの薄く透明感のある黒い瞳を見つめた。魔女にはない、強い光を持つ瞳を魔女はじつと見つめる。

「昔話を、しましょう」

声が深みを帯び、さらに心地よくなる。美しい響きの言葉たちはまるで、詩のように魔女の口から紡がれた。それはまるで、美しくも切れやすい 儚い糸のよう。

魔女はマーシュを膝に乗せたまま、規則的に毛を撫でる手もそのまま話し始めた。物語とも、史実ともとれるそのお話は、ゆっくりと始まった。

この国にね、数十年も昔の話だけれど、一人の魔女がいたの。誰にも認められる程の力を持ちながら、その魔女は愚かだった。

その魔女はね。

恋をしたのよ。この国の王子に、恋をした。愚かでしょう？ 身分違いも甚だしい。まして、魔女には恋なんて、愛なんて必要ないのに。

その願いは叶わないと知りながらも、その心は報われないと知りながらも、その思いは許されないと知りながらも、その魔女は恋をした。

優しくも、絶対に魔女には振り向かない王子に。

その王子も、身分違いの恋をしていた。侍女に、恋をしてしまったの。そして、その侍女も王子を好いていた。

当然のように二人の関係は誰も知らなかった。王子に相談を受けた、魔女以外はね。

彼女は王子と、その侍女の為に色々なことをしたわ。逢瀬を邪魔されないように結界を張り、二人の真実を知ってしまった者たちの記憶を消した。

報われないと知りつつ、それでも王子のために何かしたいというその一心で……。

そしてある時、王子たちは城から出る決心をしたの。

このままでは幸せになれないと、二人は悟ったから。でも魔女は戸惑ったわ。今までなら王子の傍に入れたのに、と。

でも城から出て行かれたら、もう一生会えないのは目に見えてい

たから。

それにね、彼女は国に雇われていたの。王子個人ではなく、国にね。だから、国に不利益なことはできない。

国に不利益なことをする、それはそのまま国に雇われた魔女の禁忌だから。

破ることを許されない、破ったが最期自分の身さえ滅ばしかねない、契約だから。

そこまで話して、魔女はふうと大きく息をついた。どこか疲れたような表情でルーナを見つめる。

何か言おうと口を開き、しかしその口から言葉が出ることなく、また閉じられた。眉を少しだけ下げ、それでも笑って見せた。

「その魔女は結局、どうしたんですか……？」

先が気になって、ルーナは口を開いた。想像がつかなかった。どうなっても、物語としては納得できるから。

どんな決断をしても、後悔することが分かりきっているのに、彼女は一体どちらをとった？

思い人の恋を手伝っているところからもう間違いなのだ、そう思ったが、彼女にはどうすることもできなかったんだろう。

思いを告げることも、思いを殺すことも、どちらもできずただ、ただ迷って悩んでいるだけだった。それは何で、悲しいことなんだろう。

恋をした時点で、間違いだったなんて、それは何て苦しいことなんだろう。

王子の幸せをとり、自らの心を殺して禁忌を破るか、そして

もう二度と会えなくなるか。

国への忠誠を取り、王子を裏切って一生城へ閉じ込めるか、
そしてもう二度と顔を合わせなくなるか。

ルーナの問いに、魔女は再び笑顔を浮かべた。淡く、儚い……、
触れれば消えてしまいそうな雪のような笑み。

「あなたなら、どうします？」

もし、あなたがその魔女なら、どちらを選びますか？

魔女の問いに、ルーナは目を伏せた。何かを掴もうとするように
目を彷徨わせる。長い間、そうしていた。

魔女はそれを咎めることもせず、ただルーナを見ている。柔らかな
眼差しの中に、観察する色を映し出した。

いく時そうしていたらう、やがてルーナは静かに魔女へ向き直
った。その瞳は揺れていて、いまだに自分の答えへ自信が持てない
ようだった。

「もし、もしもあたしがその魔女なら……」

そこまで言つて、ルーナは言葉を止める。

いつの間にか、カップから立ち上る香り豊かな湯気は消えていた。
そのカップの中身に映る自分を見つめ、ルーナはきゅっと手を握り
締めた。

そしてゆつくりと口を開く。

「あたしなら。王子を城から出そうなんて思わない、思えないよ。
いくら王子の幸せを願っていても、やっぱりあたしは傍にいたい。
たとえ、王子が一生あたしに振り向かないとしても、城に閉じ込め
られてあたしを憎んでも。王子だけその侍女と幸せに暮らすなんて、
許せない　――」

何かをこらえるようにルーナは言った。それを聞くと、魔女はま
たマーシュを撫で始める。そして、物語の続きを語るために口を開

いた。

彼女は悩んだわ。

昼も夜も関係なく、そのことで一杯だった。でも、答えなんて出なかった。どちらか嫌だったから。どちらかをとれば、どちらかを捨てなければいけないんだもの。

考えれば考えるほど、悩めば悩むほど、そのことしか頭に浮かばなかった。

でもね、ある日王子は彼女を呼び寄せていったの。「手伝わなくていい」って。王子にも分かっていたの、その魔女のこと。

『心優しく、真っ直ぐな魔女』

そう呼んでいたぐらいだから。

彼女がどんなに悩んでいるか。国と自分との間で、どんなに苦しんでいるか。それが分かるのに、どうして魔女の思いに気が付かなかったのかしらね。

彼女は友である自分か、国かで迷っている。

友人を裏切るような人間ではない。

だけど、忠誠を誓う国に背くような人間でもない。

それが痛いほど分かったから、そう言ったのね、きつと。

だけど、皮肉なことにその言葉が引き金になった。彼女の迷っていた心を決める、決定打になってしまったの。王子が自分のことを考えてくれている。その事実が魔女には嬉しかった。

ほんの少しでもいい、彼の心に自分がいることが嬉しかった。

魔女は王子と侍女の身代わりを作り、一週間国を騙した。

王が小さな王子の変化に気が付いたのがきつかけだったけれど、それがなかったら、もっと時間が稼げていただろうと王の側近は言った。

そして魔女はその日の内に、捕まった。

彼女は絶対に口を割らなかった。ただ、黙って俯き涙を流すだけだった。王に許しを請うことも、自分の過ちを嘆くこともしなかった。

魔女は泣いてはいけないという決まりなのに、彼女は人目をはばからなかった。

怒り狂った王は彼女を殺そうとしたけれど、それでも呪いが怖くて殺せなかった。

「だから、彼女は国を追われ、長い旅に出た。そして最後に　深い森にたどり着き、そこへ屋敷を建て、そこに命をかけて魔術をかけた。

ずっと、ずっと先、もしもその王子の孫たち、子孫たちがその近くを通ったら、その屋敷に入るように。そして、殺してしまうように

……」

そう言って、魔女は話を締めくくった。

そしてルーナを見て笑い、「つまらない話を聞いてくれてありがとう」と呟くように言う。ルーナは黙って首を振り、それから口を開いた。

一つの予想と、疑問を抱きながらそれを魔女にぶつけた。

「あなたの、名前は？」

「ルウィーヌ。ルウィーヌ・レストリス」

囁くように言い、マーシュの頭を撫でた。

「そして、愚かな魔女の名もまた、ルウィーヌ。愚かな魔女というのはわたしのこと。そして、ルーナ。あなたは……、あの人の孫、

ね」

小さく、本当に小さく魔女の　ルウィーヌの顔が歪んだ。泣き出す寸前のような顔で、ルーナを見つめる。

「あたしを、殺すの？」

ルーナが問う。その問いに、ルウィーヌは首を振った。

「本当はね、本当はそうだと思った瞬間殺そうと思ったの。でもね、あなたがわたしと同じように考えてくれたから。」

『王子だけ幸せに暮らすなんて許せない』

……わたしも、そう思ったから。いくらあの人を愛していても、そう思う気持ちを止められなかったから。そして、そう思う自分が醜くてしかたがなかったから。

だから、嬉しくて殺そうなんて思えなくて」

嬉しそうに少しだけ微笑んだルウィーヌは、マーシュの耳元に唇を近づけ何事か小さく言った。マーシュはその言葉に『ミヤウ』と鳴いて答える。

そして、ルーナをじつと見やった。

「ルーナ、来てくれてありがとう。あの人の幸せの証が見れて、本当に良かった。もう、あの人の子孫には会えないかもしれない思ってた」

その声はとても小さくて、聞こえにくい。泣いているわけでもなく、俯いているわけでもないのに、とても小さかった。まるで死にかけている人間のような。

そこまで考えて、ルーナはハツとした。自らの考えの不吉さに身を振るわせる。それでも。

「ルウィーヌさん?!」

ルウィーヌの体が透けて見え、ルーナは慌てた。

今考えていたことが目の前で再現され、自分の考えを打ち消そうとする。その様子にクスリと笑い、ルウィー又はルーナの瞳をじっと見つめた。

「目的を果たしてしまったからなのね。それか、もうわたしの魔力の期限か……」

でも、やつと逝けるのね。実は後悔していたの。自らの魂を、あの人の子孫が来るまで縛り付けたことに……」

歌うように言い、ルーナに手を差し伸べその頬に触れた。しかし、ルーナがその感触を感じることはなかった。

姿が光の粒子へと変わり始め、上へ上へと昇っていく。ルーナは手を伸ばし、ルウィー又に触れようとして　その手はルウィー又をすり抜けた。

掴んだと思つた光の粒子は手に残ることもない。

金の光に囲まれて、だんだんとぼやけていくルウィー又は何故かとても幸せそうに見えて、ルーナは涙を流した。

「泣いてはダメよ、ルーナ。わたしは、嬉しいのだから。笑って？」

「無理。そんなこと、無理」

涙が流れ、それを止めようとも思わずルーナは呟いた。それと共に、言いようなない感情が心を支配していく。じわじわと侵食するように。

「何故?!　何故あなたはそんなに……寂しそうな顔をして笑うの?　それでも、幸せそうに見えるのは何で?!　あたしを、殺したかったのでしょうか?　それだけが目的で、ここにいたのでしょうか?　それなのに何故、目的を果たさないまままで逝ってしまおうと思うの?!!」

涙でルウィー又がぼやけているのか、もう消える時が近いからなのか、それさえも分からなかった。

ルーナの問いに、ルウィー又は答える。心地良くも小さく、すぐに空気へと消えてしまう声で。その声さえ、もう遠くから聞こえてくるようにあやふやだった。

「何故って、幸せなんですもの。わたしでは、あの人を幸せにできないことはよく分かっていたから。」

いくら力が強くても、優秀でも、所詮は人とは違う者。国はわたしたち魔術者を使いながら、それでも軽蔑の目を向けていた。

異形の者を娶って、幸せになれるわけがないでしょう？　ならば、離れていてもあの人が笑ってくれる方がいいって、そう思ってしまったんですもの。

近くにいたいと、いて欲しいと思いつつ、二人だけが幸せになることを許せないと言いつつ、それでもやっぱり幸せになって欲しかった」

どこか夢心地で、ルウィー又は続けた。

「本当にそう思ったの。わたしが幸せになれなくても、異形の者に『大切な人だ』って言うてくれたあの人を幸せを守りたかった。

だから、あの人を幸せだったという証　あなたに会えて、嬉しかった。復讐なんて忘れてしまっくらい」

その言葉を聞き、ルーナは目を見開いて息を呑んだ。

そして何かを思い出すように眉を寄せた。一瞬後に、もう一度目を見開き、ルウィー又に向き直る。

「一つだけ、あなたに言いたいことがあるの……」

大声で泣き出した衝動をこらえるような、それを押さえつけるような声。

「おじいちゃん、一年前に亡くなったんだけど。その時にね、あたしに言ったの。」

「僕は本当に好きな人、一人さえ幸せにはできなかった愚か者だ」
って。

「彼女から離れることでしか、彼女の幸せを守れなかった。いや、結局は離れてもやはり彼女の運命を狂わせてしまったのだけだ。

でも、あの時は彼女より、ルーナのおばあちゃんの方が好きだと思

つてた。だから、彼女の気持ちを知りつつ、知らないふりをした。だけど、離れてみて初めて、自分が彼女を愛していたことに気が付いたよ』って。

あたし、今の今まで何のことも分からなかったけれど、今なら分かる気がする！！　きつと、おじいちゃんはきつと、あなたが、あなたのことが　　！！」

そこまで言って、ルーナは口を閉じた。

ルウィー又が人差し指をルーナの口元に運び、話せないようにしてしまったから。そしてゆるく首を振り、ルーナの言葉を遮った。

「あの人はきちんと、侍女の娘を愛していたわ。でも、わたしの気持ちにも気付いていたのね。うまく隠した、つもりだったのに」

幼い子どものように、屈託なく笑った。

「わたしからも、言いたいことがあるわ」

穏やかな、穏やか過ぎるその声は　　全てを悟った、死期が近付いた人の声。

何もかも受け入れるようなその笑みに、もう初めて会った時のような冷たさはなかった。ただ温かくて、安らぐ笑み。

「あの人ね。わたしのことを小さい頃、『ルーナ』って呼んだの。あなたの名前を聞いた時、まさかとは思ったけれど……。

忘れないでいたことがすごく嬉しかったわ」

そう言って、ルーナの頬に触れる。もう触られているという感触さえ、相手に与えられないのね。そう言ってルウィー又は笑った。

「さようなら、ルーナ。あなたに会えてよかった。本当に……。やっつと、あの人に会える」

見つけてくれるかしら？　その声はもう聞こえなかった。

「さよなら。優しい、魔女さん」

どうして、二人は離れてしまったのだろう。どうして二人は互いの気持ちに気が付かなかったのだろう。

彼女は彼の気持ちに。
彼は自分自身の気持ちに。

気が付いたら、何か変わっていたのだろうか。

結ばれる、運命には絶対になれなかったのだろうか。そんなに魔術を使う者は忌み嫌われていたのだろうか。

「知りたいよ。知りたくて、たまらない」

どうして二人は。

「こんなに悲しいの？」

涙が再びあふれ出るのは、二人の胸の内が少しだけ分かってしまったから。そしてルーナはあるものに気が付く。

ルウィーヌが座っていた安楽椅子に何か置いてあるのを。

「これ、ロケット？」

そう言っただけでみる。ちょっとした、期待を込めて。そこから現れたのは金髪の穏やかな目を持つ青年と、その青年に寄り添って笑う黒髪の少女だった。

その笑みに、冷たさは一欠片もない。穏やかな、優しい光が満ちているだけだった。少女の肩に回された青年の腕は優しい気だ。

『何かを媒体にしないと、魂を縛り付けられなかったの』

唐突にそんな声が聞こえてきて、ルーナは辺りを見回したが、声の正体は掴めなかった。いつの間にか傍にいるマーシュを抱き上げ、ルーナは呟いた。

「こんなに、思いあっていることが分かるのに」

こんなに、互いを大切に思っていたのに……。どうして、すれ違ってしまうの？

それは多分、二人があまりにも愚かで、そして……。優しかったか

ら。

これはある国の愚かで優しい二人の物語。

優しい物語（後書き）

二年以上前の作品！！ ヒー、文体違うー！。拙さ万点（もちろん今でも）ですが、ちょっと懐かしくてびっくり。

二年前でも、今でもこういう雰囲気が好きなのは変わらないらしい。成長ないなあ。

金木犀（前書き）

季節外れですみません。書いた当時は金木犀の盛りでした。学校帰りにふわりと香った金木犀があまりにも甘くて、淡いめまいを覚えしました。

『囚われる』感覚に思いついた短編。

主従です。甘くないです。何かあやふやです。……痛くもないけど、甘くもない。平安時代くらいをイメージ。

金木犀

甘い香りに惑わされて、手を伸ばす。
掴めないのに、掴もうと手を伸ばす。
どうしても、欲しいと、手を伸ばす。

甘い甘い香りを閉じ込めようと、ゆっくりそっと、でもすばやく……手を伸ばす。

「いい香りじゃのう。そうは思わぬか？」
「ええ」

長い髪を流したまま、少女はゆっくりと微笑んだ。白粉を塗っていないのに真っ白な顔、薄桃色の小ぶりな唇。

全てが小作りな顔なのに、瞳だけが輝いていた。

同意した青年を少女はちらりと見て眉をひそめ、着物の裾を翻す。紅葉の柄が刺繍された裾がふわりと広がった。

「興が冷めた。中に入る」

艶やかな唇から出たとは思えぬくらい冷たい声を青年に発し、部屋に入る。

そして御簾を跳ね上げ脇息に寄りかかった。少々乱暴な動作にもかかわらず、どこか洗練されていた。

青年は部屋へは入らずに、簀子のところで止まり、跪く。

「入ってこぬか？」

遠くて少し聞き取りにくい声に、青年は応えた。

「もう姫様は十五におなりです。本来ならば……」

「本来ならば御簾の外にも出ず、人と会うときも仕切りを設け、声

も聞かせず、日の光に当たったこともないような姫君として過ごさなければならぬ……じゃろう？

そしてそちはそれを馬鹿正直に守っている」

にやり、と先ほどとは違うように微笑んでみせる。こちらの方が少女を生き生きと見せていた。

しかしすぐさまその笑みも消し、脇息から身を起こした。

「分かつておられるなら……」

「分かつておるから、じゃ」

青年の二度目の発言も遮り、少女は廂に出て格子に寄りかかるようにして、簀子の青年に近づく。

「わらわはこれから嫁ぐ姉上のように入内はせん。父上も血のつながらぬ母上も無理強いはせんじゃろう。わらわは妾腹の娘。

どこか適当に嫁がされるじゃろうて」

政の駒^{まつこ}として、な。

御簾を隔てて、少女は笑う。

「今わらわがいなくなろうと、父上たちは探そうともしないのじゃろうな……。いや、大事な道具がなくなつたと騒ぎ立てるか……？」

「姫様。姫様はきちんと大事にされています。そのような……」

「そのようなことを言うのはお前だけじゃよ」

お前も、今思えば不運じゃのう。

少女が笑った。御簾越しのせいかな青年にはよく見えなかったが、眉を下げているようにも見える。

「我が家に代々仕える家の出でありながら、わらわのような娘に仕えねばならぬとは」

父上が姉上に仕えるのではなく、わらわに仕えよとおっしゃったとき、わらわは姉上が気がかりだった。

少女が御簾に手を滑らす。御簾が揺れた。

「姉上がそちを好いておつたことくらい、とうに知っておつた。そちは知らぬと言ひ張るか？ 気がつかなかったと？」

「姫……」

「安心せい。父上などに言ったりせん」

ばさり、といきなり立ち上がり、少女は中へと入って行く。青年は少しだけ腰を浮かし、それから何か思い出したように再び座った。「私は、女御様とおなりになるようなお方とお話するようなことはありませんでした。恐れ多い」

きちんとした格好をすれば、どこかの公達に見えるような秀麗な顔立ちが小さく歪む。

「そちはあの金木犀と同じじゃ」

何の突拍子もなく、少女は言った。黒い髪が流れる後姿が、御簾の間から見え隠れする。

「姉上の気持ちを知りつつ、それでも決して姉上の声に振り向かなかった。わらわに仕えていると言い、決して姉上の呼びかけに立ち止まろうとしなかった」

どんなに姉上が、お前を好きだったか、わらわは知っておる。

「不快なくらい甘い香りが、そちと一緒にじゃ。姉上はそれに酔った。醒めることの難しいくらい深く、な。」

そこまでさせる、甘い香りが、わらわは嫌いじゃ」

酔ってしまった姉上を知ってしまったからの。

「のう。守役……。金木犀が酔う甘い香りはないのか？」

ずっと後ろを振り向いた少女は今度こそ泣いていた。

「もしあるなら……。酔わぬうちに身に焚き付けたい」

ほろりと涙を流しながら、少女は笑う。

「わらわは酔わぬ。絶対に酔わぬ」

きゅつと唇を結んだのは青年の目にもはっきりと映った。

「わらわは……。酔わぬよ」

御簾を上げ、少女は再び出てきた。注意しようとした青年の唇に少女が手を置く。

「分かつておる。これが最後じゃ。御簾から外へ出て花々を眺めるのも、そちの前に何もせず顔を見せるのも」

だから、一枝だけ金木犀を取ってきてくれぬか？

深くは酔わない。少しだけ、まどろむだけだ。
その甘さに。その美しさに。その優しさに。
もうその甘い香りを掴もうとも思わぬ。溺れとうはない。

そう言い訳して少女は一枝の金木犀を腕に抱いた。その甘い香りを楽しみつつ、青年を見て笑った。

「本当は……それほど嫌いではない。この甘い香りも、そちも」

少女は一瞬だけ青年の頬に手を伸ばしかけ、首を振った。左手で右手を包み、金木犀の小さな花を撫でる。

そして御簾の中へ入る。

「最後の命令じゃ。聞いてくれるかの？」

「なんなりと」

しばらく黙っていた青年が応えた。それを聞き、少女は分からぬ程度に目を細める。

「今姉上は、一カ月後のことを思い、外を見ているじやろう。その姉上に……この金木犀を届けて欲しいのじゃ」

御簾から金木犀だけが差し出され、青年はそれを受け取った。

「それから、あと一ヶ月、姉上に仕えよ」

「姫様」

「命令じゃ。聞けぬか？」

納得しないと言ふ返事に、少女は冷たい声で返した。

「酔ったまま入内させるのも、酔いを醒ますのも、そちの勝手じゃ。わらわは口出しせん」

そしてもう話は終わったとでもいうように、青年に背を向ける。

「姫様」

「まだ何かあるのか」

振り向きもせず、少女は応える。手の届くところへ積み立てられ

た書物の山から一冊を抜き出し、ぱらぱらとめくっていく。

その視線が一つも動いていないことを、背を向けられた青年は知らなかった。

「私は、姫様に仕えさせていただいて、本当に幸せです」
ですから

「一カ月後には、また戻ってきます」

その青年の言葉に、少女の手が止まった。そして書物の頁を捲るのをやめ、傍らに置く。

「勝手にしろ。口出しはせんと言った」

そういう少女が笑顔だったということも、背を向けられた青年知らなかった。

結局、溺れてしまう。

だけどせめて、その間際まで足掻こうか。

その甘い香りに酔わされたなんて、もうとっくに酔わされているなんて、言えないから。

金木犀（後書き）

続きが書きたいけど、痛くなるから怖いんです。

長い夏（前書き）

甲子園が大好きです。あの男の子たちのきらきらした視線を見ると、何だか堪らなくなります。

一つのボールへ向ける視線はひどく熱く、私たちの心を掴んで放しません。……という話を書きたかったんですけど、野球をしたことがないので書けませんでした。

と、いうことで、エセ野球小説。

長い夏

学校へ帰るバスの中は、ひどく騒がしかった。

「優勝候補の高校だったから」

とか、

「一点差でよかった」

とか皆言ってるけど、本当は悔しくて仕方がないということが分かった。私だって、悔しいから。

私はその笑い話にのることなく、のることができず、一人窓の外を見るふりをした。今そんな話をしてしまったら、知らず泣いてしまうのが目に見えていたから。

バシンという鋭い、グローブとボールがぶつかる音と、カキンという、バットがボールを飛ばす音が全てだった。その中に混じる選手たちの声が、全てだった。

「勝ちたかった　なあ」

情けない声が自分のものだとは認識するのに時間がかかり、はつとした。しっかり者と評判のマネージャーがこんなんじゃダメじゃない！　と自分に言い聞かせる。

そして窓の外を見ると、学校まで後少しということが分かった。よしっと両手を握り締め、気合を入れる。ぐっと目に力を込めた。まだ泣けない。家に帰るまで泣くことなんて忘れよう。

一番辛いのは、最後の試合が負け試合になった先輩たちなんだから。いや、どんな学校だって、優勝校以外はそうなんだから。

先輩たちは、自分たちが泣くと私たちも泣いてしまうことを知っているから泣かないのだ。だから、わざと明るく振舞っている。

それが分かりすぎるくらい分かっているから、私が泣くなんてことできない。

「ハイ。もうすぐ学校ですからね。忘れ物、しないでくださいよ！」

パンパンと手をたたきながら言えば、涙の気配なんて遠のいていくのが分かった。それでいい。『おー』という威勢のいい声にさらに押され、バスを降りる。

監督の『解散』の一言で皆は校門へと歩き出し、『疲れた』と言いついていた。あ、負けたんだな。明日からもう、先輩たちは受験生なんだな、と実感した。瞬間、胸の奥が熱くなった。

「スコアブック片付けてきます」と宣言し、部室へと走る。

部室の裏に回りこむと、涙が溢れた。その涙がとても熱くて、自分を包む空気より熱くて、泣いているという感覚が伝わった。自覚するとまた涙が出た。

これに勝てば、ベストエイトだった。甲子園には遠かった。マネージャーでしかない私が、どうこうできる問題ではないにしろ、どうにかしたかった。

一点差だった。本当に一点差。ツアアウト一塁だった。そして……ツーストライクツーボール。あと一球だったのに。あのボールさえ、ミットに入っていれば勝てたのに。

私はあの時、勝ちを確信していたのに。下駄を履くまで分からない、そんな野球の醍醐味ともいえる『サヨナラ逆転勝ち』なんて考えもしていなかった。

考えられるわけがなかった。カキーンという清々しい音とともに、白い点のようなボールは空へと飛んだ。

高く、高く。

遠く、遠く。

一瞬ファールに見えたそれは、見事に観客席へと入った　ホー
ムラン。

湧き上がる歓声と、落胆の声。私は声も出ず、それを見ていた。

「……………」

声が出ないように口を閉じる。それなのに、もれ出る嗚咽を止める
ことができなかった。涙が出ないようにふと目を閉じる。

それなのに溢れる雫を止めることができなかった。

幾度も幾度も涙を拭う。目が腫れると思うのに、腫れてしまった
ら明日の打ち上げに行けなくなるのに、そう思うのに……。思うの
に……。

「止つ……………まらない、よ」

その声に答える声はないはずだった。

「泣き止んだか？　マネージャー」

ヒョコリと顔を出したのは未来の……………いや明日からのエースだ。

今日が先輩たちの引退試合になったから。私は涙を見られたとい
う恥ずかしさと、いきなり顔を出した彼への驚きで固まった。涙腺
も、固まった。

「な、何でいるの？」

苦し紛れにそう問うと、彼は少し固そうな髪を掻き揚げた。うち
の野球部は、髪型にこだわらないので自由だ。

「あー、先輩たちになぐさめろって命令された」

気まずそうに視線をずらす。そして左肩に下げていたバックから
スポーツタオルを取り出すと、それを私に投げた。

青と白のラインが入ったそれは、フワンと私の手に落ちてくる。

「とりあえず拭けよ。みつともねえぞ」

遠慮なく言われたその言葉にうっと詰まり、大人しく従う。

年頃の乙女が涙も拭かず、なんてさすがに嫌だ。あ、でもこのタ
オル、今日まだ使ってないよね？　そんな視線を送るが、彼は『早

く拭けよ』と言っただけだった。

みつともない、ってなんだ。

女の子に向かってみつともないって。そう言いたかったのに。

でも心外だ。絶対にばれないと思ってたのに。先輩たちに、泣きそうなのがばれていたなんて。

そう小さくこぼすと、『あの人たちと俺たちじゃ、少しでも確実に、生きてる年数が違うんだよ』と諭された。

「に、してもお前さあ。明らかに泣きそうだったぞ、あれは。俺にも分かるくらい。」

そんで、そんな泣きそうな顔して元気に振舞うもんだから、こっちが困る。正直」

そんなこと言われても……。

「先輩たちが泣いていないのに、私が泣くって」

なんかおこがましいって言うか、図々しいって言うか。

モゴモゴとそう言い訳しているうちに、また涙が出そうになつて下を向いた。今日の私はおかしい。いつもならこんなことで、涙なんて出るはずないのに。

そんなことを考えると、上から声が降ってきた。

「お前、自分で思ってるほど強くねえよ。多分」

それと同時に後頭部に温かな重みがのった。氣遣わしげに、そつとそつと彼の手が動く。

暑いから、と長かったのに短く切り、今では肩にもかからない髪。そんな髪を慈しむように撫でられる。ぽろつと、涙が一筋だけ流れた。

何が悲しくて、二回もこいつに泣き顔をさらさなきゃいけないのよ。

「私は、しっかり者なのよ。強いんじゃないって、世話焼きで……、皆を落ち込ませないようにしなくちゃならなくて……」

だから、私が泣くなんて、ありえないじゃん。泣いてなんかないわよ、そう言いたかった。こいつにも、先輩たちにも。自分にだっ

て。

「先輩たちからの伝言……」。

『俺たちの分まで泣いてこそその、マネージャーだ』

だつてさ。だからさっきのも、今のも全部先輩の分だからな」

そう言われたら、しゃべれるまでには回復していた私の涙腺なんてあつけなくて。たちまちのうちに崩壊してしまった。

そして、頭の上にある手がごく優しいことに気が付いた。

「それだけ流せば、先輩たち泣かなくて済むよな？」

「……ん」

「それだけ泣けば、俺も……泣かないでいいよな？」

「うん」

その問いかけに、一つずつ頷いた。

泣き止んだか？ その問いにも頷いて答えた。それを見ると彼は

『よし』と言つて、私の頭から手を離す。そして、自分のバッグを

出して、それを差し出した。

思わず、わけも分からず、それを受け取った。

「お前にミットで取れつて、無茶だよなあ」

その発言は『ハア』という、溜め息つきだ。何だ、その溜め息は何なんだ。そしてボールを一個取り出して、私から20m程離れる。

「マネージャー。お前、絶対グローブ動かすなよ」

何を言い出すんだこいつは。

動かしてケガしても知んねえぞ。彼はそういった後振りかぶった。

「えっ……ちよっ「新エースの初、投球！！」」

思いつきりと言うわけでもないだろうボールは、それでもすごい速さで私のところに飛んできた。そして軽く両手で構えていたグローブの中に納まる。

バシン、といい音が響いた。でも、私の耳にはそんなもの届いていなかった。両手に痺れが走った。ビリビリと両手が振るえ、腕さえも震える。

しばらくこの腕の痺れは取れそうにない。

「怖……」

口から出た感想に、彼は『やっぱりキャッチャーじゃなきゃ本気で投げられないな』と一人ごちた。

「まさか。本気で、投げようとしたの？」

いくら強がりの私でも、さすがに、それは怖いぞ。いつの間にか悔し涙は消えていて、悔しさが消えたわけではないにしろ少しだけ緩和された気がした。

「ん〜。それはない、さすがに。先輩たちに殺される。女の子に何するんだっ！！」

先輩たちは、中々過保護だった。

野球部ただ一人の、マネージャーだから。だって、今時休み返上してまで部活に出ようなんて女の子中々いないから。

「あー、ケガしなくてよかった。顔に傷とか、お嫁さんにいけない」

「あ、その顔でいける自信あるんだ」

頬を押さえてわざとらしく言う、すぐさ言い返してきて頭にくる。冗談で言っただけじゃないか、しかもお前にそんなこと言われる筋合いはない。

「本当にケガしたらどうするつもりよ！！」

きつ、と彼に向かって言う、と彼は頬を二回、三回かいた後、はにかむように笑った。うわ、こんな顔するんだ。なんて言えないけれど。

そして彼は、信じられない言葉を吐く。

「そんな時は、責任とってやるよ。あー。でも俺、野球選手になるつもりはないんだよなあ。残念ながら」

いや、だって万が一慣れたとしても、いつクビにされるかわかんないんだぜ？ いやだろ、そんなの。それに何だかんだで、遠征とか、キャンプとか大変だしなあ。

そんなこと、今、関係あるのか……。

「な……」

思わず返す言葉を搜した。

探してしまう、自分に恥ずかしさを感じ、さらに顔に血が集まる。こんな顔を、奴に晒す日がこようとは思わなかった。

「堅実な公務員の奥さんって、駄目？ マネージャーさん。それとも、野球選手の奥さんじゃなきゃ駄目か？」

しばらくこの腕の痺れは取れそうにない。

そう、多分……。来年は長いであろう夏が終わるまでは絶対に取れないだろう。あと、この頬の赤みも。

私がどう思ってるかなんて、実は嬉しかったなんてこと、言うつもりもない。

長い夏（後書き）

で、続きがあるんですよ。また載せますが。

こっいう、スポーツマンの男の子が書きたかったんです。髪が短めで、固めな感じ。少し目は鋭くて、でも笑うと子供みたいな人。日に焼けてて、健康そうで少年らしい少し細身な体。

……変態そうですね。まあ、好きだからしょうがないよ！！

細身なのに、運動とかさらっとこなし、ついでに自分が持ち上げれないものをさらっと持ち上げてくれるような男の子にきゅんします。

きゅんとするんですが、友人曰く『それ、恋じゃないから』らしいです。

私のキュン、は猫とかに対するキュンに近いらしい。『かわいいー』とか言ったら、そうかもしれない。

夏の終わり（前書き）

『長い夏』の一年後。二年生の夏が終わった感じ。……三年目が書けるといいですねえ！。（人事）

今回は少しでも恋愛成分多めで。純朴な彼らが好きなんです。

夏の終わり

カキン、と耳に残る音が鳴った。長く、長く、音が伸びる。

白い点のようなボールが遠くに飛んで行って、そして選手のグロ
ーブの中に納まる。

「次、湯川ー」

「よし、来いっ」

威勢のいい声が遥か彼方から聞こえてくる。よく響く声は去年と
変わらなかった。

しがないマネージャーでしかない自分は、ボールを拾いつつそち
らをちらりと見る。

すでにボールをしつかりと見ていて、目が合うことはなかった。

……というより、練習中は目が合ったためしもない。ずっとボ
ールを追いかけているのだから、しょうがないと言えば、しょうがな
いのだ。

文句を言えば、なぜピッチャーがノリノリでフライを捕るのか疑
問だということか。練習といってしまえばそれまでだけど。

「清水ー、ボール」

「はいー！」

そして自分も彼だけ見ているわけにはいかない。

それでも、まあ、野球が好きな彼との仲だから、不満なんてある
はずは、ないんだけど。多分。

涼しくなりつつある夏を感じつつ、『あと一年か』と小さくつぶ
やいた。

甲子園も終わった。だから、その人たちの夏ももう終わってる。

……私たちの夏はもっと早く終わってる。去年より、長かったけど。
彼に残された夏は、もう一つしかない。

「なー、清水。湯川とはデートとかすんの？」

ボールを持っていくと、キャプテンがニカリと笑う。憎めないこの人は、がっしりとしていて彼とは少し違うタイプの選手。

いうなれば、某有名高校野球漫画のキャッチャーみたいな人。いや、キャッチャーなんだけど、この人。

「どうしてですか？」

「あ、怒った？」

「怒ってません」

「怒ってるよ。同級生に向かって敬語とか」

「新キャプテンに敬意を払ってるとは思いません？」

「思えないねえ」

要領を得ない会話を数回繰り返し、そして小さく笑った。ダメだ、この人相手に長く怒ってられない。

「どうして聞いたの。そんなこと」

「別に」。休みの日でも付き合えとかメール来れば、普通心配するでしょ。彼女とか大丈夫なんかなあ、とか」

「え、休みの日までメールしてんの？ やっぱ恋女房には勝てないのか」

「ふざけてるだろ」

「まあ。でも、休みの日にメールはちょっと羨ましいかも」

大体、付き合ってるっていうほどでもないし。

そういうと、今度こそ目を丸くされた。そして、『ええ??』と聞き返される。

「いや、でも、付き合ってるよな？」

「どうしてそう思うのよ」

聞き返すと、うっと詰まられる。そして『何となく』という何とも頼りない意見が返された。

「告白されたる？ 去年のほら、負けたとき」

今年も負けただけだね、とは言えない。さすがに。

「あれ、告白……かなあ、とか最近思うよ？ それに私、返してな

いし」

「なんでっ――！」

「何でって、別に告白とかじゃない気がしたから。告白とっていいのかどうか、微妙だったし」

それにあれで返事するのも、何と言うか、自意識過剰な気もするし。

「お前ら、あれだな。どこその漫画みたいだな。某高校野球の」

「あれほどロマンチックだったらいいんだけどねえ」

ここまでくるとお互い遠慮も何もない。大体私が彼のことをどう思っているかなんて、この人にはとつくの昔にばれている。

「そうかあ。付き合ってたないのか。湯川可哀想だなあ」

「おい、お前はどっちの味方だ」

「清水、言い方が。でも、まあ、あれだな。野球部以前の友人の味方をするか、旦那の味方をするか、迷うよなあ」

「どっちかっていうと、女の子の味方するでしょ」

そうは言うが、ちらりとこちらを見るこの人の顔を見ると、そうでもないということが分かる。

この裏切り者め、と言ってやろうかという思いがよぎる。

「ボールが当たれば、責任とってくれるんじゃない？」

「何でそんな痛い目みなきやいけないんの、私が」

『責任』という言葉聞き、少しだけ反応してしまう私は悲しいかな、やはり恋する女の子ということだ。

去年の私からはきつと想像がつかなくらい、のめり込んでいるのだらうと思う。不毛すぎる。

夢は甲子園とデート、とかいう男の子相手なのに。

これなら、本当にどこぞの漫画の主人公のほうがよっぽど恋愛してると思う。

夏が始まる前は、夏のために練習する。夏が終われば秋とか春へ、そしてまた夏へと向かって練習する。

この繰り返しも回数にしてみればほんの数回だというのに、とて

つもなく長く感じる。

それにしては、一番思いの深い夏はあっという間に過ぎてしまうのだ。

「理不尽……」

「は？」

「何でもないですー」

そう言ってまた、ボール拾いへと勤しむ。ボールを綺麗にしなきゃいけないし、硬球縫わなきゃいけないし。

なれない頃はよく刺したりしたが（かなり痛い）、今ではうまくできるようになったと思う。

最初は二本糸を通すことさえ知らなかったが。（一本で縫えると思っていた）

やることはいくらでもある。だから別に、そう、別に何がどうこうしたいとか特別何がしたいとかいうことはない。

私だって同じくらい、いや、それ以上に忙しいのだから。

「今日はこちらまでなあ。後片付けは各自しろよ。マネージャーも甘やかすなよー」

「……はい……」

まだ夏だが、一番日が長かったときよりは、やはり日は短い。すでに空は暗く、端のほうで夕焼けがうつすらと残るだけだ。

家にこれから帰るとメールした方がいいなあ、と一人ごちながら家路を急ごうとした。

「で、マネージャーさん。どうして先に帰ろうとするのかな」

後ろから、からかうような声が聞こえた。学ラン姿の彼は少し珍しい。ユニフォーム姿が自然だから。

学校のあるときはいつも学ラン姿を見ているはずなのに。なのに、彼を思い出すときはいつだって、ユニフォーム姿が浮かぶ。

「別に。何となく」

そつぽを向くでもなく、そう返すと、ほんの少し不機嫌そうな顔をされた。よく日に焼けた肌が眩しい。

もちろんこちらだってイマドキの女の子のように綺麗な肌でいれるわけではないのだが、それでも彼よりは白いと思う。

「何となくで帰るのか？」

「だって別に約束してないでしょ」

自分にも、きつと相手にも痛いところをついてやる。すると今度はあからさまに眉をひそめられた。

小さくいい気味、と口の中でつぶやいた。

きつと一年前の私でも、最低、と眉をひそめただろう。

「三浦と何楽しそうに話してた？」

「選手のこととか、休日の話とか」

当たり障りのない話題を選んで口にする。うそは言っていないし、特別ごまかしてもいないと思う。

しかし彼が望んだ答えでないこともまた事実なので、それは知らないふりをした。

「ここ最近不機嫌なのは どうして？」

声が、少しだけ優しかった。

しかたなく、小さく笑うとそつと笑い返してくる。去年より、少し大人になったねとは言わなかった。

もうすぐ終わる夏、それでも彼にとってはまだ『夏』で、それは私を少しだけ遠くにやる。

「去年の言葉をね、思い出して……。三浦君と話してた」
「なっ」

初めて、表情が変わった。ぼつと火がついたように、浅黒い肌が染まっていく。暗くなり始めているので、見えにくいのが残念だ。

「何でっ」

「いや、付き合ってるのか、って聞かれたから、否定はしておいたほうがいいのかと思って」

つるり、と口が滑ってしまった。あー、と空を仰いでも今更どうしようもない。彼は、同じく『あー』と声を上げていた。

「何て言われて？」

「休日まで三浦君呼び出して練習してるんだってねー。恋女房だねーって。」

そしたら『彼女は大丈夫か』って心配されたから『付き合ってるよ』と」

彼の表情を見て、何かまずいことでも言っただかと思った。

「つまり、付き合ってるつもりがなかった？」

「え、湯川君、付き合ってたの？ 私と」

「俺は去年、何のためにあんなクサイ台詞を吐いたんだ……」

つまりは、自意識過剰でも何でもなかった？

「ごめん。あれで返事するのは、何か自意識過剰かと」

がーと短く切られた頭をかく。気まずそうにこちらを見て、また空を仰ぐ。なんだか可哀想に思ってきた。

「返事、いる？」

「いる。っていうか、何も言わずに一緒に帰ってたから、付き合ってくれると思ってた。こっちが自意識過剰だろ、これじゃあ」

「でも、さ。返事ってどうすれば返事になるの？」

これでは、一番最初にマネージャーになったときと一緒だ。

もっとも、あのときの質問は『どうすれば選手がアウトになるのか』という初歩的な質問だったか。

「す、きです。付き合ってください」

「えっと。はい、喜んで、でいいのか、な？」

お互い不慣れだから、多分、こんな感じでいいんじゃない？ と笑いあう。

他人から見れば、ぎこちなく、幼く……言う人が言えば、お前らは小学生か何かかと怒られそうだ。

それでも、やっぱり、こうでもいいんじゃないかなあ、と思う。相手はなんとって甲子園と付き合いたい男の子だから。

だから次の夏が来るまでは、私とデートでもしましょうか、と聞いてみる。

「でも、甲子園が一番なんですよ」

「まあ、高校三年間はそれで通そうかな、と」

未来の公務員さんはそうやって笑う。そのとき冷たい風がびゅつと吹いて、そんなに冷たくはないのに彼は身を震わせた。

「暑い日にはすっごく元気なのに、冬になると大人しくなるよね」

「暑いのは平気、でも寒いのは死ぬほどいや。できればもっと暖かいほうで生まれたかった。九州とか、沖縄とか」

「沖縄は台風が多いから、外で練習できないよ」

「じゃあ、九州」

「九州でも寒いところはあるらしいけどねえ」

話しても仕方のないことを話しながら、ゆっくりと歩いていく。

できれば来年は、もう少し夏が長くなればいいな、と思いながら。

でもいざ甲子園と彼がデートするって言えば、また機嫌が悪くなるかもしれないけれど。

「三浦もなあ、もう少しはつきり言えばいいのに」

「はい？」

「『お前、いつか絶対振られる』だつてさ」

「あー、そうかもねー」

お節介な友人に小さく感謝して、小さく彼の手をつかんだ。

夏の終わり（後書き）

初々しい子達を書くと、少しだけ恥ずかしくなる。

ちがう（前書き）

友人に著作権ごと貰った小説の半ば二次創作。

友人がほとんど興味のなかった、脇役の二人を中心にしてみました。……いつもだな。何故か主役カップルよりも、脇役カップルが好きだったりします。

シスコン、ってどこまでいったらシスコンなのかなーとか思ってみたり。

ちがう

昔、私の髪はセミロングで、よく二つくりにしていた。好きな男の子が、二つくくりが好きだったから。

「奈央なお。あんたが好きな柊つひくん。今日、やけに落ち込んでるわよ。慰めてあげたら??」

舌つたらずなしやべり方は男子には人気でも、女子にはかなり不評だ。少し長めの髪をくるくるときれいに巻き、目元から口元までバッチリメイク。

胸元のシャツは大きく開き、私とは違う真っ白で豊かなふくらみが見えた。リボンがだらしなく結ばれ、まだ寒いというのにスカートは短い。

「煩い。好きじゃないし」

小さく頭を振ると首もとで二本のみつあみが揺れる。それをけだるげに見つめた。

黒ぶち眼鏡に、おさげ髪、制服は第一ボタンまできれいに閉められ、リボンは美しい結び目をキープしている。スカートは膝下五センチ固定。

何の面白げも感じられない、非凡なほど真面目なガリ勉タイプ。それがクラスでの私の評価だ。

「またまた。心配で仕方ないはずのくせに」

頼むから、そんなに大きな声で語ってくれるな。

教室が煩くて助かったからよかったものの、『あの』柊つひ 伴ともが好きだなんて人に知れたら私は死を覚悟しなければならなくなるのだから。

「で、伴、どうしてあんたがここにいるのかしら？」

トントン、と今時珍しくなりつつある図書カードを整理しつつ、十年來の友人の名を呼ぶ。図書委員の仕事中に何の用だ。

「いや、お前なら話聞いてくれるかと思って」

また始まった。こいつの悪い癖は自分がどうしてもできない時には友人に頼むこと。

それなら最初っから頼めばいいのに、変なプライドがあるのかも手が付けられない、という状況まで自分でやり、あとは友人に任せるのだ。

悪く言えばそうだが、見方を変えれば最後まで諦めない人だとも言えるかもしれない。とはいえ、友人から見ればそこまで抱え込まなくても……と思うような内容が混じってないとも言いきれない。

「で、今度は何？ 柊くん？」

わざとらしく聞いてやれば、友人は図書委員の席である受付に入り込んだ。

「昨日、芳^{かおる}帰ってきただろ？」

「かおるくん？ 同じクラスじゃない。知ってるよ、それくらい」
昨日帰ってきたのはフランスからの転校生。

咲野^{さくの} 芳^{かおる}

幼稚園のときに一緒に、引っ越してから連絡も取っていなかったが、昔馴染みと言って差支えない程度には仲がよかった。

そのかおるくんが昨日、日本に帰ってきて、かおるくんはこの友人の家に遊びに行ったはずだ。

「で、そこまではいい。そこまでは俺だって、喜べるんだ!!」

じゃあ、今は喜んでないって言うの？ あんなに仲がよかったのに？

「じゃあ、どこまでいったから、喜べないの？」

「さすが、奈央！ いい勘してるな」

いやいや、かおるくんに対しての敵対心のようなものがあんたの後ろから見ただけだよ、とは言わずにおいた。

「聞いてくれ！ 芳は、俺の、俺の大切な妹を……！」

またその話か。

言い忘れていたが、こいつにはもう一つ、決定的な欠陥があった。それなりに顔がいいにもかかわらず、頭がいいにもかかわらず、運動神経がいいにもかかわらず彼女ができない理由。

いや、できそうになっても必ず失敗に終わる訳があった。

それは

「俺の大切な倅ゆきを……！」

重度のシスコン病。もう危篤状態。不治の病。つける薬なしの妹バカ。

そこまでがラインだった。

「悪いわね。伴。私、今日もう帰るわ。図書委員なんですよ？一度くらい、大変なクラスメイトを助けてくれてもいいわよね？」

だから嫌なのだ。こいつの……伴の話聞くのは。

「奈央？」

「また明日。聞いてあげる。詳しいことまで。だから、今日は帰してちょうだい。あんたの話聞くの、結構体力いるんだから」

そう、本当に体力いるんだ。伴の話聞くときはいつだって絶好調の体調じゃないといけない。その絶好調の体調で聞いてさえ、聞き終わったときはぐったりしてるのに。

「聞いてくれるんじゃないかったのか？」

「どうしても聞いて欲しいんなら電話しなさい」

メールでもいいから、と言いかけて止めた。こいつには携帯の番号もアドレスも教えてはいなかった。

「あんたの家に登録してある電話番号でまだ通じると思っから」
椅子の横に置いてあった、無駄に大きくて重い革鞆を持つ。
私の気持ちと一緒に、その時になって気づいた。

無駄に大きくて、重くて、持ち運ぶのには不便なくせに、置いていくには気が引ける。

かといって簡単に捨てられるものじゃなく、買い換えるのも簡単じゃなくて、そして長い間使っているからか捨てるのももったいない気がする。

何を、やってるんだろう。私は。十年もの間、何てものを持ち続けていたんだろう。

どうして、恋人を早く作ってはくれないんだろう。
そうすれば、少しでも早く見切りをつけれただろうに。

彼の目はいつも同級生に向けられてはいなかった。どこまでも暖かく、柔らかい、唯一の愛情は、ありったけの分だけ『家族愛』として妹に注がれていた。

その中に少しでも恋愛感情があれば諦めたのに、その愛はどこまでいっても『妹』にむけられる純粋な家族愛だった。

絶対に私には向けられないと知っていた。そしてその愛が彼女以外に向けられないことも、私は知っていた。

彼の心は絶対に手に入らない。だけど、誰の手にも渡らない。

それが私の心よりどころだった。

小さい頃は、それがよく分からなくて、ただ妹が、『倅ちゃん』が本当に好きなんだなあ、と思ってた。同性から見ても可愛らしく、素直で、賢い子だったから。

だから伴が彼女の話をして、どうってことなかった。兄弟のいない私にとっては、その話は本当に面白かったから。

だけどだんだん、大きくなるにつれて、分かることが多くなった。

それからだろうか、彼が好きだった　　倅ちゃんの大好きな二つくりをやめてしまったのは。

セミロングの髪をずっと伸ばした。彼女も、セミロングだったから。

眼鏡もかけた。親はコンタクトを奨めたけど、彼女は眼鏡をかけてなかったから。

自分の周りから暖色をなくしていった。彼女がよく身につける色だから。

絶対に、一緒になりたくなかった。全て、違うものしかかった。思い出した。二つくりを止めた理由を。

『可愛いな。倅と一緒にだ』

この一言があつたからだ。彼にとってはなんでもない一言でも、私には止めだった。致命傷だった。

どうして、そんなこと、言うの？　ともくん。

そう、言つて、帰つたんだ。そして、次の日から絶対に二つにくることはなかった。

「奈央？」

「ごめんね。倅。今日、慰めてあげれないや。どうしてかなあ。調子悪いのかな」

作り笑いが通じる相手だ。少なくとも、こいつは。だって、あの日から、こいつの前で本当の笑顔なんて見せてない。いつもいつも、眉を下げて笑つてた気がする。

『あんだといるとね、周りの視線が怖いのよ』

『一緒にクラスだったっけ？』

『あー、ハイハイ。倅ちゃんね。代わってあげるから、一緒に回ってきたら?』

『倅ちゃんに恋人ができたなら? 何? あんたそれで昨日寝てないの? できるでしょ? あんなに可愛いんだから』

自分が、一番嫌いだった。絶対に振り向かないこいつよりも。

あんないい子を、少しでも嫌だと、会話も避けたくなるくらい嫌だと思っ自分が一番……。

『奈央さん。うちの兄、変な人ですけど、優しい人ですから!!』

『知ってるよ。安心して、倅ちゃん。責任もって、常人になるように指導するから』

『ホントですか?』

『もちろんよ。ちゃんと分かってるよ。倅ちゃんのこと大切なだけだっ』

知ってるよ。優しい、人だっ。私にだっ、優しくしてくれる。彼は、優しく、残酷な人です。

だけど、どうしても嫌いになれないのは、私が好きになっちゃったから。誰が悪いわけでもない。私が、そんなことを思ったからいけないのだ。

「奈央。お前本当に、大丈夫か? 送る。家近いし」

「いいよ。近いっていても、結構な遠回りになっちゃうし。早く帰らないと、かおるくんが倅ちゃん迎えにいつてるかもよ?」

これで、伴は帰る。

そう知っている、そう確信しているのが嫌だけど、紛れもない事実なのだから仕方ない。こんな感傷に浸っている場合じゃない。

早く、伴から離れないと、私はとんでもない過ちをしてしまういそいだ。

「送る」

「いいってば」

「奈央」

「伴、嫌い!!」

はっと気づいても、もう遅く。ざっくりと傷ついた顔をする伴がいた。

「ごめん。気分悪くて、気が立ってた」

言い訳のように呟いて、扉を開ける。ひゅっと冷たい風が入ってきて、温かかった室内の温度が一気に下がる。

「ほんと、ごめん。ちよつと疲れてるだけだから。明日、ちゃんと話し聞いて、今日のことも、絶対謝るから」

だからもう、私に惨めな思いはさせないでよ。声かけられるたびに、叶わないということを実感してしまうから。

「奈央。お前……」

「ごめん。伴。名前、呼ばないで」

はつきりと、倅ちゃんの名前を呼ぶときと違うと分かってしまうから。そこにこめられたモノの差を、私は分かってしまうから。

同じ声で、同じトーンで、でも明らかに違うと分かってしまう呼び声。

私は、ついに過ちを犯してしまった。

「あんたは、絶対に、こつちを見ない奴よね？」

確認するようなその口調を、止めようと思ったのに。あふれる涙も、止めようと思ったのに。

「奈……」

そこで伴は止めた。名前を呼ぶなといったことを、思い出したらしかった。また、傷ついた顔をする。

ごめんね。私が傷ついた分だけ、伴も傷ついて。誰にも責任がなくて、私だけが悪いんだとしても、どうしても、一人で傷つくのは嫌なの。

意地悪で、どうしようもなく性格の悪い私を許して。

ちゃんと、謝るから。何年かして、もうこの気持ちさえ思い出せなくなったら、ちゃんと訳を話すから。

笑いながら、『馬鹿な恋をしたのよ』って言えるように、するから。

それまで、それまでの何年かだけ、私が十年勝手に傷ついただけ、伴を傷つけるのを許して。

「知ってるの。伴が倅ちゃんを……倅ちゃんしか大切にしないこと」「それは……」

「知ってるって、言ってるでしょ。家族間の愛情だって分かってる。分かってる分、痛いんだよ。『私が』辛いのは私の、勝手なの。」

傷つくのも、

傷つけるのも、

好きになるのも、

諦めるのも。

「比べられなくて、おさげにしたの。眼鏡もして、大好きな色もなくした。彼女が続けてるピアノも止めた。フランスも……嫌いになるかもしれない」

彼女がこれから好きになるであろう、フランスを。かおるくんが

育ったところを。

「前に、倅ちゃんに『優しいですね』って言われたとき、正直驚いたわ。だって、私優しくないもん」

傷つけてるだけだもん。

「私が優しいのは、もしかしたら……いつかは伴がこっちを見てくれるかもしれない、って思ったからだよ。そのときの、伏線だよ」
全部自分のための、優しさなんだよ。

「それに気が付かないなんて、伴はバカ。すっごいバカ」

ゆっくりと髪を止めていたゴムを外す。きつく結んでいた髪は少し緩んだだけで、簡単には解けなかった。

眼鏡を外すと、少し視界が開けた気がする。これで少しは、本当のことが見えるようになるのだろうか。

「もう、このみつあみも、眼鏡も、必要ないね」

本当は、もつとかっこよく、言いたかったよ。泣いてる姿なんて、見せたくなかった。ボロボロになった姿なんて、晒したくなかった。
「本当に……バカなんだから」

伴も 私も。

くると扉から出て行こうとするのを、阻もうとする手を逃れる。ただそれだけなのに、どうしてもか、治まり始めていた涙があふれ返った。

「もう、泣かせないでね」

これが、あんたの前で見せる、最初で最後の涙になればいい。そうしたら、強くなれる気がするから。

視界がぼやけて、伴がどんな顔をしているのか分からなかった。だけど、きつと寂しそうにしているんだろう。

「ごめん」

右手の手首を掴まれた。

とっさに振り払おうとして、そして……振り払えなかった。振る手に力が入らずに、だらりと垂れ下がった。

ここまで来て、私はまだ伴のことが好きなの？

どうしても、私は伴から逃げられないの？

「いいよ……、もう。私が、全部悪いんだし」

「奈央！！」

大きな声で、呼ばれた。その反動で、最後の涙が零れ落ちたのを見て、伴があわててごめんと謝る。

「お前の、悪いところを教えてやろうか？」

少し膝をかがめて、伴が私と視線を合わせる。握られたままの手は、何も感じなかった。

「お前はなんか悪いことがあると、自分のせいにしたりすぎだ。そんで、それを全部溜め込みすぎ、我慢すぎ、無理すぎ」

見てて…… ちょっと自分が情けなくなる。

何にもできない自分が、情けない。

「そんなの、私の勝手でしょ？ 悪かったわね！ 無理すぎで。

しょうがないでしょ。今回は明らかに私の一人相撲にあんたを巻き込んで、勝手に怒って泣いて、あんた傷つけて」

最低だ。私は。

「私が悪くなきゃ、誰が悪いっていうのよ！ 誰のせいにすればいいのよ！！」

私が、私があんたなんて好きにならなければよかったの！！ 普通の、私を大事にしてくれる人を好きになればよかった。なのに」

なのに、よりもよって、好きになったのは絶対に望みのない奴。離してよ。伴。お願いだから、もう、はな、して」

ふるふると体が震えだす。怒りと悲しさと、心の中にある、感じたことのある全ての感情が混ざり合う。

「もう、惨めすぎるから……、ちゃんと諦めるから。だから、はなして」

もう、好きとか言わない。傷つけない。迷惑かけない。だから、はなして。もうこれ以上、私にかまわないで。

痛い。

い、たい。

いたいいたいいたい。

体のどこかが血を流す。だけど私はそこがどこだか知らないから、手当ての仕様がなない。

そして出血はひどくなる。私の手を、染めて、流れ出す。止めようと必死に体中を探すのに、痛みだけがひどくなって、血に涙が混ざる。

助けてと呼ぶ声も、喉で潰える。助けてくれる人なんていないことに気が付いたから。

「奈央。ごめん。俺、バカだから、何にも考えなかった。

いつも笑って、優しくしてくれて、倅を大事にしてくれるから。そんなふうに見えてるとか、思わなかった」

するりと、倅の手から私の手首が外れた。握られていたところが酷く寒く感じて、そっと左手で握る。

『痛い』という言葉の口元を押さえた手で封じる。そうしないと、嗚咽とともにたくさんの言葉が出てしまいそうだったから。

「俺、なんかしでかしたあとで気づくんだよ。昨日も、倅を傷つ…ごめん」

そのごめんは、多分、倅ちゃんの話を出したからだろう。いいよ、とは言えなかった。逆に、もう言わないで、とも言つ資格はなかった。

「でも、奈央。諦めるとか、言わないで欲しいんだけど」「は？」

大丈夫、奈央。

変に心を動かしちゃ駄目。こいつはいつだって、期待はさせる奴だから。いつだって、あとで落ち込んだでしょ？

だから期待しちゃう駄目。

「だから、今は別に、恋愛感情とか持ったことないからわかんないけど、今奈央が泣いてるのを見たら、何か倅が泣いてるのとはまた違う感じがしたから」

それは私より倅ちゃんが大切なんでしょ。

「俺も、そろそろ倅から卒業しなきゃいけないと思うから」

ちらりと横目でこちらを見てから、倅はこちらへと向き直った。

「よく、分かんないけど、奈央は他の奴とは違っって言っるのは分かるから」

彼は、優しくて、残酷で、やっぱり残酷なんです。どこまでも、私をおぼれさせて、逃げ出そうと思うと罠にはまるんです。

一番、愚かなのは、泣いても、怒っても、諦めが付かない私なのかも、しれないけど。

「送ってくよ」

「いいよ」

「送って行きたいの」

「……お願いします」

「……あつ」

目の前から、見慣れない組み合わせが歩いてくる。

「かおるくん。倅ちゃん」

「あ、奈央さんだ」

名前を呼べば、パタパタとこちらへ走ってくる。手をつないでいるかおるくんも強制的に早歩き。

「芳さん、加藤 奈央さん。お兄ちゃんの変人ぶりに付き合ってる人で、すつごく優しいの」

この兄妹は本当に、どこまでも優しくて残酷だ。

「知ってる」

「昨日、今日会ってるもんね。幼稚園一緒だし」

倅ちゃんに向けられるかおるくんの視線は優しく、好きなんだあ、って思うほどで。

「芳さんと奈央さんもお友達なんですか！」

何で私覚えてないのー！！ と、倅ちゃんが叫ぶ。

まあ、私も倅ちゃんに会ったの小学生になってからだし。かおるくんは会ってないだろ。

「で、お前は奈央ちゃんに気持ちに気づいたんだ？ そうやって帰ってるってことは」

「お前。幼稚園での癖抜けないのか？ 高校にもなって『奈央ちゃん』とか」

「妬いてるわけ？ 妹取られたし？」

「お前、わざとだろ」

むっとして返せば、芳は笑う。

「ともかく、よかったよ。俺があっ^{フランス}ちに行ってる間に進展してんのかと思っただのに」

「何で」

聞き返すと芳はにやりと笑った。人のよさそうな、穏やかな顔が腹黒く思えてくるのは長年友人をやっている所以か。

「だって、お前。俺が『奈央ちゃん』と仲良く話していると機嫌悪くなつてたし。知らなかったのか？」

わざとらしく『奈央ちゃん』と呼んでいるのが非常に憎たらしい。「まあ、ゆつくり自分の気持ち確かめてみたら？　俺の『一目ぼれ』みたいに恋らしい恋に目覚めるかもよ」

「お前、人から妹を取っておいでよくも」

返す言葉を搜していると、後ろから声が聞こえてくる。

「伴。かおるくん。」

もう日が暮れるから帰ろう。私ここでもういいから」

「奈央、それじゃ約束が」

「いいよ。あんまり遅くなると、お母さんたちも心配するでしょ？」

どこまでも、大人な彼女の台詞は聞きなれたものだった。

「お前のもう一つの悪い癖」

「へ？」

「遠慮しすぎ」

昔から。彼女は遠慮するのが上手だった。遠慮してないように見せかけて、遠慮している。

もうずっと、そうやって生きてきたのだろうか。

「俺と一緒にいるからには、遠慮してると振り回されるぞ」

「いいよ。ずっと振り回されてるから」

それでも嫌いにならない私って、かなりしつこくない？　重いでしょう？

そうやって笑う彼女の顔が可愛く見えたのは、夕日と言葉の所為にして。

「倅。先帰って母さんに彼女送ってるって伝えてくれる？」

「え？　ええ！！」

「分かったから、送ってあげたら？」

驚いている倅に芳は平然と帰るように促している。

「送るよ」

「あんた、今取戻しが付かないこと言つたって気づいてる？」

重いつて言つても、離してやんないんだから。

ふわりと笑つて彼女は言った。みつあみにされていた髪に軽く癖
がかかり、肩のところで浮いている。

多分これが、恋の始まり。

ちがう（後書き）

ヘタレな変態おにいちやん、が好きです。そういう方が好きです。他のお話でもそういう雰囲気を持つ方がいらっしやいますが、彼より重症な伴くん。

実はモテモテなのは秘密です。その片鱗さえ見えませんが、結構なイケメンさん設定。

勉強も運動も出来るんですが、なにぶん変態、なので……。

友人から『変態』のレッテル貼られまくりの彼を実は愛してるなんて、言えないいつきです。

奈央ちゃんが可愛ければいいかな。もう。

試練（前書き）

『ちがつ』の続きです。

友人にこっちへ載せてることがばれました。……どうして見つかったのか、すごく不思議です。友人のネット回線（？）が読めない。ま、降ろすつもりないけど。

試練

「ねえ、お兄ちゃん。どうして今日は一人で帰ってるの」

「倅^{ゆき}。言っつていいことと悪いことがあるって知ってるか」

リビングで静かな攻防戦が繰り広げられている。殴り合いというものをしたことがないので、我が家でのケンカはこれが普通だ。

と…… いうか、可愛い妹を殴るなんて野蛮な行動俺にはできない。

「ねえお兄ちゃんってば」

「聞きたいことがあるんならはっきり言えよ」

本当は言われなくても分かっているが。

「今日はどうして、奈央^{なお}さんと一緒に帰らなかったのって聞いているの。分かっているでしょ」

二つにまとめてある髪が可愛らしくはねた。あゝ、本当に可愛いよな。うちの妹は。

そう思っていると、いきなり隣から頬をつねられた。

「それは、甲斐性なしの伴が振られたからに決まってるじゃない」

「え、お母さんそれ本当!？」

おおよそ四十台半ばとは思えないほど童顔な顔がこちらへと向けられる。見た目は美人だが、性格はいかんともしがたい。

これで愛しの倅^{いもつと}とそっくりなんだから、たちが悪い。

親父はきつとこの顔に騙されたんだな、とそつと思う。むろん、こんなことを口に出そうものなら、即刻死刑だ。

「それはそうよ。いつもいつも倅、倅、倅!! いくら奈央ちゃんみたいないい子でもいい加減、愛想尽きるでしょうに」

まったく、何をしているのかしらねえ、うちの息子は。

そう言っつて母親はわざとらしく頬に手を当て、ため息をついた。

ケンカを売っているようにしか思えない。

いや、事実売っているに違いない。

「ダメだよ! お兄ちゃん。早く行っつて謝らなきゃ」

くんくん、と倅が袖をひっぱる。

そのさまさえ可愛いなあ、と思ってしまうが、俺の周りの連中はそれが異様に移るらしい。

可愛いものを愛でて何が悪い、と反論するも『お前は変態だ』というレッテルを貼られる。

「お兄ちゃんみたいな変人をね、いつまでも好きでいてくれるのは奈央さんだけなんだからね？」

「そうよ。伴。あんたこの機会を逃したら、一生独身よ？ それでモイいの？！」

お父さんみたいに優しくないんだから、もてないでしょ」

あんたは自分の夫と息子を比べてんのかよ。

「お父さんみたいに優しくしたら、それはもう、女の子なんてよりどりみどりよ」

「じゃあ、何でこんなの選んだんだろうな……」

小さく呟くように反論すると、ニツコリと微笑まれた。キレイなだけに、その奥にある殺気が怖いんですけど楓さん。

「あんたに『楓さん、いつまでも大切にするよ』って言われても魅力がないわ！」

「何で俺がお袋に『大切にするよ』って言わなきゃいけないんだよ！！」

「じゃあ言ってみなさいよ。『奈央、絶対大切にする』って。ハイ、どうぞ！」

じりじりと母親と妹が迫ってくる。どちらも顔は可愛い。確かに可愛い。身内の欲目を引いたって、可愛いに違いない。

しかし……どちらも女特有の性格の悪さが垣間見える。

「ほら、早く」

「何で本人いないのに言わなくちゃいけないんだよ」

「本人がいたら言うんでもいうの？」

鋭く突かれて、うっと詰まった。

冗談じゃないが、妹でもない人間に『可愛い』とか『大切にする』

とか言うのは並大抵の努力でもしない限り恥ずかしくて言えない。
「いつまでも奈央ちゃんがあんたを好きでいると思ったら大間違いなんだから」

あんなに可愛いのよ？ すこし手を加えただけですっごい美人になっちゃうのよ。

それが周りにばれちゃったらどうするの。

「あんたみたいな超シスコン男、すぐに相手されなくなっちゃうんだから」

現に今日だって、一緒に帰ってないでしょ。

「それは……あいつが今日用事があるからって言うから」

「甘い！ 伴、甘すぎるわ」

そんな顔を近づけないで下さい、真面目に怖いです。

「あんたまだ『好きだ』とも何とも言ってないんですよ」

そっぴいえは言ってない……けど。

「あんたねえ、本当にソレ、最低よ？」

母親がやっと落ち着いて顔を離れた。

憂いを混ぜたため息が一回、ふうと長く吐かれる。

「奈央ちゃんには言わせといて、自分は言わないとかどれだけ卑怯なのよ。それをやっているのは女の子だけよ」

相手には言わせて、自分は絶対に言わない。

「女ならいいのかよ」

反論すると、ニヤリと笑われた。

「違うわよ。『女の子』だけ」

それがどういう意味か、分からなかったが、反論するのもめんどくさくて頷いておいた。

どっちみち、この家で女にか勝とうなんて思っではいけないのだ。
「手始めに『奈央、好きだ』。ハイどうぞ」

「……好き、だ」

声が小さい！ とすぐさま湯が入る。

「奈央、好きだ」

「じゃあねえ」

またニヤリと笑う。あの、本当に恥ずかしいんですけど。どうしてくれようか。このおばさん。

「『奈央、愛してる』」

「言えるか!!」

すぐさま突っ込むと、ネクタイを引つ張られた。怖い、怖い、本当に怖いんですけど!!

「あんたねえ。本当に言う気がないの、それとも思っていないの?」
「思っていないことはない」

反論するようにすぐさま言つと、『ふん』とおかしそうに笑われた。

この人、確信犯だ。

「ねえ、お兄ちゃん、言ってみてよ」

「伴、思ってるんなら言わなきゃ。練習よ、奈央ちゃんいないんだもの」

どうして我が家族はこうなのでしょう。

「あ……」

言えるわけがない。

「愛してる!」

半ば自棄で言つと、少しだけ二人とも驚いた顔をした。

「言つた……」

「言つたわねえ」

二人で何かを見るような目でこちらを見て、すぐさまキッチンに向かつて声を上げた。

「奈央ちゃん、聞こえたー?」

おいちよつと待て。

「えつと、ハイ」

困りながら出てくるのは、一時間前に『今日早く帰らなくっちゃいけないから』と帰っていった人間だった。

「やばい、まじで面白い」

かある
芳……。

「芳さん、そういう言い方はダメだよ。お兄ちゃん頑張ったんだから」

「あ、でもかおるくんが言うと、違和感ないよね。『愛してる』でも『ジューテーム』でも」

くすり、と顔を赤くしつつも奈央は笑った。

「そう？」

「うん。なんかね、フランス紳士って感じ」

「Je suis amoureux de toi .」

「何て言ってるのか分からないよ」

何て言ってるかは分からないが、俺の神経を逆なでしているらしいことは分かった。

「これは倅ちゃんへだからね」

「じゃあ、愛の告白だ」

また奈央は笑う。

「いいわねえ、若いつて。」

まあ、約一名、ぜんぜん若さを謳歌していない人間がいるけどね」

いやみなのかそう言つて、母はこちらへと奈央を連れてきた。

「可愛くない？ 髪を巻いて、お化粧してみました」

よくよく見れば、髪形はいつもと違う。あれ以来みつあみにはしていなかったが、急激に外見を変えることがなかったので驚きだった。

緩やかに巻かれている髪はふんわりと輪郭を彩り、真っ黒の髪がわずかに光を反射する。

薄くひかれた化粧が肌を光って見せた。そして唇には淡く、少しだけ色のついた口紅。

「グロスにしてもよかったんだけど、ちょっと派手になるから」
母親が『でもかわいいー』と絶賛する。

「ちょっと、言わせてみたかったんだけど。どう？ 奈央ちゃん」

「びっくりしました。伴は言わなさそうだから」

くるり、と瞳がこちらを向いて細められた。

「無理しなくてよかったのに」

そう言われると、小さくイラリときてしまう。

「奈央、ちょっと」

手を引っ張って、部屋を出ると、少しためらって奈央の耳元に唇を寄せた。

「」

びっくり、と奈央が震えた後、赤くなった。たぶん自分も赤くなっているんだろうと安易に想像がつく。

「伴は何だって？」

「芳には関係ない」

ひょっこり顔を出した友人に言い返して、奈央に手を差し出した。

「送っていく」

「お願いします」

以前より素直に、手を握ってくれるようになった。なのでそのまま玄関から出ようとする。

「倅以外に興味がなかった伴もついに年頃ねー」

そっという母親の言葉を無視して。

試練（後書き）

芳くんのフランス語はまあ、ご想像通りです。
伴くんの言葉は好きに入れていただいて結構です。

この二人は幼稚園時代も書いてみたいところ。

そういえば、友人のイメージでは奈央ちゃんはもう少し運動しそうな子らしいです。スポーツガール。

ちなみに髪は短めだそうですよ。伴くんがスポーツ好きだったの
で、わたしはあえて静かな子にしてみたんですけどね！。

つくりモノ（前書き）

人外×人、です。題名の通り、『つくりモノ』であるアンドロイドと女の子のお話。苦手な方はご注意ください。

アンハッピーエンドの匂いしますが、そんなことはないですよ。

つくりモノ

どうして、死なないの？

どうして、年を取らないの？

どうして、わたしと違うの？

『お父さん、遥ようはどうして年を取らないの？』

『遥は人間じゃないからだよ』

『人間じゃない、の……？』

『そう。人間とは違うものだ』

『どうして、人間とは違うの……』

目の前にいる少年は、静かに笑う。まるでそれが、当たり前であるかというように。

『おはようございます。灯あかり様』

『おはよう、遥』

透き通るような白い肌。一度も切ったことがない、真っ黒の髪。見た目は普通より少しだけ端整で、感情も持ち合わせているように見える。

だけど彼は、私とは違う存在。

『今日はいかがいますか？』

『いつもどおり、普通に過ごすわ』

何もせず、ただぼんやりと過ごすのが私の日常。国一番のアンドロイド作りの父が亡くなってから、わたしはそう過ごしてきた。

「博士の、研究所からの手紙が来ておりますが」

「放っておきなさい。父亡き今、わたしには何もできないから」

本当は、作るうと思えばアンドロイドは作れる。だけど父のように、感情豊かな、生きているようなモノは作れない。

わたしが作るのは、あくまで人間が求めている従順な機械。

「遥。父が亡くなって、どうしてあなたは敬語しかしゃべらなくなったの？」

前は、もつと普通に接してきたでしょう？

「私は、博士に作られた存在ですから」

博士がいない今、私はただのアンドロイドです。

「アンドロイドにも、死者を悼む気持ちがあるの？」

「博士がそのように作られたのです」

父が彼に植え付けた死者を悼む気持ちは、父が母を悼む気持ちだからわたしが父に持つ気持ちより、ずっと深い気持ちだろう。

「ねえ、わたしたちは」

何が違うのかしら。

遥の肌は少し冷たい。だけど人並みの温かさはある。手に触れば柔らかく、人の肌と何の違いもない。

だけど彼の髪は伸びないし、体温は常に一定だ。食事も睡眠もいらないし、病気もしない。

「全て、違いますよ」

彼の表情は少しだけ寂しげで、わたしは彼の裾を引っ張った。

ベッドの中の足が寒くて、なかなか出れない。

「遥」

そつと呼びかけると、彼はかすかに笑った。そしてベッドの橋へと座り、わたしを抱きしめる。

「アンドロイドを、おつくり下さい」

しかしわたしは次の瞬間、遥を押し返していた。

「イヤ、よ」

わたしはそんなもの作らない。彼のような温かみの欠片もない、ただのロボットを作るつもりはない。

「わたしが作るのは、あくまでロボットよ。感情も何もない、ただ人間の言うことを聞く、哀れな操り人形」

それ以上でもそれ以下でもない。ただの機械。

「私も、機械仕掛けですよ」

この体も、抱く感情も全て紛い物。

「遥は、特別な」

もうこの世に残った、私のたった一つの家族。

「あなたの才能は稀有である、と博士もおっしゃっていたではありませんか」

そんな言葉聞きたくなくて、わたしはベッドから抜け出した。差し出された上着を着て、食卓へと向かう。

用意してある朝食のメニューが一緒だったことはこの六年間、一度としてない。

父が亡くなって以来、ずっと彼が作っている食事は母の味だった。

「戦争が激化しているようです」

「そう」

わたしの能力が求められている理由はただ一つ。

戦力になるアンドロイドがほしいからだ。戦うための、壊れるためのロボットのほしいのだ。

他の国に、そのような技術は存在しない。

操作をする、または指示を出して初めて成り立つ軍隊ならば存在するが、かつて父が協力して作ったような、指示から実践までをアンドロイドだけで実行する部隊は他にない。

そこまでして、人間を死なせたくないのならば、始めから戦争なんてしなければ良いのに。

「どうして、作られないのですか？」

朝から同じ質問を繰り返されたわたしは、ついに感情の箍が外れ

た。

「アンドロイドのあなたには分からないわ」

作り物の、紛い物のあなたには分からないでしょう？

わたしの考えなんて。

かつてアンドロイドを作ったことによって死んだ、父を思うわたしの気持ちなんて。

遥が特別だといったその口で、わたしはそう言った。たった一人の家族に対して、わたしはそう言ったのだ。

「確かに、私は作られたものですから、人間の気持ちは分かりません」

遥の感情を見て、初めて後悔した。

ただど謝ることもできず、言いつくろうこともできず、わたしはただ席を立った。

「お待ちください」

いやだ、とも言えなかった。ただ泣きたくなくて、でも感情を出すのがイヤで部屋へ入って鍵を閉めた。

「灯様」

心配そうな遥の声が聞こえる。そのとたん、涙が出た。どうしてこうやって感情を出すこと自体、わたしには難しいのだろうか。

「灯様、私が悪かったですから、どうか出てきてください」

どうして、遥にできることがわたしにはできないのだろうか。

わたしは人間なのに、どうして、できないんだろう。

「遥、あなたは、自分の感情全てが、紛い物だと思う？」

「そうですね、始めは……それがたまらなく嫌でしたが、最近はあまり気にしていません」

「そう……」

作り物の感情を、気にしなくなる？

そんなこと、ありえるはずがないのに。自分が考えることさえ、

全て他人から与えられたものかもしれないという恐怖は、その人を蝕む。

かつてわたしにも経験があった。アンドロイドを何の不思議もなく受け入れたわたしは、変なのではないだろうか。

まだ父がいたとき、学校へ行つて自分と他人との落差に気がついた。

『アンドロイドは、人間の道具でしょう？』

『なぜ、家族だというの？ 変よ』

『人間じゃないのに……気持ち悪くない？』

わたしが、変だというの？ 遥を大切に思っているわたしが、おかしいの？

「遥、遥が好きなたしは、おかしいのかな？」

「どうして、そう思われるのですか？」

「アンドロイドは、人と違うから……アンドロイドに特別な感情をもつ人は変なんだって」

変、だから、父が亡くなった後わたしは学校を辞めざるを得なかったのだろう。

「では人間に特別な感情を持つアンドロイドは、おかしいと思いますか？」

「いいえ、あなたが父やわたしを大切に思ってくれたことは事実だから」

そしてその事実が、幾度もわたしを救ってくれたから。

そのときだ。乱暴に家の扉が叩かれた。

「こちらは帝国陸軍だ。貴殿がこの家の住人か？」

「いえ、私はただの手伝いです」

彼がアンドロイドだと名乗らない理由は一つ。彼らはわたしたちの味方ではない。

部屋の鍵を開け、玄関に向かうと屈強な男が一人、立っていた。

「何のようですか？」

「貴殿が……相馬博士の跡継ぎか？」

「わたしが、相馬灯です」

そう言うのと、その男は不愉快そうに眉を顰めた。まるで騙されているというように。

「私が聞いていた話では、博士の跡継ぎは博士を超える神童だとか」「わたしは父のようなアンドロイドは作りません」

きつぱりと断ると、男は笑った。

「作る、作らないの問題ではない。貴殿がここに住む以上、貴殿は帝国に属する人間だ」

だからどうしたというのだ。

「貴殿は、帝国に貢献できる人材。これは依頼ではない。国民の義務である」

いらり、と感情が波立った。遥はそれが分かるように、わたしの手を握る。

「お断りいたします。わたしは父のような過ちを起こしません」

父は戦争に加担したことを酷く悔い、そして帝国の依頼を蹴った。そして……殺された。

「父のように殺されようが、何をされようが、戦争に加担するつもりは毛頭もございません。お引取り下さい」

なぜそれさえも許されないのだ。

男は笑って、今度は遥の腕を掴んだ。

「ならばこの男をもらっていきましょう」

私に分からないとでも思ったのか？ 相馬博士が一番出来のいい『紛いモノ』を跡継ぎの人間に残したのは、有名な話だろう？

「ばらばらに分解すれば、少しは技術者の勉強になるでしょうから」「あなた！ 何てことを……」

あまりの恐ろしさに、震えた。

遙をバラバラにする？ わたしでさえ作れない遙を、治せる人間が父以外にいるとは思えない。

「この細腕に、どんな力があるのかとても不思議ですなあ」

笑う。

晒う。

……この人は、本当にアンドロイドは機械でしかないと思っている。痛みを感じ、感情を持つものではないというように。

「さあ、帝国の軍人の言うことが聞けないのか！」

こんなの間違ってるのに。

「やめてください。遙を、研究のためにバラバラにするなんて」

連れて行こうとする男を止めようとする。遙は抵抗しない。……

抵抗すれば、わたしがどうにかされるとでも思っているのだろうか。

「ほう」

男は笑った。

「アンドロイド作りのお嬢さんは、アンドロイドに恋でもしているのかな？」

あざ笑うような声に、体が震えた。凶星……だったからだろうか。

あまりの恥ずかしさに顔も上げられなかった。

こんな男に晒われているという事実に泣きたくなくなった。

「おやあ、凶星ですか」

おかしそくに晒う。

「やめてください」

遙の言葉を聞いて、今度こそ男は大きな笑い声を聞いた。

「おやまあ、相思相愛か。まあ……人間とアンドロイドだ」

それは、無駄だという意味だろうか。

「遙を放して、お引き取りください。先ほど言ったとおり、協力するつもりはありません」

「お前は……！！ 帝国の国民として生活しているくせに協力できないというのか」

殴りかかろうとした男をわたしは見ていた。殴られるはず……ないのだから。

「お引き取りくださいと、主人も申ししておりますので」
そう言つて遥は男の腕をひねりあげた。

アンドロイドだからこそ、その細腕に人間以上の力が宿る。

「くっ……」

それは、軍人だからといって逃げられるような生半可な力ではないのだ。

「お分かりいただけますか？ わたしはこの力を理由に他国へ侵入するあなたがたの気持ちを理解できかねます」

お帰りくださいますね？

確認ではなく、あくまでそれは命令だ。力にものを言わせる、一番嫌いな方法だ。

「お茶を、お淹れいたします」

「お願い」

ぐつたりとイスへ体を寄りかからせると、わたしは息を吐いた。
我ながら勝手なことをしたもんだ。

軍事力が一番の武器である国に住みながら、軍人を敵に回すとは。
「ごめん、勝手なことしたわ。早いうちにこの研究所から出なきゃ」
そうしなければ反逆罪か何かで捕まるかもしれない。一度捕まったら、多分一生わたしは国の研究所で研究して、死んでいくのだろう。

遥を残して。

「遥……。どこか行きたいところがあるのなら、行ってもいいのよ？」

さっき、男に連れていかれる遥を見たとき思った。

わたしは、遙をここへ縛り付けているのではないだろうか。父と彼の思い出を盾に、ここへ逃がさないように捕まえているのではないだろうか、と。

「灯様」

どうしよう……。

離れていかれるのは辛い。だけど私もいつか死ぬのだ。父のように、母のように。

彼に再び、同じ思いをさせてしまうのだ。

「私は必要ありませんか？」

必要ないと、言うべきなのだろうと思う。そうすれば、遙は自由になれるのだから。

だけど何も言えなくて、話題を変えた。

「遙、あなたはさっき、わたしに、アンドロイドを作るべきだといったけれど」

あなたは、あんな連中のためにわたしがアンドロイドを作ってもいいの？

「そうではありません」

ただ、あなたは博士の失敗を恐れ、自分の能力を捨ててしまいうなのです。

「わたしは、確かに、父と同様、機械に長けている人間の部類でしょうね」

でなければ、十六という年で父の論文を読破し、遙の体を調整したりはできないだろう。

「でも、わたしは……作る人間も、作られる人間も幸せだと思えない」

作った人間は、神の意志を曲げ、理に逆らった罪を負う。

作られた人間は、作られた存在であると知り、紛い物の感情を負う。

そして作った人間は後悔し、作られた人間は存在を晒う。

「私の幸せは、あなたが決めることではありません。たとえ私が作

られた存在であつたとしても、紛い物の感情であつたとしても、それは関係ありません」

私が幸せだというなら、それは本当の幸せなのです。

「たとえば、後で後悔しても」

「遥は、本当に私以上に……」

人間らしいとは言えなかった。

「行きましよう。わたしの知識が外でどれだけ役に立つかわからないけれど、機械関係の仕事はありあまつてるでしょう、今の時代」

「お供します」

遥が手を差し出すので、そつと握った。荷物を準備して、アンドロイドの開発に関係するデータのコピーは削除しなくては。

「忙しくなるけど……」

時間があつたら……。

「女の子のアンドロイドでも作りましようか？」

わたしがいなくなっても、あなたのそばにずっといてくれる恋人でも。

「結構です」

「無理しなくていいのに」

あなたが死ぬその瞬間までお供させていただければ、いいのです。

アンドロイドには心がある。紛い物でも、作り物でも、本人が本物であるといえ、それは本物なのだ。

「それはすごい殺し文句だわ」

アンドロイド作りの少女は、生まれて初めて国を出た。

つくりモノ（後書き）

もう少し切り込んで、しっかりと書き込みたいテーマなのですが、死ネタになりそうなのでやめます。

んー、人外×人、は私にとつて書いても書いても納得できないテーマの一つ（幼馴染、同じ感じ）なのですが、やっぱり難しいですね。

もう少し、切なさだけじゃなく、そこにある喜びみたいなものも書きたいです。

世界を失う（前書き）

バッドエンドです。お気をつけて！！ ちょっと不思議な世界観。いつか違う時間軸で書いてみたい雰囲気、小さい区間で切り取りました。

悲しくも美しく、を目指しましたが、あえなく撃沈。いつか綺麗に雰囲気を取り取れたらいいなあ。

世界を失う

I cannot lose a world for
thee,
but would not lose thee f
or a world.

(by By
ron)

バカらしいと、君は言うだろうか。
そんなのは自己満足だと、苦く眉をひそめるのだろうか。
俺の行動は、正しくないと、君は言うのだろうか。

世界を失う

昔、本当に昔、聞いたことがあった。君がどういう役目を負って
ここに来ているのか、俺はもうそのとき知っていたから。
君は知らないと、思っているんだろうね。自分の役目など、小さ
な神が知っているはずもないと、そう思っていたんだね。
『ねえ、もし、俺と世界とを選ぶとしたら、どちらを選ぶ？』
分かりきってはいたんだ。君は俺を選ばない。君が自分の役目を、

放棄するはずがない。

『世界を選ぶと言ったら、あなたはどうするの？』

君は、俺のために世界を失うことは出来ない。

世界のために、俺を失うようなことはあっても、その逆はきっと出来ない。

『どうもしないよ。ただ、世界のために死ぬだけだ』

どうして、俺を選ばなくせに、君は悲しそうに笑うんだろうね。世界のために死ぬなんて、真つ平ごめんだと思うのに、何故か口をついて出てきた言葉は重かった。重くって、喉元に引っかかって、それでも飲み込むことは出来ずに吐き出した。

なんと愚かしい言葉を口走っているのだろうか。

世界の真理は、こんなにも愚かで残酷だ。

『あなたは、どうなの？』

わたしと世界、どちらを選ぶの。

『そりゃ、君だろうかー』

子供っぽいと言われてしまえばそれまで、世界と人の命など天秤にかけるものでもないのかもしれない。

それでも、世界よりたった一人の命のほうが重いと思うんだ。

どの命よりも、君の命が尊いと言えば、君はきつと眉をひそめるんだろうね。

たかだか人間の命一つの重さが、そこまで大差あるとは思えない、とても言つて。まるで神の命なら、尊いとても言つように。

それは違つと、君にどうやったら分かせてあげることが出来るんだろうか。

どうしたら、この命は、君たちの命とそう変わらないと教えることができるだろう。

『君のために、世界を失うことはあるかもしれない。』

しれないって話だから、そんなにびっくりした顔をしないでよ。いざとなったら、あっさり世界を取っちゃうかもしれないから。

それでも、世界のために君を失うことなんて、きつとないんだろう

ね

世界のために、君とつないだ手なんて放せないだろうと思ってた。たとえ全世界の人間が、それは正しくないと言っても、間違っていると言っても、自分はその手を放せないと、そう思っていた。

自分たちの命一つで、世界が救えるなら安いものだ、君は考えるのかい？

『あなたは、変ね』

『そうかな』

『変よ。世界とわたしの命なんて、天秤にかけるものじゃない』

それなのに、君はどうして今頃になって、世界と俺を天秤にかけたんだろう。

そんなこと、する必要はないのに。

天秤にかけられる価値が、俺にあるわけじゃないのに。

『逃げて』

声が響く。

『早く逃げてっ！！』

どうして、君は傷だらけなの？ どうして血にまみれて、こちらへ走ってくるの？

『世界のために、あなたを失いたくはないっ！！』

それは俺のセリフで、君のセリフじゃない

『世界のために、俺は死ぬだけだ』

ああ、だから、どうして君はそんな顔をするの？ 最初に言った

のは君なのに。どこまでも美しい世界を愛するのは、君なのに。

『世界を、失うことになる。君はそれでいいの？』

顔が歪む。そういう顔をして欲しくて、俺はここにいるんじゃない。
い。

『それとも、神殺しの罪が、怖くなった？』

傷つく君を見るのは嫌だ。それでも、俺はもう選択肢を持ってい

ないんだよ。

君は俺を殺すために毎日、毎日、『その日』が来るのを待ち望んでいた。世界のために、『^{おれ}神』を殺すのが、君の役目だと初めから分かっていたよ。

多分、君の瞳を見たあの瞬間から。

『そうじゃ……』

『なら、君は』

君は俺を殺さなくちゃいけない。

だってね。俺が生きているということは、世界を失うということ。その世界には、君も含まれてるんだって、気付いてるかな。

言っただよ。世界のために君を失いたくはない。世界はこの場合、俺自身のことなのかもしれないね。

俺のために、君を失いたくはない。

君のために、世界を失うことには、何の躊躇もない。

『いつ』

いやだ、と彼女の声が遠くなる。もう、涙でぐしゃぐしゃになった顔もぼやけていく。

『いやだっ!!』

どうして？ 美しい世界は、君の愛する世界は、守られるはずだ。何よりも美しいのは、君だといったら、『変ね』とまた笑ってくれるだろうか？

あの、愛しさと切なさを混ぜ合わせたような、少しだけ悲しそうな笑顔をくれるだろうか。満面の笑みは、いつだって見たことがないから。

一度くらい、見たいと思ったけれど、俺の存在自体が君の笑顔をなくしているんだよね。

『失いたくないのっ』

でも、世界を失うことに比べたら、たった一人の神など、天秤にかけられる価値もないだろう？

安いものだと、思うだろう？

『あなたをつ』

バカらしいと、君は泣くんだね。

そんなの自己満足だと、嗚咽をこらえるんだね。

俺の行動は、正しくないと、君は縋りつくんだね。

紛れるように、名も知らぬその人は消えていった。

名の分からぬ、神は光の粒子となり、その粒子さえ空気に溶けて消えていった。

『神様は、名前を教えはしないんだよ』

どうして、教えてくれなかったのか、今少し分かった気がする。

だって自分は今、その人の名を叫んでは泣けない。

その名を呼んで、縋りつくことは出来ない。

あんなに、人と神は同じだとあなたは言ったのにね。

『何の力もないよ。だって、死と引き換えにしか、世界を守れない』

自分はあるとき、何と言っただろう。

『神様は、死んだらどうなるの？』

ああ、そうだ。

『神様は、死んだら……そうだな。世界になる』

溶け込むんだよ。境目さえ分らないくらい。自分の前の神様と同じように。世界となり、空気となり、木となり雨となり、雲となり、火となる。

世界のありとあらゆるものになって、世界を巡る。巡って、人々を包み込む。

「溶け込んだら……、もう会えない」

世界の崩壊を免れたのは、間違いなくあなたのおかげだよ。たった一人の、偉大な神のおかげだ。長い間生き続け、消える寸前だった神。

けどね。

「わたしが泣いてるのも、あなたのせいだよ」

血のにじむ体を起こした。

彼を守ろうとして、彼を殺すことを決めた『場所』から逃げてきた。自分の役目を放棄するのは、そのまま死と同じだと、幼い頃教えられた『場所』から逃げ出した。

息を吸うのと同じくらい自然に、『神殺しは正当だ』と言い続けているところから逃げ出した。彼と出会うまで、わたしもそれを疑ったことなどなかった。

たった一つの存在で、世界が救われるなら、それはなんと安い代償だろう。たった一つのもので、幾億の命が救われるのなら、その『たった一つ』は喜んで消えるべきだ。

そう単純に考えていた、過去の自分が恨めしかった。

そのたった一つが、かけがえの一つだと分からなかったあの頃の自分はなんと幼く、愚かだったんだろう。

かけがえのない一つが失われる痛みは、こんなにも痛いのに。

これが、当然なの？

今更になって痛む傷は、きつと大切なものを失ったからだろう。

「本当は……」

本当はね、聞いて。本当はね。

「あなたを、失いたくなかった。世界を失っても、あなたを一人で逝かせたくなかった」

この世界が、どれだけの重さなんか知らない。自分の命を含めた、人の命の重さなんて、知らない。

それでも、あなたの存在の尊さは知ってたの。

どんなにかけがえのない『神』なのか、あなた自身から教わったの。

「あなたの代わりの神様は、もういるかもしれない」

もうどこかで、次の代の神様は生まれているのだろう。

そしてまた、死に近づいた神のもとへ、また一人、その神を殺す役目を負った人間が訪れるんだろう。

それは無限に繰り返される、ただの『行為』なんだろうけど。

それはこれまで以前に繰り返された、なんでもない『行為』なんだろうけど。

だけど。

「あなたの代わりの、話し相手は『わたし』にはいないんだよ」
幼い頃、あなたと会ってすぐの頃、あなたは聞いたね。

『ねえ、もし、俺と世界とを選ぶとしたら、どっちを選ぶ？』

あのと、わたしはもう、自分の役目を知っていた。

いずれ彼が、世界のために死ぬべきだと分かっていた。そして彼を、この手で殺すと知っていた。

だからかな。

『世界を選ぶと言ったら、あなたはどうするの？』

そんなことが、言いたかったわけじゃないと、言い訳が許されるなら言いたかった。

『どうもしないよ。ただ、世界のために死ぬだけだ』

それが悲しかったと言ったら、あなたは笑いますか？

「どうして、いなくなるの……」

確かに、わたしたち人間は、世界が続くことを望んではいたけれど。ずっとずっと、この優しく美しい世界が続くことを、望んでいるけれど。

「それでもわたしは」

あなたのいない世界を望んだわけじゃなかった。

あなたのいない、この世界が守りたかったわけじゃなかった。

世界は美しく、儚くて、でもどこか強い。簡単なことで壊れるくせに、いつもはそんなこと微塵も感じさせない。

「世界に、あなたはいるのかもしれないけど」

もう、あなたとは話せない。

些細なことでも、嬉しそうに教えてくれたあなたはもういない。わたしの顔を見て『君は本当に世界を体験しているねえ』と笑うあなたはもういない。この森の中、ときどき見当たらないあなたを探し歩く時間はもう存在しない。

見つけたとき、『見つかったな』といたずらっ子のように笑うあなたは、もうこの世界のどこにも……いるはずがないんだ。

世界のためになんて死にたくないと言いつつ、いざとなったらサラッとやってのけるあなたは、ズルイ。

「どこかで、信じてたのかもしれないね」

もしかしたら、世界もあなたも存在する世界もあるかもしれないと。

あなたが死ななくなつて、この世界は当たり前のように存在するかもしれないと。

「人は愚かだね」

愚かな人間を、あなたは愛していたけれど。

今日、わたしは世界を失いました。

鮮やかな、美しい世界はもう、わたしの目には映らない。

何の色も映らず、モノクロの世界で笑う人はいない。わたしの頬を撫でる人もおらず、いるのはただ『神殺し』の少女を、神聖視する人たちだけ。

世界のために、幾億の人のために大切な人の手を離れたわたしの選択を、『正しかった』と笑う人たちだけ。

ああ、彼なら、『それは本当に正しいの?』と聞いてくれるのに。

彼がいるから、わたしの世界はあんなにも色鮮やかだったんだ。

神様のいない世界は、空虚で色をなくし、ただただ虚しいだけの『存在』。

わたしの一番守りたかった、世界は彼と共に消えた。

ねえ、わたしの選択が正しかったなら、この世界は色鮮やかなはずじゃないの？

わたしの愛した世界は、美しかったのに。この世界は、もうその美しさを失ってしまった。

あなたの手を離してしまったから、この世界は色を失ったの？

『ねえ、君の選択は、正しかったよ』

風に運ばれた言葉は、空気は確かに彼で、ここにいないはずの彼を探して目をさまよわせた。

神様は、死んだら世界になる。……あなたは、本当にこの世界にいますか？

『君の、近くにいますよ。君の愛した世界になってるよ。そのどこが不満なの？』

前よりもずっと、近くに。

前よりもずっと、深くに。

君の側に、いるのに。君は気付いてないんだね。

「あなたのために、世界を失いたかった」

もう遅いと分かかっていて口に出すと、風がふわりと頬を撫でた。まるでそれが、『分かっているよ』と言っているように聞こえて、また涙を流した。

『俺は、君のために世界を失いたかった』
おれ

それだけだよ。

彼の声があまりに優しく、瞳に世界を映した。この世界が彼ならば、色鮮やかに瞳に映るはずなのに。この世界は、あまりに空虚すぎた。

そなたのためにたとえ世界を失うことがあっても、

世界のためにそなたを失いたくない。

(by バイロ

ン)

世界を失う（後書き）

変な出来です。すみません。とりあえず、バイロンの言葉を使い
たかったです。

うーん、何と云うかこういう痛々しい悲恋が好物なんです。

voice (前書き)

声フェチなのです。わたしが。

ときどき電車の車掌さんの声に惚れることがあります。ちょっと高めも、低く落ち着いた声も、甘い声も好きです。

voice

『本日の放送は、2 - 1 浅野 恭がお送りしました』

BGMと共に流れる声。深くて、澄んでいて、それでいて……少しだけ甘い声。

決して幼い声じゃない。むしろ大人びた声だ。私は目を瞑って、その声を聞いていた。

「おい……」

そうそう、こういう少し呆れたような声も色っぽくて好きなのよね、あたし。

「おい!!」

えっ、話しかけられてるのって……。

「御園!!」

「はい」

名前を呼ばれて、ようやく彼が話しかけていたのがあたしだと知った。

「何でしょうか。浅野先輩」

彼、浅野 恭先輩はあたしより一つ上の学年の放送部員。そしてあたしも、この放送部の一員です。

まだまだ一人で、なんてさせてもらえないけれど、それでも何だかんだ言いつつ楽しい部活動を送っています。

「おっ前、寝てたのか……」

怒りを押し殺したような先輩の声を聞き、慌てて弁明する。

「そ、そんなことないです！ 先輩のすばらしい美声に耳を傾けていただけですよ。」

耳だけに神経を集中させるために、目を閉じてただけです。先輩がしゃべってるのに寝るなんて、もったいない」

そう一気に言うと、先輩は虚を突かれたような顔をした。何でそんな顔をするんだろう。

「分かったから、そういうことを言うな。恥ずかしいから」

「ええ。事実なのに」

そもそもあたしが放送部に入ったのも、この先輩の声に惚れたからだ。もう、初めて聞いた瞬間、しばらくの間何も手につかなかった。

そのくらい衝撃を受ける声だった。そして、そんな声を出す人に会ってみたいと思った。

「この声の、どこがいいんだか」

「深くて、凛と澄んでいて、でも決して高い声じゃないんですよ。むしろ、低くて落ち着いてて高校生にはない声です。」

それでも、若々しいハリのある声で、それで時々甘くなる声なんです……！

もう、本当に素敵なんですって……！ この声で告白とか、先輩……！

断られたことないでしょう？！ この声に惚れない人がいたら見てみたい。

もう、大好きです。愛してます……！！」

長々とそう言うあたしを、先輩は呆れたように見つめた後、また話し出そうと口を開いたあたしの口をふさいだ。

色っぽい展開を期待した方々、残念ながらあたしの口をふさいでくれたのは、今はまつてるハチミツメロンパンなのです。

このとろりとした食感が何とも言えず。

「それ食って、黙ってる」

返事の代わりに一つ、頷き返した。

「あのな、一つ言っとくけど、これはアイツに頼まれたからなんだからな」

「ひってまふよお」（知ってますよ）

「だから、ここの正式な部員じゃないんだ」

「わかつけまふ」（分かってます）

パンを咥えたままだけれど、何とか会話が成立していた。

いつもあたしが発音練習しているその賜物か、それともただ単に

先輩がよく聞いているだけなのか、分からないけれど。

「それでも、時々でも先輩が放送するんなら聞きたいじゃないですか。」

それに、先輩の声を毎日聞いてたら、あたしの身体が持ちませんよ。興奮しすぎて。だから、時々でいいんですよ。ありがたみが上がるじゃないですか」

そう言つと、『食うの早いな』という声が返ってきた。『啜えたままの会話ってやりにくいし、行儀悪いでしょ』そう返す。

「行儀、ねえ。それなら、安易に人のどこが好きとか言っちゃいけないとか習わなかったか？ 社交辞令にも程がある」

「いえ、全く。どっちかって言つと、積極的に伝えちゃいなさい、というのが我が家の方針ですよ」

そう言い返す。すると、先輩はもう何も言わず、だけど怒らせちゃったのかな？ と思つてゐるあたしの方を向いて笑つた。

「もう昼休み終わるぞ。戻んなくていいのか？」

小さくあたしのことを気にかけるその声も、あたしにとっては甘い。

「先輩つて、そのうちその声で、あたしを殺す気ですよ……」
そう言つて、あたしは放送室の扉を開いた。

「でね、でね。今日の先輩の声は、とっても素敵だったの」

「ハイハイ。ただ、浅野先輩がよくそんな言葉貰つて我慢してたのね？ 絶対すぐに立ち去ると思つたのに」

そう言つのは同じ放送部員である由香だ。ただし彼女は、中学生時代から放送部員をやっており、大会などにも出たことのあるベテランさんだ。

目下あたしの師匠として、毎日練習に付き合つてくれている。

「大体、先輩の声ってそんなにいいの？ 確かに落ち着いた印象はあるけど、あんたが絶賛するようには聞こえないけど？」

こいつは何にも分かってないな。あの声の良さが分からないなんて、声で勝負する放送部員としてどうなんだろう。

「いいよ。あの声大好き。もうそのうちあの声で殺されるかも」

「何で？」

何で、ですと？ そんなこと、はっきりとは分からないけれど。

「え？ 興奮のしすぎ……？ 呼吸困難。心臓の爆発。えっと、頓死」

「何。それ」

「と、とにかくすぐく心臓に悪い声だよ」

もちろん、いい意味でだけ。

「何か、心臓鷲掴みされた感じかな。バクバクして、心臓が痛いくらいに鳴るの。肺とかを圧迫して、息が、できなくなる」

そう言くと彼女はにやりと笑った。

「恋だねえ」

「ち、違うよ！！ 声に恋してるの！！ そんな、にやけられるような意味の声じゃないよ」

「ほお、『声』に、恋してる、ねえ？」

突然背中から声が聞こえた。普段聞きたくてたまらなくなる声の持ち主が、後ろにいる。

「せ、先ば」

くるりと振り向き、にこつと笑った。笑うようには努めたつもりだが、内心冷や冷やしている。

だって、ほら。気持ちいいもんじゃないでしょ？ 声、に恋してるとか。

「こんにちは。呼んでくれたらよかったのに。ちょっと、びっくりしちゃいました」

きちんと笑えているだろうか？ ちゃんと、笑顔になっているだろうか。顔は……引きつってないだろうか。声は。

「お前は、声、声、声。声しか、興味ないんだな。人を、見てないんじゃないか？」

少しだけ怒った声。あたしは、声だけにしか興味がない？

「ううん。そうじゃないんですよ。先輩。ただ他のところより、重きを置いているだけです。」

顔よりも、頭の出来よりも、運動神経よりも、って感じ」

でも、でもね？

「でも、あたし」

言葉が続けることなく、たんつと、机に手を突いて席を立った。

「それでも、先輩がそう言うんなら。あたしは何より声が大切と言うことですよね？ まあ、でも、それでいいか」

「お前っ」

怒鳴る直前の声も素敵。あゝ。怒られてんのに何考えてんだろう。あたし。

「だって、先輩の『声』、本当に素敵ですもん」

それだけ言い残して、部屋を出た。怒られるの覚悟で、嫌われるの覚悟で。

自分がなぜ、あんなことを言ったのか分からなかった。

「浅野先輩」

隣の後輩がニヤニヤとこちらに笑いかけてくる。

「随分、『声』が好かれていることを怒ってるみたいですね？」

嬉しそくに、顔を近づける。先輩をからかうなんていい性格してる。それだから小さく仕返しを試してみた。

「まあ、放送部の部長に恋をして、この高校まで追いかけてきたお前には負けるけどな」

その途端、後輩の顔が赤く染まった。

大会に出る常連とか、一年目にして放送部のエースとか言われている彼女が放送部に懸けている情熱は、そのまま恋の情熱だったりするのはここだけの話。

「べ、別に、あの人のためだけにここに来たんじゃないですもん。こここの放送部がレベル高かったから。」

だから、別に、部長は関係ないですもん」

ふん、と横を向いた。この部の部長である友人も、満更ではなさそうなので、面白いところではあるが。

「どーして、好きな子に好きって言われて怒るんですか？ 『声』ただだからですか？」

う、と黙ると『図星だあ』と面白そうに言ってきた。こいつ、分かって言ってるから余計たちが悪い。

「いいじゃないですか。私なんて、部長に『お前の声は低すぎる』って一刀両断ですよ」

「好きなやつに『低すぎる』って言われるよりましだって？」

『好きなやつ』を強調すると自分の失態に気がついたようだ。あ、と口を押さえてこちらを見た。

「別に、一般論を語ったまです。褒められるほうがいいですよ。絶対」

そう言って、後輩は笑った。

「どうしよう」

嫌われたかもしれない。いや、めんどくさがられているのは分かっていたんだけど、嫌われてはいないようだから安心しすぎていた。

一人、教室で反省中。一年生の教室は、とても静か。

「え、どうしよう。口利いてもらえないとか？」

それはさすがに、嫌だ。一日でも耐えられない。いい声は、やつ

ぱり毎日聞きたいし、放送じゃなくって、面と向かってしゃべりたい。

「放送だけじゃ足りないのに」

「何が？」

「先輩の声」

そこまで答えて気がつく。どーして一人でいるのに、あたしは他人と会話してるんでしょーか。

「お前、本当にどこまでも、声なのな」

「せ」

先輩、という声さえ出てこなかった。

「違うんです。声が一番好きなだけであって、全部好きなんです。先輩のこと。」

まじめだったり、責任感強かったり、優しかったり。そんなところも全部含めて好きなんです！」

自分で、自分が何を言っているのか分からなかった。

「さっきのは、成り行きというか、先輩が意地が悪かったから拗ねてみただけというか。とにかくさっきのは間違いなんです

！！」

先輩の言うことが、あまりにもあたしの気持ちを無視していたから。そんなふうになら、思われていないと知ってショックだったから。

声だけしか、興味がないなんて、そんなふうにしてほしくなかった。

「いつもも言ってたのに。……あたし、声しか褒めてないなんてこと、ありませんよ」

そうだ、いつもいつも、好きだとは口に出してきていた。でも、それは声だけじゃなかったはず。

なのに。

「なのに先輩があんなこと言うから」

ああ、泣きそう。情けない。こんなことくらいで、泣くなんて。

泣き落しだけは、使いたくなかったのに。

先輩、そういうのに弱そうだから、余計。

「満足したか？ それだけ言って」

「言い足りませんが、これ以上言つと、本当に嫌われそうなんでもいいです」

「悪かったつて。……泣かれるのは、苦手だから」

ほら見たことか。泣いた瞬間、下手にでて。

「先輩、あたし、本当に好きなんですつてば。声も、何もかも」

どれだけ、声を大にしても、あなたには伝わりませんか？

「いや、分かったから」

声が変わで、少しだけ顔を上げると目があった。真っ赤な顔をした、先輩の顔。

「照れてるんですか？」

泣きそうなことも忘れて問うと、ふいつと顔を背けられた。

「え、本当に照れてるんですか？ どうして？ 褒められるのに、そんなに慣れてないんですか？」

高校生にもなつて、褒められてここまで赤くなるとか、逆に貴重じゃないだろうかと思ってくる。

「ねえ、せんぱ」

言いかけたところで、口をふさがれる。色っぽい展開を考えた方、今回は手です。……微妙な表現の仕方ですみません。

「俺、お前の声が好きなんだけど」

褒められて、ここまで恥ずかしかったことはない。……顔が赤くなつて、多分、今見ることが出来る顔じゃない気がする。

「声を褒められるのは、初めてです」

先輩を見つけたとき、とっさに立っていたのに、足から力が抜けた。

「それ、告白と受け取っていいですか？ つて、もうそういうことにしますけどね……！」

からかい半分、それから、複雑な面持ちを乗せつつ聞いてきた。

「先輩の声で告白されて、断れる女の子がいると思いますか？」

それがきつと、あたしの答え。

「声だけじゃないですからね！ 全部……す、好きですからね……！」
まだ言い募ろうとする口は、今度こそ唇でふさがれた。

多分好きになった人のことは、どこだって、愛しい。

その少し意地っ張りなところも、ちょっと冷たいところまで。

それが、恋の正体。

V o i c e (後書き)

いい声に出逢いたいなあ、なんて思う、今日この頃。
これを書いたときも、確かそんなことを思っていました。

音（前書き）

『voice』の続き。

ま、読んでなくても先輩×後輩でいいんですけど。短め。

音

「先輩」

ふわりと空気が動いた。扉を開けた所為か、はたまた人間が入ってきた所為か、一人でいた部屋の空気が僅かに揺れた。

「御園……」

お前どこ行つてたんだ、とか、部長はどうした、とか言いたいことはあつただけだ。

「一緒に帰りましょ」

もう部長も由香も帰りましたよ、と明るく言われると何も言えなくなつた。

「アナウンスの予定表は？」

来週ある文化祭で、アナウンスするのはこの放送部の役割。そしてそのローテーションを決めるのは今日だったはずなのに。

「え？ 部長がもう出してましたよ？ 部長と由香、先輩とあたし知らなかったんですか？ 部長と一緒にのクラスなのに？」

そう言われている気がして、むっとする。もとよりあいつが俺に連絡をよこすようなことないとは思っていたが。

ここまで自分の都合を無視されるとかえって腹が立つ。

「他の人はまた明日だそうです。とりあえず決まったのはこの二組。一日目の十時から十二時までです」

何流します？ と間の抜けたような声が聞こえてきた。

やわらかくて、いかにも女の子、というような声を出す。普段の声はもつと涼やかな声なのに、と小さく思った。

「さあ。適当でいいだろ」

「と、先輩が言うだろうと思つてあたしは作戦を考えましたとさ」
口調が少しおかしいが、そんなことを突っ込むまもなく小さな音楽プレイヤーを差し出された。

「百二十分間、何流しましょうか。二十曲ぐらい用意したらいいで

すかね。途中、呼びかけも入るし」

とりあえず、人気の曲入れてきました、と差し出された。

「俺が決めるもんじゃないだろう。お前も決めるし」

「そうか……」

じつと御園は音楽プレイヤーを見つめた。そしてこちらを見てにこりと笑う。

「先輩が聞いているのを、そのまま歌っちゃえばあたしも聞けますよ」
なおかつ先輩の美声も聞けて一石二鳥。なんて賢いの、あたし！

と、自画自賛しているが、ありがたくも何ともない。

「一緒に聞けばいいだろう」

深く考えずそう口に出すと、御園は一瞬だけ大きく目を見開いたあと『そうですね』と照れるように笑った。

「じゃあ、イヤフォン片っぽずつ」

さつさと俺の右隣に座り、片一方だけを差し出す。自分は左の、そして俺には右の方を差し出す。

「左の方がいいですか？」

イタズラ気に呟いた。

「届かなくなるだろ。それだと。お前が左、俺が右、じゃなきゃ」

「いいえ。届きますよ」

ニコニコと何が楽しいのか笑う。

「引っ付けば、ね」

どうします？ と言う御園を無視してイヤフォンを取った。もちろん、右耳用の方を。

「残念」

「何がだ」

そう会話を交わして、音楽を流し始めた。流れるのは有名なアーティストのバラード。

そして次々かかるのも全てが恋に関するものだった。

静かに、流れる曲はあたしの心そのもの。
楽しいのも、苦しいのも、切ないのも、全て。
あたしの心届おといてますか？

音（後書き）

……短い。

文化祭に流れる曲が好きだったりします。どうやって決めてるんだろう。

名もなき本屋（前書き）

拍手で載せたやつ。

オムニバス形式にしようと思って、1話書いて終わりました。まだネタはいくつかあるんで、書いたら連載モノにしようとか画策中。

名もなき本屋

いらっしやいませ。ここは名もない本屋です。
あなたにぴったりの本をご紹介しますいただきます。

ここへ来たということは、何か大切なものを失くしてしまわれま
したか？

それとも初めから持っていかなかったのですか？

ここは不思議な本屋です。幸せな方はご来店いただけないかもし
れません。

しかしどこの誰でも持っていそうな、何気ない悩みを一つでも持
っているのなら。

きっとここへ招かれるでしょう。

二人の店員が、温かいお茶を用意してあなたのご来店をお待ちし
ております。

ぜひ一度、足をお運びください。

その店に入ったのはほんの偶然。
いつも通っているはずの町並みに、異変を見つけたのは定時上が
りの帰り道。

珍しく早く帰れて少しだけ浮かれていた帰り道。

いつもは目に入らない店が見えた。

古びたというほどでもない、しかし年季の入っていきそうな外観。本屋の看板らしく『あなたにぴったりの本をお探しします』とある木の板が下げられている。

そんなに大きくないけれど、どこことなく雰囲気になった。

いつもなら足を踏み入れない。だけどどうしてだろう、吸い寄せられるようにその店に入った。

日の長くなつたせいか、この時間でも十分明るい町並みが遠くなつた気がした。

扉を押せば、カランと涼しげなベルが鳴った。

「いらつしゃいませ」

明るい少女の声が聞こえた。紺色のエプロンをし、少し長めの髪は後ろで纏めている。可愛いというよりも、美人だと思った。もちろん、私なんか足元にも及ばない。

野暮つたい、だけど仕事のしやすいひつつめ髪。フレームのごつい、レンズも厚いままのメガネ。化粧つきの顔。しかも最近忙しいから肌なんかボロボロもいいところ。

気後れしてしまって、一瞬後ろへ下がった。しかしその後ろからも声がかかる。

「いらつしゃいませ。どんな本をお探しですか？」

振り向くともう一人、店員らしい人がいた。こちらから紺色のエプロンを身に着けている。書店員、というよりも、図書館司書といったほうがいい気がする雰囲気の人。

穏やかそうな青年だった。多分、年は私と同じくらい……二十後半だろう。人の良さそうな、人畜無害そうな顔立ちだった。柔らか

な瞳で、顔立ちは地味……失礼だけど。

でも整っていないわけでもなく、ここの店員さんは綺麗な人が多いと思った。

「えっと、どのような」

「すみません、気になって入っただけで」

なかなか返事をしない私に戸惑ったのか、男の店員さんは質問をしない。それを遮るように私は言葉を紡いだ。本なんて、探していない。

「いいえ、いいですよ。本を探しに来るのが目的の人なんて、ほとんどこいませんから」

いつの間にか少女はお盆を持っていて、その上のカップが湯気を立てていた。そしてこちらへどうぞ、と言い、店の奥まで入っている。

「店長。お客さん、案内してください」

少女の言葉に男性店員　店長さんらしい　は私に向かって笑いかけた。笑顔が素敵な人だと思う。何となく、警戒心を抱かせない人だ。

「お客様、こちらへどうぞ」

少しだけふざけるように笑い、次いで小さく片目を瞑る。この人かなり茶目っ気があるのかもしれない。

店の奥は先程の入り口と変わらず、落ち着いた内装だった。店員さんの性格が出ているのだろう、まるで我が家のように落ち着いてしまう。

小さなテーブルに案内され席に着くと、ずっと茶が差し出された。ほんのりと黄色の……見たこともないけれどたぶんお茶。紅茶でないことは確かだけど、日本茶でもなさそうだ。

匂いは少しだけ、りんごに似ていると思った。きつい甘い匂いではなく、仄かに香るだけ。

「カモミールティーです」

につこりと、少女が笑った。聞くとところによれば、大学生でバイ

トさんなんだそう。口に含めばハーブティーとは思えなかった。もったきついのを想像していたし、あまり好きなものではないはずだから。それでもこれは呑みやすく、『おいしい』と素直に言えば、笑顔を返される。

「ここは、あなたにあった本をお選びするところです」

店長さんが笑って言う。おいしそうにカップを傾け、こちらを見て、また笑う。

「かと言って、無理矢理買ってもらおうとかではありません。買っても買わないもあなた次第。お気に召していただければ、僕たちも嬉しいということですよ」

席を立ち、さらに奥を示した。

「あなたの大切なもの、いいえ、あなたが大切だと思うものをお探ししましょう」

大切なもの……？

「あなたが失くした、あるいは初めから手に入れてないものをお探ししましょう」

私が、失くした？

本がきれいに並んでいる。それでも普通の本屋などとは雰囲気違った。まずベストセラーとかは一つもない。最近人気の携帯小説なるものもなければ、漫画もない。

あるのは古びた本と、いくつかの見知った作家の本だけ。あとは異国の本が多かった。絵本も多いと思う。だけどあまり見たことがないものばかり。

店長さんはその中をすべるように歩き、一つ、また一つと本を抜き取っていく。流れるような所作を目で追うと、隣にいた少女がため息をついた。

「店長……、久しぶりだから張り切ってる」

「え？」

「久しぶりなんですよ。この店にお客様が訪れること」

あまりに 人が忙しすぎるから、人は多分一番大切なことを失

ったことにさえ気付かない。

「私も、このお店、見たことなかったです」

自分はそこまで余裕のない生活をしていたのか。

「いえ、このお店、多分普通に生活している人たちの目に映りにくいんだと思います」

わたしも客としてこの店を訪れるまで、この前を何度も通ったはずなのに全く気がついてませんでしたから。

「あなたもお客さんだったんですか」

「そうなんです」

大切なものを、失ってしまったときにここへ来たんです。

「まあ、失くしたものは戻らなかったんですけど、代わりになるものは手に入れました」

あなたは、どうでしょうね。

少女の言葉が嫌に耳について、私は失くしたものについて考えた。「これくらいですかね」

どさりと目の前に積まれたのは十冊程度の、様々な大きさの本だった。正直、これに全部に目を通すのは嫌なだけだな。

「大丈夫。全部読むわけじゃないですから」

しかし店長さんはそんな私の気持ちが分かったように笑った。穏やかだけど、油断できない人だと思った。この人は鋭い人だ。

「ただ、少し眺めてみるのがいいかもしれません」

もしかしたら意外に早く見つかるかもしれませんよ。そう言って、二人は私から離れた。

「ごゆっくり、お選びください」

二人が離れて、やがて周囲から音が消えた。たった一人になって、とりあえず本を眺めてみる。上から順番に、一つずつ手にとって見る。

特別何かを感じるわけもなく、どれから目を通そうか迷っているときだった。一つの絵本に目が留まり、そしてそこから離れなくな

『見つかるかもしれませよ』

その言葉の意味が分かった気がした。

かわいらしい表紙のその絵本は、ありきたりといえはありきたりで。だけど女の子なら一度は憧れた物語だった。

継母にいじめられる少女が、魔法使いの力を借りて美しく変身する。王子とすばらしい時を過ごす、その魔法の期限は午前零時だった。慌てて帰ろうとする少女を王子は止めるが、少女は行ってしまふ。残ったのは一つ。

ガラスの靴だった。

その靴を手がかりに、王子は少女を探し出す。たった一人の少女へ出会うため、町中を尋ねる。そして少女に出会って、めでたくハッピーエンド。

私も幼いころ憧れたものだった。こんな人に出会いたいと、何度思ったことだろう。だけど、結局、こんなこと起こらないと知ってしまった。

最近まで、信じていたと言ったら笑われるだろうか。いつかは、誰かやって来て、そして幸せになれる。そう思っていたことを、誰かに知られたら。

『無理に決まってるでしょ』

『あんたの容姿で、誰がそんなことすんのよ』

そのときは、笑って済ませることができた。

「だよねー。ありえない」

そう友人に合わせることだって、できた。だけど、家に帰ってから落ち込んでた自分がいた。

『そうか、いないのか』
と当たり前のことを確認した。

私が失くしたものの。
多分ソレは……。

恋への夢だろう。

小さい頃から憧れていて、ずっと信じていた。
けどそんなのは、ただの憧れでしかなくて、可哀想な私はずっと信じていた夢に裏切られた。

「失くしたものの、見つけた」

失くしたことにさえ、気がつかなかったものを見つけた。

「見つかりましたか？」

「ええ。おかげさまで」

少しだけ、努力してみるのがいいかもしれない。もう少しだけ、
待ってみるのもいいかもしれない。

「これ、買います」

「ありがとうございます」

私はその本をぎゅっと握り、そして笑った。ひつつめがみを流して、メガネも外して。そして、帰ったら肌の手入れでもしようかな
と思いながら。

「また、来てもいいですか？」

「ぜひ、お越しく下さい」

こちらは名もない本屋です。

あなたにぴったりの本をお探ししましょう。

あなたが失くした、もしかしたら初めから持っていないものを一緒に探します。

失くしたことにさえ、手に入らないということさえ、気付かないモノをお探します。

ですからどうぞ、ご遠慮なく、見つけたらすぐさま。

お越しくさいな。

「店長」

「うん？」

「わたしも結構、憧れてたんですけど」

「そう？　でも残念だね。僕が迎えに行く前に、君がここへ来たから」

「もし、ここへ来てなかったら、店長迎えに来てくれました？」

「それは分からないね」

抱きしめる腕も、何もかも、ここへ来るまでは知らないことばかりだった。

「君はここへ来て、失くしたものの代わりに何を手に入れたの？」

「聞いてたんですか？！」

聞いていたはずもない発言を聞かれていて、びっくりと肩をそびやかせた。

「家族の代わりに……、恋人を手に入れました」

素直にそう言つと、その人は優しく笑った。見とれるほど、優しい笑顔でこちらもつい笑い返してしまう。

「あの人も、出会えるといいですね」

「そうだね。美人さんだったからね」

まあ、事実は事実だから認めるけど、こちらとしてはあまり面白くない。

「ああいうのが好みですか？」

「うーん、あんまり好みは分からないな
君が好きってだよ。」

そういう彼は、本当にきれいに笑った。

名もなき本屋（後書き）

一度でいいから書いてみたい、オムニバス形式小説。
あとこついう雰囲気が好きなんです。

桜と雪の吐息（前書き）

ブログに載せてない書き下ろし。季節感が全くなくってすみません。これを書いた当初はまだ寒かったです。確かに。

ファンタジーっぽいので、苦手な方は注意。季節の節目のお話です。

桜と雪の吐息

ひらひら舞う。くるくる落ちる。そしてまた……ひらひら舞う。
それはまるで、彼女の吐息のように甘く、儂い。

ふわふわと溶ける。しんと積もる。そしてまた……ふわふわ
溶ける。

それはまるで、彼の吐息のように冷たく、淡い。

「冬將軍？　今年は少し、ここに留まる期間が長いんじゃないかって？」

「いいえ、いつも通りですよ。春の姫」

真っ黒なマントを羽織り、いかにも温かそうな格好をしている男は桃色の着物を着た少女の前にふわりと舞い降りた。その男とは対称的に、少女は少し寒そうな格好をしている。

彼女は美しいが、薄そうな着物を着ているだけだったが、少女は冷たい風が吹いている中、震えてもいない。まるで寒さを感じていないようだった。

冬將軍が芝居がかったように手を差し出すと、少女は面白そうに笑いつつ、その手をとった。

その真っ白い手袋に覆われた手を見て、少しだけ不快そうに眉をひそめると、冬將軍に向かって唇を尖らせて見せる。

「まあ、女性の手をとるときは手袋を外しなさいと教わらなかったのかしら？」

「これは失礼しました」

少女の言い方が気に入ったのか、クスクスと冬將軍は笑い、芝居めいた動作で手袋を取る。

そして少女の白い手をとると、恭しく口付けた。少女はそれを少し不満そうに見ているだけで何も言わず、口付けられた右手を胸の前に引き寄せた。

「どうしましたか、春の姫？」

「いいえ、將軍。何でもありません。あなたには芝居がかった動作がよくお似合いだということを再確認しただけですもの」

皮肉とも取れるその言葉に、冬將軍は小さく目を見開いた後、本当に楽しそうに笑った。

「おやおや、しばらく会わない間に皮肉を覚えられましたか？」

「たかが数ヶ月でしょう？ 私たちにとっては瞬き程度の時間ですわ」

ふいつと少女は横を向き、冬將軍から視線を外す。明るい茶色の、長い髪の毛がふわりと揺れた。

よくよく見ると、その少女の容姿はとても桜に似ている。茶色の柔らかな髪と瞳に、桃色の着物。ほんのりと桃色の白い肌。

そしてその顔を常に彩っているのは柔らかな微笑だったが、今度はばかりはそうも言っていられないのか少しだけ眉をひそめていた。

「何を怒っていらっしゃるのですか？ 春の姫」

「何も怒っていませんわ。將軍」

冬將軍の言葉にそう返すと、『挨拶が終わったのなら、早く帰ればよろしいのに』と後ろを向いた。そして着物の裾を翻しながら歩いて行く。

さくりさくりと冷たく、真っ白な雪の上を少女が歩けばたちまちに解け、そこから緑色の植物たちが待ちわびていたかのように芽を出した。

そして少女はある一本の木の前に立ち、その木の幹に手を当てた。「お帰りくださいな。將軍。私は春の装いで忙しいのです」

とって付けたかのような、いい訳めいたその言葉を聞き、冬將軍

は困ったとも言つように首を振った。

「春の姫？ 私にはあなたが何を怒っているのか見当もつきません。何を怒っているのか、お教え願えませんか？」

「怒っていないのに、その理由を問われるの？ 將軍は無駄なことを嫌うお方ではなかったかしら？」

無駄がお嫌いなら、次のお仕事に移られては？ あなたがここにいと春が芽吹いてくれないの。

少女はそれだけ言うと、木の幹に口付けた。まるでいとおしむかのようなその動作に冬將軍は目を細める。

まるで心底愛しいものを見ているかのように笑うが、その笑みにわずかに嫉妬の色が混じった。それを見分ける目は少女になく、ただその目を眇めるだけだ。

「さあ、目覚めて」

少女の吐息が白く、白く幹にかけられる。すると木はつやを出し始め、一段と力強く脈動し始める。その心音を聞くように少女は幹に抱きついた。

「お帰り、くださらないの？ この子が、嫌がっているのですけど」この木は桜。美しく、儂い春の象徴。冬を耐え忍ぶこともできるが、長い間冷気にさらされ続ければ弱ってしまう。

「なぜこんなに早く、目覚めさせるのですか？ いつもならもう一、二週間先のはずですよ？」

そしてその間、私はここにとどまれる。

熱っぽくささやく冬將軍に、少女は一瞥をくれてやる。

「あなたが、早く、次の場所へ冬を届けたいのかと思ひまして」

ふん、と荒々しく横を向いた後、桜の幹から手を離し、両手を天に向かって広げた。

ふう、と長く息を吐くと、凍てつくような寒さが緩和した。ビュッと風は瞬く間に柔らかくなり、少女のほほを叩いた。

どの空気も、彼女の味方だと言うように彼女を囲む。

「咲け」

強い調子で言えば、足元から無数の芽が少女を包み込むように伸び始めた。

「お帰りになりたいのでしょうか？ 帰して差し上げます」

伸びるはじめた芽は通常では考えられないくらい早く、そして長く伸びる。

その芽が冬將軍に向かって突進していった。冬將軍の両手両足をいくつもの芽が捕らえる。そこからまた新しい芽が出て黄色い花を咲かせた。

可愛らしいその花が、今はその色を潜め彼を害そうと締め付けを強くした。

「落、ですわ。將軍」

その声には、『帰らないのならば、無理やりにも帰らせてやる』という意思が含まれていることを冬將軍は知っている。

「離してくださいののですか？」

それは『離さない』ことが分かかっていて聞いている。それが少女にも分かり、苛立たせた。

「離しません」

決意のように言い切ると、冬將軍は薄く笑った。少女がそう答えることさえ、知っていたかのような微笑だった。

「ですが私もまだここにいたいのでね」

そう言うと、その言葉がまるで命令だったかのように、落の芽が凍った。ピキリと音が響いた後、キラキラと粉々に砕け散ってしまった。花の一片さえも残さなかった。

美しい氷の欠片を見て、少女は悔しげに唇を噛む。

「春の姫、私は少し、あなたのお怒りの原因が分かったような気がします」

自分の欠片である花が砕かれたせい、少女はその場へへたり込んでいた。氷で切れたのか、右手が赤く染まっている。

白い肌に赤い血はよく映え、その白さを犯すように広がった。

「やりすぎてしまいました。すみません」

少女の右手を見て少し眉を顰めた後、手を取り口付けた。ばつと少女は自分の右手を冬將軍から奪い返し、胸元で握る。そうすれば、まるで彼から逃げられるとも言つように。

「さつさと帰ればよろしいでしょう？」

無理やり立ち上がろうとして、失敗して倒れる。それを抱きとめて、冬將軍が言った。

「つかぬ事をお伺いしますが、夏のガキが何か言いました？」

「まあ、そんなふうには言つては可哀想です」

そう言いながらも凶星を刺されたらしく、横を向いた。

「何と言つたんですか」

「何でもよろしいでしょう？ 私たちの会話なのですから」

相当に決まりが悪いらしく、頑としてでも話そうとしない。そして自分の足で立てるようになると、すぐさま冬將軍の腕から抜け去った。

追いかけようと伸ばした冬將軍の手をぴしゃりと叩いて拒絶すると、彼の手の届かぬところまで足早に去っていく。

「もしや、雪の精と関係が？」

びっくり、と早めていた足を少女が止めた。その震えた肩が、その言葉の真偽をはつきりと伝えている。それが分かっているはずなのに、少女はあえて首を振った。

「雪の精が何だというのです。たとえあなたが雪の精を愛そうと、愛さまいと、私には関係ありません」

血に濡れた腕を一振りすると、春の暖かな風が吹く。それと同時に少女の腕は癒えていった。まるで始めから傷さえなかったかのようなその有様に、冬將軍は少々残念そうな顔をする。

眉を寄せて、首をかしげ、少女を刺激しないようにゆっくりと近づいていく。

「何か？」

「いいえ。ただ、あなたの腕に傷があるうちは、征服できた気分ではありませんので」

随分と勝手な言い分に、少女はむっとしたように眉を寄せた。

それではまるで、自分が彼のものだとも言つようではないか、と顔に書いてある。その不機嫌そうな顔を見て、冬將軍はまた彼女の腕を取った。

傷が治つてさえも、その跡に触れぬように。

痛みが消えてさえも、その傷を癒すように。

「春の姫。誤解です。私はこの数週間を楽しみに、各地へ冬の吐息を落としているのですよ?」

そう、冬が次の場所へいくほんの少し前に目覚める彼女と交わす会話が、永遠に続く理の中での楽しみ。

幾千幾万と繰り返される季節の移り変わり、それを知らせるそれぞれの季節の妖精。彼らは永遠とも言えるときを過ぎつつ、その刹那を楽しんでいた。

春の暖かさを感じれば、春の姫は高々と春を称えるために歌いだし、

夏の強い日差しを感じれば、夏の王子はあちこちにその暑さを振り散らす。

秋の涼しい風を感じれば、秋の姫が豊穡を願つて、その黄金色の髪を揺らし、

冬の厳しさを感じれば、冬の將軍はその冷たい吐息で雪を降らす。「冬の精は私の娘でもあります。この吐息から生まれるのですから」ふわっと冬將軍がゆっくりと息を吐いた。

その吐息からきらきらと美しい光を纏った娘が数人、春の少女の前へ降り立つ。白い髪に、淡い蒼の瞳。それは冬將軍に似通っている容姿で、冷たく美しい姿だった。

幼げな顔の中に、色香を含み、キャラキャラと無邪気な笑い声を立てる彼女らを見て、少女は不快そうに眉を寄せた。

自分とは全く違うその姿を厭うように、ふいつと目線を外す。そして右手を口元に近づけ、その手のひらを滑らせるように吐息を吐いた。

彼女の暖かな吐息は手のひらへ滑り落ち、彼女らに向かって進んでいく。

とたん、雪の姿を模した少女はすっと解けるようにいなくなった。雪が春の息吹を受け、瞬く間に溶けていくようなもので、そこに疑問を差し挟む余地はない。春の準備が進んでいるこの場所は、もう完全に少女の領域なのだから。

「ここはもう、春の領域です。むやみに力をお使いにならぬよう」「これは失礼。なんとしてでも誤解は解きたかったので」

分かっていただけましたか？ と冬將軍は切なそうに顔を曇らせた。澄んだ瞳がまっすぐに少女を映し、さすがの少女も罪悪感に口ごもる。

一応、彼の娘とも言つべき精を勝手に消してしまったのだ。領域の問題があるといえども、感心する行為ではない。

「分かっております。……冬の精は、あなたの具現。いわばあなたの身である」と

だから彼がそれらを愛するわけではない。自分の体の一部なのだから。

「では何故不機嫌に？」

「……今年は、冬の始まりが早かったのですね」

突如として、全く違う話題になり、冬將軍はそうでしょうか、と首を傾げる。いつもどおりに吐息を落とし始めたはずだったのだが、そっぴいえば秋の姫君にもそんなことを言われた。

「『銀杏が、散ってしまうであろう』と、秋姫にも怒られましたねえ。そっぴいえば」

「春の季節を届けに行った土地で、夏の王子が笑っておりまして。

『冬將軍は秋姫に会いたくって早めに追いかけてるんじゃない？』と」

春の季節を届ける春姫を追いかけるように、夏の王子はその跡をなぞる。それと同じように、冬將軍は秋姫を追う。そして冬將軍を春の姫は追うのだ。そうして季節は巡ってゆく。

彼らが彼女らを追いかけ、彼女らは彼らを追いかける。それが長い間変わることのない、理であって、彼らはそれに疑問さえ持たない。

「あのクソガキが」

「まあ、冬將軍。王子になんて口の聞き方を」

楽しそうな少女の声に、冬將軍も笑みを零し、少女の手を捕まえた。

「ほんの少し、春の領域で冬の眷属の私が留まることをお許しいただけますか？」

「……少し、だけならよろしくつてよ？ そうね、せめてせめて桜の蕾ができるまで。」

「それでは足りない」

「いいえ、十分です。私とあなたは交わらぬ季節。春と冬が一所に
いること自体、おかしいことなんですから」

巡る季節は触れるように小さな接触を残すだけだ。

決して交わることはない。いつの間にか春が夏になるように、秋が冬になるように。明確な分かれ目はなくても、彼らには越えてはいけない一線がある。

「私がこんなに季節を急いでいるのは、あなたに会うためなのに？」

「秋姫に会いたいただけではなくって？」

「ええ、あなたに一刻も早く会いたいのです。会いたいから、冬を早くして、春を急いだ」

あなたは決して交わらないといいますが、人間はよくこの時期を
こういうのですよ。

「三寒四温と」

三日寒い日が続いて、四日暖かくなる。春先に用いられるこの言葉は、今の状況によく合っていた。

「人間にはばれているらしい。昔から、私があなたと離れがたく思っていることを」

だからせめて、誤魔化せるまではここにいさせてください。

「まあ、冬將軍が聞き分けのないこと」

くすくすと笑う少女の手をとり、冬將軍はふわりと息を吐いた。
この息が彼女を凍らせてしまわないようにと思いつつ。

息を吐く。その息が、季節を象徴するものを生み出す。そうして
彼らはまた、奇跡を届けに行くのだ。

春の姫は桜の花びらを出し、夏の王子は熱を吹き散らす。

秋の姫は銀杏をさらい、冬の將軍は雪を降らす。

ずっと、密やかに、その季節は巡る。

桜と雪の吐息（後書き）

ファンタジーだ。久々のファンタジー。
こっいつのを書いてみたいんだけどな。

棘（前書き）

やばい、短編もネタが尽きてきた。

棘

わたしが発したのは確かに、相手を傷つけるための言葉で　　そしてその言葉は予想以上に相手を傷つけた。

彼を傷つけようと、口に出したその言葉は寸分変わらず、それ以上の威力を持って、彼の心を引き裂いた。その瞬間を、わたしはこの目で見た。

放った瞬間に、後悔をした。口に出した瞬間、分かった。

言うてはいけない言葉だった。一番、口に出してはならない言葉だった。

いつもそうだ。

ケンカするときに“こういう言葉”をいうのはいつもわたしの方で、傷つけるのはいつもわたしだった。優しい彼が、そんなことをするはずもなく、いつだってそれはわたしの役割だ。

そして傷つくのはいつもあっちだった。それなのにケンカをしたとき、謝ってくるのはいつだってあっちなのだ。

ただ一言『ごめん』と。まるで自分だけが悪いかのような顔をして。時々それが、無性に腹が立つ。

君は悪くないんだよ、と言外に言われた気がして嫌になる。

悪いのは、あなたじゃなくわたしだと、はつきり分かっているからだ。

自分は何もしていないのに、ケンカの原因が多少あったにしろ、傷つけたのは間違いなくこっちで、加害者はわたしなのに。

それが腹立たしかった。何を謝っているのか分からなかった。だからまた傷つけてしまう。

『何に』謝っているの？ ケンカの原因？ それなら謝ってもらう必要なんてない。謝ればわたしが笑うとも思ってるの？

傷つけたわたしが、笑うと？

わたしは傷つけた。一番言っではいけない、一番彼を傷つける言葉を……わたしは吐いた。自分が彼のにふれたいと思った唇で、その言葉を吐いた。

彼を傷つける言葉を、その唇から吐き出した。なんて、薄汚れた感情の言葉なんだろうと思っっているのにもかかわらず、彼が一番傷つく方法で、彼が一番傷つく人間から。

その言葉を吐き出すんだ。

イライラして、感情が定まらなくて、呆気ないほど自分が自分じゃなくなる。

「ごめん」

「何が……」

声が、冷たかった。泣き出しそうなくらい弱く、しかしそんな自分を律するかのように、必死になって感情を抑えているような声。

ああ、弱い声。女々しい声。……違う、馬鹿らしいくらい弱い声。

「別にわたしは、謝ってほしいんじゃないの」

顔を俯けたまま、表情の分からぬまま、言葉は続く。先程、荒く言葉を紡いだ唇で、小さく言葉を続ける。

「謝らなくちゃいけないのはわたしなのに、謝られると正直イラッとする」

言ってもなお、こちらを向こうとはしなかった。荒く言葉を吐いた後、傷ついたのは多分彼女だ。

言われた自分よりもさらに深く、こちらが感じる痛みを想像してより深く、彼女は傷ついた。

はっと息を吞んで、そして顔を歪める。自分が言われたかのように

な表情に、言われた言葉より胸を刺された。

「どうして、いつも謝るの……？」

泣く寸前のような顔が、ケンカするたびに瞼裏に浮かび良心を苛むのだ。始めから、ケンカなんかしなければいいのに、と。

「だって、傷つけたのは俺だから」

彼女にそんな顔をさせるのは自分だから。

優しい、本当はとても優しい彼女に、そんな辛い言葉を吐かせてしまったのは自分自身だから。

「言いたくないような言葉を、言わせてしまったから」

誰も傷つけないという彼女を、人を傷つけることに慣れていない彼女を、そうさせたのは自分だ。

「バカだなあ」

そう言っ、彼女は初めてこちらを向いた。苦笑いを含んだ顔でこちらを見る。泣いていないようで、それだけで少し安心した。

「被害者なのに、何、加害者みたいな顔してるの」

そっと近寄れば、『情けない顔してる』と頬に手を添えられた。そして抱きつかれる。

「ごめんなさい」

いつだって泣きながら言うセリフを、今日彼女は笑顔で言った。

「ひどいことを言っごめんなさい。傷つけるつもりで言っただけ、あなたを刺すつもりはなかったの」

ああ、そうだ。

けんかをするとき、自分も彼女も、相手を多少傷つけるために言葉を発する。

それは苛立ちによるものだったり、単純な怒りによるものだったりするけれど。

「俺も、ひどいこと言ったね。ごめん」

だけど、もしそれを後悔するのなら、謝ればいい。

人を傷つけておいて、そんな簡単な問題じゃないんだと言われれば、それまでなんだけど。

「仲直りのキスでもしとく？」

「しないー」

ひらり、と彼女は腕から逃げて笑う。

「どうせなら、仲直りのデートしょ？」

にこりと笑う彼女の瞼に、キスを一つ落として笑う。

彼女の棘なら、たとえなんだろうと甘い花に変わるのを待とう。
いつかその蜜に触れることを願って。

電話（前書き）

拍手再掲。『newlywed』という短編連作を5作くらい書いていたのですが、続きを書く機会を逸してしまったので、一個だけあげてみます！。

新婚さんのあれこれが書きたかったのだよ。

短編にふさわしく。めっちゃくちゃ短いのはご愛嬌。

電話

まだ少しなれない明るい行進曲が耳に付く。たたんでいた洗濯物を放り出し、近くにおいてあった子機をとる。ディスプレイを見る習慣は……まだなかった。

「ハイ、もしもし」

そこから先が、声にならなかった。正確には言葉を呑み込んだと言っほうが正しい。とっさに出てきた姓を押し込める。俗に言う、旧姓を。

「えっと……、清」

いけ、もう少しだ。ここまできたら、勢いに乗ってしまえ！！
本当に、旧姓、変わったよね？ 間違いじゃないよね？

「しみ、ず、です！！」

火照ってくる顔も気にせずに、一気に言い切る。もう、電話でたなくなってきた。もう、本日二度目です。ちなみに一回目はもっと時間がかかって、セールの人に笑われました。

そんなことを考えていると、向こう側で笑い声が聞こえた。

「あのさあ、千紘。それ、わざとやってんの？ それとも素？」

笑ってる顔まで浮かんできそうで、思わず顔を覆った。電話の相手は“夫”だった。この“夫”もなれないものの一つだったりする。

「け、圭介くんの馬鹿……」

言ってくればいいじゃない。

「いや。分かると思って」

そう嬉しそうに笑う、圭介くんが恨めしい。

「どうして、嬉しそうな？ 恥かいたよ」

むっとして言い返せばあっけらかんとした答えが返ってきた。

「千紘が『清水』っていうから」

結婚したんだなあ、っていう実感があって嬉しかった。

そう言われて、また赤くなった。せつかく治まってきたのに。圭介くんはこういう人だ。変なところで照れがないというか、恥ずかしがらないというか。

「またかける」

次こそは、『清水』と名乗ってやる。ぐつと拳を握り締めて誓うわ tadi だった が、数時間後帰るコールをしてきた彼に、また旧姓を名乗りそうになったのは、また別のお話。

「学習能力ない？」

「そんなことないもんっ！」

「もんって、可愛いなあ」

「圭介くんの馬鹿あ」

バカップルの会話はしばらく続く。

電話（後書き）

そう、こういうテンションをたまには書いてみたい。

現金な（前書き）

のはどちらなのか。ここ二話ほど短くてすみません。拍手採録が続きます。ただそれだけでは寂しいので、加筆修正加えて少しだけ長くしてみたり。

現金な

しんと静まる部屋に二人。ふわりと広がる煙が渦巻く。

静かな沈黙に、耐えられなくなったのは俺か、きみか。

多分、心の底から気まずいのはこっちなのだろうが、口を開いたのは彼女だった。どこかけだるげな声がこちらに届いた。

「ねえ、ねえ」

机の上で頬杖をつき、こちらを見つめる。視線だけで、続きを促すとおつけないほど簡単な答えが返ってきた。

「好きだなあ、って思ってた」

何の含みもなく、厭味でもなく、どこまでも素直に返してくる彼女が……。少し羨ましくなった。

「俺もだよ」

なんでもないように返すと、彼女はパアッと笑顔を浮かべる。現金というべきか、素直というべきか。

「じゃあ、タバコ止めて」

「俺に死ねって言うてんのか」

それでも笑顔の攻防戦は続く。

「違うよー。死ねなんて言うてない。ただタバコを止めてほしいだけ」

「だからそれが、死ねってことだろう？」

俺からタバコをひいて、一体何が残るといふんだ。何も残るわけがない。（自分で言うていて非常に悲しいが）

他に楽しみも何もない、ただタバコが娯楽。

「体に悪いでしょ？」

「知ってる」

「私にも悪いんだよ？ 私のほうが早く死んじゃうかもしれないん

だよ？ それでも吸うの？」

「……」

それを言われると、うつと止まるしかない。副流煙の影響など、とつくに知っているし、知った瞬間は『止めよう』と思うのだ。

「ねえー」

「少なくする」

「止める？」

「少なくする」

止める、とは言わない。実行できなかったとき、責められるのは必須だ。

「私が好きなら止めてー」

ほぼ本気で入ってないのだろう。普段は絶対口にしないことまで口にした。よほどタバコの煙が嫌いなのだろう。付き合い始めるまで、身近に吸う人がいなかったらしい。

付き合い始めた当初はよく咳き込んでいて、それが気になって数ヶ月タバコを吸う回数がぐっと減った。それも彼女を思ってたことだ、と言い張りたい。

それを言うなら、すっぱり止めるという話だけだ。

「好きだよ。だけど止めない」

「ばかあ。肺がんになったら恨んでやる」

「だから少なくするって」

いつか、止められたらいいと思う。いつかは、の話だけだ。

「キスするとき、タバコのおいがするとがっかりする」

「それは謝る」

そう言いつつ、キスを一つ。苦い顔をした彼女の頭に手を置いて、ごめんごめんと謝った。そして、現金な彼女に一つ約束を。

「そのうち止めるよ」

結局、タバコを止める原因になったのは、彼女の妊娠、というオチなのけど。

「あー、子供に悪影響だ」

「止めます。今すぐ止めます」

意外に止められたりするものなんだな、とそのとき初めて気がついた。

現金な（後書き）

半分実話。

子供が出来るとタバコって止めれるらしいですよ。まあ、人にもよるけど。

欲しいのは（前書き）

失恋つぼいのを一つ。後悔はしてない。だけど少し、惜しかったかな、なんて思ってる。そんなお話。

恋の芽を自分で摘み取って、あとで『恋だったかもなあ』なんて思ってたらちょっと痛い。だけど幸せだから、嬉しさが勝つ。そんな女の子。

欲しいのは

どんなに泣いたって、叫んだって、手に入れられないものがある
と知ったのは何時頃か。

これはその類ではないけれど、やはりどんな道を通っても手に入
らなかったものなんだろう。たとえ、彼女に紹介しなくなつて。

「ほしい……って言えないよね」

「へ？」

ちらりとこちらをみた友は、ポツキーを口にくわえたままこちら
を向く。くるん、とはねたままの髪が目に入ったが、あえて言わな
い。

寝癖というほどでもないし、今日一日それで過ごして皆に指摘さ
れなかつたんだから、いいのかもしれない。

恋人に指摘されてしまえ、とまでは思わないけれど。あいつなら、
それさえも可愛いと思っちゃうんじゃないだろうか。

「ほしいの？ ポツキー？ あげるよ」

箱をこちらへ向ける彼女に『違うよ』とは言えなくて、笑いな
が『くれないのかと思った』と一本もらう。いつもは甘い棒が、ひ
どく苦く感じた。

苦い、甘い、やっぱり苦い。チョコレートが嫌いになりそうだ。

「それでね、さっきの続きなんだけどさあ」

「彼氏の愚痴と見せかけての惚気でしょ？ 続けて」

わざとらしく言つてやると、ムツと眉をひそめた。

ああ、可愛い。これは惚れるわ。うん、女のわたしだって惚れる
んだから、やつならもつとだろう。

「のろけじゃない！！」

「じゃあ、別れちゃえば」

「やる気ないでしょ！！」

「胸やけがしてねえ。どうしてだろう？」

チョコレートのを口で上下に振りつつ答えると、うつと彼女は詰まった。うつ、としばらくうなづいてこちらを睨みつける。が、睨んでいるように見えないので全くもって怖くない。

逆に上目遣いになっていて可愛いくらいだ。

そこに話の中の重要人物が登場した。

「悪い。部活長引いた」

「早くしてよね。惚気に付き合わされるこっちの身にもなってよ」

そう返すと、彼は真っ赤になる。あ、照れてる。

わたしと彼の間に彼女がいなかった頃、一度だつて見たことがなかった顔だった。彼女を紹介して、初めて見れた顔だ。

それを貴重だと思っていた頃がもう懐かしくて、ちくりと痛んだ胸を隠す。

痛くない。痛くない。こんなの痛みじゃない。

「え、や」

「今度あんたら、奢りね」

それだけ言つて、席を立った。いつの間にかオレンジ色になっている日を見つめる。

切なさを感じることはもうなくなった。だつて紹介したのはわたしで、二人を引っ付けたのもわたしだ。そのとき、後悔しなかったし、これからもすることはないだろう。

ただ、思うとすれば。

今更だけど……彼は結構いいやつだったのかもしれない。友人としても、彼氏としても。それは、付き合っていないわたしには分からないけれど。

「あんたたちのおかげで、こっちはお遊びの恋なんてできないのよ」

羨ましいくらい、優しい恋だから。

羨ましいくらい、可愛くて純粋な恋だから。たとえ気休めだとしても、中途半端なものはしたくないと思ってしまうくらい。

羨ましい。だけど手に入れたとは思わない。ただ傍で、ずっと

見守っていたい。そんな二人。

「まあ。別れたら一人ずつ慰めてあげる」

「ちよつと!!」

「おい」

二人いっぺんの返事にニコリと笑い返すと、教室から出た。

「あの笑顔が、羨ましいから……だよね」

だから、彼女を彼に紹介したことを、少しだけ惜しいと思った。

だけど、たとえ二度目があったとしてもわたしは紹介するんだろう。何度も、繰り返ししてしまうんだろう。だってそれで後悔なんてしていないから。

悪いことをしたと、思ったことはないから。

「恋、できるかなあ」

恋と気付くのは遅すぎた。ううん、恋の可能性があったと気付くのが遅すぎた。でも、気付いたとして、何か変わることはあったんだろうか。

彼と、わたしでは、何かが起こりようもなかったと思うけど。

次にもし、誰かに可能性を感じたら、今度こそちゃんと気付こう。今は、そう思うだけでいい。

恋じゃない。だから失恋でもない。

だけどこの痛みを説明する言葉を知らない。

名づけられないのは、思いか痛みか。

欲しいのは（後書き）

失恋じゃないと言い張るのは彼女が強いからなのか弱いからなのか。

窓の向こう（前書き）

見つめるだけの恋、なんて素敵じゃないですか。それで相手も見てるだけの恋、とか思ってたら可愛い。

そんなお話。相手役と一度としてしゃべってないけど、恋愛ものだと言い張る。

窓の向う

「また外見てる」

クローラーの効いた部屋で一つ、声が落ちる。

「……っ。み、見てない！！ 見てない！！ グラウンドとか全然見てないし！！」

慌てて友人の前で手を振った。行き過ぎた否定は、肯定も当然と言っことを知らないわけではないけれど、それでもせずにはいられなかった否定。

「グラウンド見てたんだあ」

「あ」

右手に持っていた筆が落ちそうになるのを慌てて握りなおす。ばれてしまった……。自分は何と不甲斐無いんだろう。

こんなに、早々ばれてしまうなんて。

これは絶対、わたしだけの秘密だと思ってたのに。

「だってキャンバス全然変わってないよ。始まってから」

ぐうの音もせずに押し黙ると、横から友人は身を乗り出し、わたしのすぐ隣の窓からグラウンドを覗く。

さらに、と長めの髪が彼女の肩から落ちてきて、その大人びた横顔にかかった。羨ましい、と思うけどあえて口に出さない。自分が惨めになりそうだ。

「この暑い中、何がいいのかねえ。野球部は」

八月という、一番日が長くて暑い中、彼らはただただ白いボールを追いかける。泥がついてるボールより、なお砂にまみれる。

だけど顔は笑顔で、ボールを追いかける姿は生き生きとしていて、どこか羨ましくもある。どうして、その一つの球に執着できるのか非常に疑問ではあるけれど。

「青春、してるんじゃない？」

少し遠慮がちに言うと、友人はにやりと笑い、こちらを見た。そ

の瞳が恐くて、キャンバスに向かう。青い絵の具を一気に押し付けた。白から青へ。それはまるで、この夏のように。

暑さをも吹き飛ばすくらい、まっさらな青い空。雲ひとつなく、その光は彼らの肌を焼いていく。キラキラ光る、光の粒子がまるで彼らに降り注いでいるみたい。

真反対だけど、雨のように。

「で、どれ？ 二十人ぐらいいる中の誰なのよ」

「べ、別に一人を見てるわけじゃないもん。皆頑張ってるから、ちよつと見てて」

二階の窓から見下ろせるグラウンドは、蜃気楼のようにゆらゆらと揺れる。あんな中で走ったら、私はきっと倒れるんだろうな。ただでさえ、走った後は体調崩すし。

こんな暑い中、走っている意味が分からない。いや、分からなくていいとは思っただけど。

「ふうーん」

「そ、だから、誰も……っ」

そういい終わらないうちに、がたん、と慌てて席を立つと、こちらに手を上げた人に頭を下げる。やばい、見たことがばれた。

ひらひらと振られる手に、自分の手を上げるだけで返す。恥ずかしくって、手を振るなんて出来ない。もし、慣れたらして見たいとは思っけど、いまだその勇氣は出てこない。

そのうち、そのうちしてみようかな、とか思うけど。

しかし彼はそんなこと気にしていらないらしい、ここからでも分かるくらい明るく笑うと、もう一度手を振って走っていった。その笑顔に、どきりとしてしまったのはわたしだけの秘密。

「一人を見てるわけじゃない、ねえ。のわりには、過剰反応してない？ 真っ赤だよ？」

「う、う、煩いー！」

バツと教室の中を向くと、足早に廊下側に走る。完全にグラウンドが見えなくなっただけから、へたり込んだ。

心臓に悪いんだ、あの笑顔。わたしとは真反対の、明るい笑顔。ちょっと気後れしてしまうけど、そんなこと関係ないとも言ってしまうに、分け隔てなくわたしにも贈ってくれる彼。

「あれ、隣のクラスの」

「何も言わないの!!」

「付き合ってたの?」

「付き合ってたない!」

「じゃあ、片思いだ」

「……っ」

また何も言えない。

容赦のない追走はなかなか手を緩めてくれず、わたしを追い詰める。まるで警察か何かのようだ。どんなに逃げても、逃げ切れる気は到底しない。

むしろ、いつ捕まってしまうのかと冷や冷やしてしまう。

「青春してるねえ」

「……」

何も言わない。もう絶対、何も言わない。

何を聞かれても、何を言われても、余計なことは一切言わないようにする。そうしないと、この胸に育ち始めている気持ちを全て吐かされてしまいそうだ。

全部、全部。この胸に灯るわずかな光さえ、隠すことを許されることなく。

「今度のコンクール、野球部描いて出せばいいじゃない」

「……」

「あゝ。坂本くんだけ描いて出したいの?」

「……」

「描かないんなら、あたしがモデルお願いしようかなあ」

「だめ!!」

思わず出てしまう声。

「サイコー!!」

「あ……」

もう、ダメかもしれない。

陥落まであと少し。

「おい、坂本！。何手え振ってんだよ」

「別に！。美術室に知ってる子がいたから」

手を振ると、少しだけにはかみながらも、絶対に返事をしてくれる彼女。恥ずかしそうに手を上げて、でもまだ振ってはくれない。

こっちが気付かなかつたら、絶対自分からはしなさそうだよなあ、と一人ごちてみる。

この前まで名前も知らなかった。同級生だということも、知らなかった。けどこの前、文系クラスとの合同授業で、初めて美術室以外で彼女を見た。

気になって、話しかけたくって、でも理系と文系の溝は意外に広くって。休み時間に、文系クラスが多いところへ行くことさえ出来なかった。

「美術部？ お前知り合いなんていんのかよ」

「いちゃ悪いわけ？」

知り合いつて言っているのか分からない。もしかしたら、彼女がらみればそんな存在じゃないのかもしれない。

だけど隣のクラスなんだ。今まで一度として気にしたことなかったけど。文系クラスとほとんど授業が違うから、縁のない人たちだとばかり思っていた。

「ん？ あれ、隣のクラスの文系じゃん。お前、どうして知ってるわけ？」

「お前に関係ないことだ」

「さてはお前ら付き合って……」
「ないし」

ばっさりと友人の言葉を切り捨てていると、向こう側の彼女は顔を赤くして奥に入ってしまった。残念。もう出てきてくれないのかもしれない。

この暑い日に、カーテンを開けていれば、彼女らは暑いだろうし。
「名前、何て言うの？」

「はあ？ 教えなきゃいけないわけ？ それ」

「だって同級生なのに、名前知らないとか」

菊池 優華 忘れもしない、彼女の名前。誰がお前らなんかに教えるもんか。

「なあ、坂本」

「うるさい。練習に戻る」

今日も彼女の顔が見れたから満足。さて、練習に励むか。

「まさか、知らないの？」

「知ってるけど、お前に教えたくない」

手を振って、見つめて、笑って、名前を知って。

次はどうすればいい？ どうすれば、君に気付いてもらえるかな？
ここに、俺がいて、君を想ってるって。

やっぱり、話したことないのにそう思うって、変なのだろうか。

「お前、彼氏気取りかよ」

「まさか。立候補はしてみるけど」

彼に一つ、笑顔を。

「うわあ。こいつ、嫌い」

「どうとでも」

今度、文系クラスに行ってみようか。それとも美術室に行くか。どちらにしても、彼女の声が直で聞ける。それだけですごく嬉しくって、つい足早に歩を進める。

「おい、坂本」

その声に返事もせず、美術室の方を見上げた。

本物の恋に落ちるのは、もう少し先。

窓の向こう（後書き）

女の子の名前でピンときた人は『drop』読みの方ですね。絵を描くって言ったら、そういうイメージしかないのです。（笑）
作中の人間は暑い暑いと言ってますが、わたしは今とても寒いです。季節外れで申し訳ない。

白衣とメガネと張り紙（前書き）

白衣とメガネが書きたかっただけ。ただそれだけ。こつこつやらんぽらんに見えての天才は書くのが難しいです。楽しいけど。

白衣とメガネと張り紙

「ちょっと」

厳しい声が、殺風景な研究室の中で響いた。随分とどす黒い雰囲気をもったその声には、確かに『殺意』なるものが含まれているが、話しかけられた男は嬉しそうに首を傾げた。

「うん？」

なあに、とでも問いたげな目に、厳しい声の主がはあとため息をつく。

「外の注意書きが目に入ってるのかしら？」

今度は怒気を少し抑えた声だ。しかし隠し切れなかった怒りの粒子はその端々に垣間見られ、男はくすりと笑ってしまった。

そして、きちんと律儀に頷く。

「うん。読んだし、覚えてるよ。」

『ただいま実験中につき、立ち入りを禁ずる。大変危険なので、くれぐれも間違えて入ってこないように。まかり間違っても、楽しそうだからとか考えるな』

だったよね？」

すらすらと、まるで暗記したかのような口調。事実その言葉は自分の狂いもなく、扉に張られていた紙の内容だ。

一度見ただけで完全に再現できるその記憶力。怒気を潜めた声の主は、その能力を心底恨めしそうにしていた。

「どうして、見てるのに、入ってくるのかな？ 理解できないのかな？ うん？」

幼稚園児に話しかけるような女に、男は眉をひそめた。

馬鹿にされたことがなかったのか、予想外の反応だったのかは分からないが、とりあえず不快そうだ。

頬を膨らませて、女に反論する姿はどこか押さなくて、長身のアンバランスさに少々おかしみさえ感じる。

「それでも、研究所きつての天才って呼ばれてるんだけど？」

ちよつと胸をそらしつつ、それでも片目を瞑ってぱっちりウィ
ンクもしてみせる。どこからどうみても、その様子は『研究所き
つての天才』には見えない。

どちらかといえば、長い髪をすつきりとまとめ、メガネをかけて
いる女のほうがよほど研究者らしい。

研究者と、訳の分からない男。そんな印象の二人が白衣を着て向
かい合っている。

研究者の人間が見れば、二大天才の衝突だと騒いだろうが、今は
幸いなことに誰もおらず、旧知の仲らしく二人は存外気軽に話しを
進めた。

「ふーん、へー。そんなんだー。すごいねえ」

全く興味なさそうに、女は相槌を打った。その間も、試験管に何
かを入れてみたり、振ってみたり忙しく動き回っている。ひら、ひ
らつと白衣が翻るのを、男は眺めていた。

一瞬だけ、その目に愛情が浮かび上がったが、すぐさまそれもな
くなり、代わりにからかうような色が出た。

「用がないのなら帰ってくれる？ どうせ、所長が探してるでしょ
うから」

女はバインダーにはさまれた紙にさらさらと記入して、男を見る。
フレームのない眼鏡の位置を直し、ついでに髪を耳にかけた。

そのさまはどこからどう見ても、『今忙しいんです、邪魔しない
でくれる？』というメッセージが含まれており、男はどうも楽しく
ない。

いつもなら首根っこを掴んでも追い返しにかかるのに。

「君を見るのが、僕の楽しみなのに」

「もう見たでしょ」

「足りないんだよ」

はあ、とこれ見ようがしにため息をついてから、彼女は器具の間
においてある電話を手にとると、一つだけボタンを押して耳に押し

付ける。

どうやら内線を使っているらしい。

「もしもし？ 所長？ 来てますよ。彼。ええ、だから早く迎えをよこしてください。邪魔なんで」

「ひどーい」

明るい色の髪の毛をヒヨン、と動かし、彼は反論する。

傷ついたなあ、なんて言いつつ、全く傷ついたそぶりを見せないのが余計に腹立たしく思い、女は眉を寄せつつ電話を切った。

「いつまで、そんな研究するの？」

「結果が、出るまでよ。天才には、分からないでしょ？ この気持ち」

くくっているにもかかわらず、彼女は髪を掻き揚げる。当然ほつれる髪をつつとうしそに見ながら、彼女は長い髪を後ろへやった。無造作にくくられているのに十分艶めいている髪は、さらさらと背中揺れる。

「そうだね。その研究は、絶対に成功しない」

きっぱりと、真面目な声で男が言った。

「知ってるわよ。早く出てって」

「出て行かないって言ったら、どうするの？」

その言葉を聞いて、彼女は珍しく無表情を変えた。

「試験管の中身をかけてでも、追い出す」

「分かった。出て行く。だから、そんな泣きそうな顔しないで」

男は両手を上げて、降参の意を表した後、扉を開けた。

怒られるのはいいが、泣かれるのは困る。そういうことらしい。女にしてみれば、両方同じ様なものなのだが、男には明確な違いがあるのだそうだ。

罪悪感の重さ、とか何とか。

「でもね、その研究は絶対に成功しないけど。だけど、成功して欲しいって、思ってるよ」

それはバカらしい、願いだけど。

叶うわけもない、だけど確かな願い。

「ありがとう」

そう、彼女が言うならいいかもしれないと、彼は思うのだ。

「もう少して、諦められそうよ。ようやく」

その言葉が意味することを理解し、ほんの少し残念に思う気持ちと嬉しい気持ちがない交ぜになり、男はぜひもなく微笑んだ。

「そう」

「だから、あともう少しだけ」

時間をくれるかしら。

「好きなだけ、あげるよ」

ばいばい、と言い置いて、男はやつと扉から出て行った。その後姿を、女は一瞬寂しそうな顔で見る、がすぐさま試験管に向き直り、また研究を再開した。

それは、叶うはずもない願いを、諦めるための『研究』だと、女はずっと自覚していた。

「その研究は絶対に成功しないよ」

部屋から出て、男は独り言のように言った。

「だって、僕だってしようとしなくらい……無謀なものなんだから」

幼い頃、そんなものがあればいいなと思うことはあった。しかし年を経るごとに、絶対あつてはならないものだということも分かって、やがて考えることさえなくなった。

「死者を蘇らせる秘薬、か」

それは、彼女が誰よりも愛した、『彼』を生き返らせるためか。そのため、『無駄』な研究か。

「成功、してほしいよ」

だけど、絶対成功しないその実験にある種の安心感を覚えていることもまた事実で。

絶対に成功しないからこそ、応援できるのだと言うことも事実で。「まあ、だから、『成功してほしい』なんて言えるわけだけど」

もし、成功する確率がもう少し多ければ、自分は絶対に応援し続けることは出来ないだろう。むしろ、どんな手を使っても止めさせて、邪魔して、忘れさせる。

「記憶を消すくらい、できるしね」

その方が、彼女にとってもよかったはずだ。

誰より愛した『彼』を亡くした彼女に、してあげられることくらいはそれくらいしかない。だけど。

「できないんだもんなあ……」

忘れさせてあげること出来なかった。彼女がそれを望まなかったからだ。

無理やり薬を飲ませてしまうことも出来たが、実は怖かったのだ。男自身も。

「あいつを忘れた君なんて、想像できないから」

想像できない。できるわけがない。知り合ったときにはすでに、彼女は彼のものであったから。彼女の一部分が、彼自身で、彼のいない彼女は果たして存在するのとも思う。

「君の半分以上が、なくなっちゃうね」

そして彼を忘れてしまえば。

「僕のこと、忘れちゃうかもしれないし」

それが、一番怖いことだと、自分が弱いと認めた今なら素直に言える。本当は、彼を忘れた彼女を見るよりも、彼とともに自分自身も忘れられるんじゃないかと思ったからできなかった。

ただそれだけのことだ。

でも、本当は。

「あいつのことを、忘れさせたい」

もうあの頃の笑顔が見れないなら、せめて苦しみだけは取り除き

たい、なんて。

「人でなしの僕も、恋をすれば変わるってことかな」
「だけど、大丈夫。」

「お前との約束は破らないよ。」

『彼女に一生手を出さない。何があっても、どんなことがあっても、彼女はお前のものだ。一生、死ぬまで、お前以外の誰のものにもならない。』

そう見守るし、俺だつて我慢する。』」

こんなときばかり、記憶力のいい自分を呪った。今でもはつきりと、覚えている。彼の言葉を。

「『もし、お前が本気で彼女を好きなら……』」

その口を思いつきり手で塞いでしまおうと思った。だけど入り混じる汚い希望を捨てきれず、結局彼の言葉に耳を傾けてしまった。

「『彼女を預けてもいい』なんて、お前お人よし過ぎるだろ」

その言葉に、縋りたいと思ったことは何度でもある。しかし結局中途半端な友情が手伝つて、何も出来ないのだ。

「厄介な奴らめ」

その痛みさえ、楽しかったときの思い出に繋がるのだと、分かつてはいてもやはり痛いものは痛い。

「ま、彼女が諦めるまで、もう少し見守るけど」

約束だからと言い訳しつつ、彼女を見守り続けよう。彼女が諦めるまで、あともう少しだから。

「我慢、もつかな」

きつともつとは思ふ。いつだつて自分は『理性の人』だから。だけれどときどき、それを破ってみたくなる。できないことは、分かっているけれど。

「好き、大好き」

それは言えないから、せめて。

「研究が成功することを、祈るよ」

それが精一杯の、愛の告白。

白衣とメガネと張り紙（後書き）

書き足すと、随分重い感じになりました。もう少し、ドタバタ感を出したかったんだけど、試験管を爆発させてもなあ、と断念。

名前を考えてないので、ちよつと二人称とか分かりにくくなりましたが、分からないままのほうがいいかな、と思ったのでそのまま。

興味本位の観察を（前書き）

身分差。王子×メイド

毎度思っけど、どうしてそんなに身分差が好きなんだろう。

興味本位の観察を

『王子』』

少女が一人、広い中庭にいる。くると、まるで踊っているかのように、紺色のメイド服を揺らしている。

可愛いデザインのマイド服は、城内外問わず人気で、それゆえメイドは人気の高い職業だ。当然、その服を着る人間も選ばれたものであるので、王族に決して無礼を働かない。

礼儀作法を叩き込まれている彼女らの職業からして、メイド服を揺らしながら走り回るのは少々考えられないことだった。

『王子、どこにおられるのですか』

紺色を基調とした、清楚でありつつも地味ではないメイド服は王様の趣味だとかそうではないとか。城下ではもっぱらの噂であったが、ここにその噂を知る人物は一人もない。

そんな噂の的である服の上に、真っ白なエプロンをしている少女は、真正正銘のこの城のメイドだ。

「ほら、ウィル。あなたの可愛いメイドさんが探しているわよ？」
そのメイドの様子を、部屋の中から楽しんでいる少女が一人。開かれた窓からはその様子がよく見えて、少女はくすりと笑いを零した。

そうして窓の外を見ようとはしない弟を振り返る。

「お姉さまは楽しんでおいでですね」

弟は難しい顔をして、姉を責めるように見つめた。

「ええ、もちろん」

身分違いの恋なんて！ しかも、王子がメイドに恋しているなん

て、なんて素敵なんでしょう!!

美しい顔をほころばせて、王女は言う。その片手には巷で有名な『ロマンス小説』が。おおよそ『王女』が読むに相応しくないものだろう。もつとも、彼女はそんなことを気にしていないようである。

しかし、好奇の目に晒されるのは必須だった。

なんせ、あの柔らかい笑顔を持つ王女が、生粋の『ロマンス小説』好きなのだから、興味をそそられないわけがない。

「そんなことを夢見ているから、お父様が嘆かれるのですよ」

「あら、わたくし、恋のない結婚なんてしなくてよ？」

ぱらり、と苦労を知らない手が本のページを捲る。白く細い手は、労働を知らない手だ。そして、元々労働をするように作られていない手だ。

まさしく、王族の手と呼ぶに相応しい造りの手だった。節が目立たず、抜けるように白く、滑らかで本をめくる以外の仕事をする必要がない。

「だって、あなたがこんなに素敵な恋をしているのに、わたくしが一人、愛も何もない結婚をするなんて不公平ですもの」

ここは王女の部屋で、その窓からは中庭が一望できる。王子はその窓から、メイドの少女をちらちらと見ていた。

見ない、という姿勢を崩してはいないが、腰が僅かに浮いているのだ。そんなに気になるのなら、窓が見えるところへいけばいいのに、と王女のみならず部屋にいた別のメイドたちは思う。

それを口に出さないのは、この王子がその指摘を受けると本格的に窓へ背を向けかねないからだ。天邪鬼、というよりここまでくればいつそ素直の部類になるだろう。

「そんなに心配ならば、行ってあげればいいのに。どうして、ここににいるのかしら？ 我が弟君」

からかい半分のその言葉に、王子は少しだけ息を吐いて、答えた。王女は指摘することにしたらしい。しかし、あえて『見てるじゃ

ない』という指摘はしない。回りから固めていく手はずは、まるで戦の策のよう。

「あれは一応、お母様の手先ですよ。私が何をするか逐一お母様に報告するに決まってるではありませんか」

そう言ってから、紅茶を口元に運ぶが、こけそうになった少女を見て、わずかに腰を浮かした。そう、まさに立ち上がりかけた。

くすり、と王女の口から笑いが零れるが、王子の耳には届いていないらしい。姉を睨むこともせず、窓の外を気にしている。

「あらあら、心配でいけないようね。それに……」

少しだけためらいを見せた後で、王女は盛大に口元を引き上げた。華やかな美貌が、より美しくなる。

大人しく、夜会で男性をひきつけて止まないその顔立ちは、どちらかと言えば幼くて、今はらんらんといたずらをする子供のように輝いている。

瞳は生気を宿し、どんな言葉が弟から出るのか待ちに待っているようだ。

「ここにいるのは、彼女のそばにいと落ち着かないからかと思っ
ていたわ」

ほら、なんて言うのかしら。王女は手を口元に当てて、小首をかしげる。

可愛らしい仕草だったが、王子から見れば嫌な予感しかしない。

どんなに洗練された動作でも、芝居がかって見えたなら、それはよくないことの兆候だと身をもって知っているのだ。

「そうそう。男は狼なのでしょう?」

「お、お姉さま……!」

王子が声を上げる。

「違った? おかしいわね。確か、数ページ前にそんなことが書いてあった気がしたのに」

弟の声を聞いて、間違ってたかしら、と呟きつつ本をめくり始める。

パラパラとページを戻す姉に向かって、王子は手を伸ばし、その手から本を奪い去った。噴出しそうになった紅茶は、いつのまにかきちんとテーブルに戻っている。

「王族が、このような本を読むなんて感心しませんね」

どちらが年上なのか分からない言葉だ。

「その言葉そっくり返して差し上げるわ。王族が家臣に心奪われるなんて感心いたしませんわ」

対して、王女はゆっくりと慌てることなくその手から本を奪い返す。

もちろん、王子に皮肉を贈ることも忘れない。王子の手から思いのほか本を奪い返すのが容易かったのは、相手が動揺しているからだろうと王女は勝手に思った。

『王子、どこにいらつしやるんですか。あ、服が引つかかって、取れない……、動けない……』

「泣きそうね。どうしたら、あんなところで、複雑に引つかかるのかしら」

「あれは天性の才能ですからね。厄介ごとを引き起こすことに関しては」

王子はそれだけ言って、席を立つ。紅茶はすでに飲まれており、礼儀を欠くことなく部屋を出ようとする。

何気なく装ってはいるが、先ほどからイスを倒しそうになったり、メイドにぶつかりそうになったりと動揺を隠しきれていなかった。

「お姉さま、本日はこれで失礼いたします。では」

そしてそのまま部屋を出た。

パタパタと部屋の外から走る音が聞こえる。きつと今頃中庭へ走って向かっているのだろう。素直すぎて可愛い弟を見送りつつ、王女は本を閉じて笑った。

そして側仕えの長いメイドに視線を送る。何とも嬉しそうな、そ

の表情。

「お母様もお人が悪いわ。あの子の好みを知っていて、わざわざメイドとして行かせるんだから」

息子の結婚相手として、教育した相手だとはよもや王子は知るまい。大層な家柄の姫君が、メイドとしてここにいるなんて、一体どこの誰が考えるだろうか。

結婚相手は要らないと話を蹴りまくり、逃げ出し、耳を貸そうとしない弟に対し、母が行った無謀とも言える作戦。

しかしその作戦は、案外母の思ったとおりに進んでいて、王女は顔を綻ばせた。

まさか彼も、たった一回、たまたま出た夜会の際に話した相手がメイドだとは思わなかったろう。

ひそかに、こんな少女なら楽しいかもしれない、なんて思った幼い日の思い出を覚えているかどうかは別として。

「あの子、それにしてもよく貴族の娘がメイドなんて引き受けたわね」

どうせあの母のこと、手八丁口八丁で丸め込んだに違いない。

「さて。あの子達はどうするのかしら」

くすくすと美しい顔が楽しげに笑ったことを、彼らは知らない。

それを知っているのは、母と王女の親子だけ。

父も、弟も知らない。

「まあ、あの子のためですものね」

やっと中庭に出てきた弟は、息を切らして彼女に近づく。メイド服が揺らめいて、そして弟を見つけて少し浮き上がる。

その様子は、彼女の心を表現しているみたいで、思わず笑いが零れた。抑えようとするのに、次々と溢れて止まらず、しばらく声を押し殺して笑う。

こんな楽しいことがあるだろうか。ロマンス小説よりよほど面白い。

王女はそんなことを思いつつ、メイドに言った。

「無事、結婚まで漕ぎつけられるといいわねえ」

「王妃様が、身分差には障害がつきものだから、そろそろ引き離す作戦を実行しようかと仰っていましたわ」

答えるメイドも楽しそうだ。一体何人ぐるみで王子の恋愛を楽しんでいるんだと、知られたら怒られるだろう。知らせるつもりもないし、ばれない自信もあるから出来ることだ。

「あら、いいわね。反対する母、それに立ち向かう息子。彼は愛しい人を守りきれることが出来るのか。ロマンス小説に出てきそう」

王女はにつこりと笑い、そして窓を閉めて部屋の奥へと入っていく。

日差しを厭い、日中滅多にカーテンを開けない彼女にしてみれば、日に焼けていないかが最大の問題だった。

王族の少女というのは、並の努力ではいけないのだ。常に美しさを心がけていなければいけない。

「わたくしも、したいものだわ。恋」

「姫様もできますわ、きつと」

弟の幸せそうな姿に、わずかに嫉妬を覚えた王女はため息を吐いた。弟に訪れたのだから、自分に訪れてもいいはずである、と。

「だって、王子が恋をしたんだもの」

結末は当然決まっているでしょう？

「ハッピーエンドしかないじゃない」

それに憧れているんだと言えば、メイドは僅かに笑った。

王子が真相を知るのは、彼が花嫁を迎えるちょうどその日であったというのは、余談である。

そして、王女が運命の相手を見つけ、城を出て行ってしまつのも。

興味本位の観察を（後書き）

ということ、またまた身分差。

まだ少し身分差ネタがあるんだよね。次は江戸くらい？？何か水戸黄門みたいなやりたいなあーと思ってた頃があつたのさ。

格さんの方が全体的に好みなのです、という内容。出たがりな藩主の娘と、その教育係（子守役？）の二人。年の差（がつつり10歳くらい）、身長差とか詰め込んだ感満載のネタでした。

練り直したら短編でUPしたいです。

君の背中（前書き）

幼馴染モノ。わたしが創作で一番最初に書いたのが、幼馴染モノだったせいか、度々登場する関係です。何と云うか、何回書いても難しいな、と思う。

両片想いも美味しいし、かたっぱいだけでも美味しい。もちろん、全然気にしてなかった二人が歩み寄る話でもイケます。とりあえず、書いても飽きないテーマ。

君の背中

いつの間に、わたしの目の前にいるやつの背中は大きくなったんだろ。

そう思いつつ、目の前にある彼の背中を見やる。もちろん、気付かれないように。まあ、相手は向こうを向いているんだし、大丈夫だとは思っけど。

見つめてたのがばれるのは嫌でしょう？

つい最近までわたしより小さくて、『しょうがないなあ』と思いながら見守ってきたのに。今はわたしより大きい。身長だって、肩幅だって……背中だって。

何もかもが、わたしよりずっとずっと大きくて、彼とわたしの違いを示す。

彼は男で、わたしは女で、一緒じゃないんだと。

「ねえ」

「んー？」

声だって、昔はもっと可愛かったのに。高くって、少し尖ってたけど面白くって。やっぱり可愛くって。

「何で成長するの？」

「はあ？」

いつの間に、わたしの知らない人になったの？

わたしの代わりに自転車を押す背中を見つめ、振り返らないやつを見つめる。

いつの間に？ わたしずっと見てきたのに、いつの間にそんなにわたしの知らない『男の人』になったの？？

わたし、全然気付かなかったよ。いつも、近くにいたと思ってたのに。

確かに、年を経るごとに一緒にいる時間は減っていったけど、だけどそれでも、近いと思ってた。誰より、近い、なんて。

彼に彼女ができたなら、そんなことないだろうに。

そんなことに、今初めて気が付いた。そして、何故かその事実を疎ましく思った。

「わたしの方が、大きかったのに」

「一年も前の話だろう」

そうなんだけど、改めて、大きくなったと思う。ちよつと一緒に帰らなくなっただけで。

それが分かってしまう。

悔しいのか、寂しいのか。はたまたそれ以外か。分からないけれど、イラツとしたのも事実で。

「悔しい……」

「何、お前。まだ根に持ってるの？」

それが悪いか。負けるのは嫌なんだ。

たえ仕方のないことだとしても。また一つ、わたしの知らない人みたいな証拠が増えた。

「絶対飲んでる牛乳の量なら、あんたに負けない気がする」

「牛乳……」

骨太くなるだけだろ、それ。そのツツコミは聞こえなかったふりをする。骨が丈夫になることはいいことなんだ。現に骨密度がだね。

「ずーるーいー」

「はいはい」

「その余裕そうな顔もむかつく」

「そうですか」

機嫌悪いなあ、と呟きながら、笑った。

少しだけ、小さい頃のやつの顔と重なる。少し、気弱そうな笑顔もそのままだ。大人しくって、誰に何を言われても言い返そうとはしなかった。

その分、わたしが言い返してたんだけど。だから、弟みたいなものだと思ってたんだ。

彼は、わたしが近くで見てなきゃって。

「後ろ、乗つけて。歩くの疲れた」

「我がままだな」

「いいんだよ」

あんたにしか言わないんだから。

そうだ。クラスでこんな発言するわけない。いつもはわたしの方が大人しくて、聞き分けのよい、何を言われても言い返さない子。

そうしようと、学年が上がることに思うようになったのだ。昔のように、男の子とけんかなんてしない。

「はいはい。じゃあ、乗ってくださいな」

「ありがと」

彼が自転車に跨ったのを確認し、わたしは後ろに乗った。そして無意味にぎゅっと抱きついてみる。

やっぱり少し大きかった。一年前はもう少し細かった気がする。

男の子、の体だった。細くて、頼りなくって、背丈だけが急に伸びたような。そんな。

もやしって言ったら怒られたっけ。

「太った……」

「筋肉がついたと言ってほしい」

そんなこと、絶対言ってやらない。

だって認めることになるもん。

「少しは動揺すればいいのに。女の子が抱きついてるんだから」

「女の子、ねえ」

「何が言いたいのか？」

「いいえ」

ぐっと必要以上力を入れても、彼は苦しがる様子を見せなかった。それが悔しくって、もっと力を入れてみる。

これでもかと言うくらい押し付けて、それからふと『動揺しないのか』とつつこんだ。仮にも女の子が抱きついてるんだぞ。

少しくらい慌ててもいいだろう。

なんて。まあ、女の子として意識されていないのだから、それも

仕方のないことだろう。

「つまんないの」

「何が」

「何でもないよー」

せめてもう少し、立派な体つきをしていれば、彼も動揺するんだろつか、なんて詮のないことを考えた。もっとも、意識してほしいわけじゃないんだけど。

だって意識されたら、もっと遠のいてしまうから。

男と、女の距離は遠かった。だから一番近い、幼馴染でいい。性別なんて、気にしないほうがきつといいんだ。気にしたら、寂しくなってしまうだろうから。

「家つくぞ」

「うん」

「降りるよ」

「うーん。もうちょっとだけね」

「苦しい……」

「ハイハイ」

それだけの観想を言う彼が面白くって、少し笑った。何だ、やっぱり意識してないじゃん。

よかったのか、悪かったのか。

判断はつかないけれど。でもとりあえず、安心してしまった。

だがしかし、彼女は知る由もない。彼が苦しがっている様子を見せず、かつ冷静に見せかけようと必至なのを。

苦しがつている余裕もなく、彼はひたすら前に集中していた。そして、頭の中で素数を数え、羊を数え、拳句2の一乗から順々に計算している彼の心が伝わることは、当分ないのだった。

少なくとも彼は、彼女を『幼馴染』ではなく、『幼馴染のく女の

子』として見ていた。そう、彼は初めから、自分と彼女の違いなどはつきりと分かっていたのだ。

それを知らない彼女は、未だ『幼馴染』の關係に執着している。

「（馬鹿か、こいつは）」

そう思いつつ、口に出さないのは、彼女がそれを望んでいるからだった。

想いの伝わらない彼から、彼女へ。

その『心』が伝わる『当分先』はいつ頃なのか。

君の背中（後書き）

男の子（恋愛）（友情？）女の子

こんな関係って、可愛い。男の子の成長って早すぎて、ちょっと寂しいよねって言うお話でした。

ネタ提供（無意識）の幼馴染に感謝。（残念ながら、現実では幼馴染に恋愛感情はそうそう持てない）

優しい嘘（前書き）

幼馴染愛好家シリーズ。年の差幼馴染カップル。その一は普通に過去編を交えつつな感じです。書くたびにヒーローが怪しくなってくる。

優しい嘘

「ねえ、はじめお兄ちゃん。今日、沙夜のお家にサンタさん来る？」
クルンとした、丸い瞳がこちらを向いた。

今年小学校に上がったばかりの少女 上野 沙夜^{さよ} は彼女が生まれたときから一緒に幼馴染。お気に入りの真つ白なテディベアを抱いて、こちらへとトテト歩いてきた。

風呂から上がったばかりで上気した顔と、少し濡れた髪をみて、やれやれと思いながら四歳年下の少女のほうへ行った。

肩まで伸ばしている髪が淡いピンク色のパジャマをぬらしている。このパジャマは、そういえば彼女のお気に入りのものの一つだった。
た。

「沙夜。髪が濡れたままで、こっちに来ちゃだめだって言っただろ？
風邪引いたら俺が美雪さんに怒られるんだけど」

そう言いながら、首にかけていたタオルを引っ張り、沙夜の髪に当てる。こちらも風呂上りで、母さんに言われて慌てて着替えてきたのだ。

「だって、お母さんがいい子にしないとサンタさんこないって…」

「…」
テディベアを抱く手がぎゅっと強くなるのを見て、内心やれやれともう一度首を振った。

美雪さんも意地が悪い。何も当日に言わなくてもいいだろう。もちろん俺はもう、信じる年齢でもなかったので、チラリと母親を見る。

母親は難しい顔をして、こちらを見ていた。

「で、今日は何をしたから怒られたんだ？」

沙夜の身長にあわせて屈み、髪を拭きつつ聞いてやる。

最近自我が芽生えたらしく、反抗期なんだそう。美雪さんが嘆いていた。『私も徹平も反抗期らしい反抗期がなかったから、うち

の両親たちもお手上げなのよ』と苦笑いで語っていた。

「あのね。はじめお兄ちゃんのとこで寝るって」

しゅん、と萎むということは、自分がわがママを言っているということを分かっている証拠だ。自分にも少し見覚えがあり、少し苦い顔をした。

でもそれで美雪さんが怒った理由が少し分かった。俺はあの家であまり歓迎されない。

あそこの夫婦は代々幼馴染らしくて、美雪さんのご両親も確か幼馴染だった。美雪さんはその呪いとも運命とも取れるソレから沙夜を引き剥がしたいらしく、幼馴染は作らないようにしようと思っただけらしい。

なのに子供を生んでみると、四歳差とはいえ、幼馴染ができた。

……怒り狂っていた美雪さんは小さかった俺から見ても大迫力だったのを今も覚えている。

「あゝ、ほら、今日はクリスマスイブだろう？ そんなときぐらい一緒に寝たいんだよ」

フォローのつもりで言ってみるも、最近わがままばかりの沙夜は怒られる度に俺のところへ来て俺のベッドで泣きつかれて眠るのだ。当然、今日もそうなりそうな気がする。ちなみに徹平おじさんは沙夜が俺のところに来るのは少しだけ反対らしい。

『この年で、娘を嫁に出した父親の心境なんてごめんだよ』と笑っていた。

まあ、それはそれとして、夜に二人つきりで過ごせることについては『嬉しいけどね。甘えられるから』と笑っている。

俺が年齢の割りにませていると言われるのは、この所為だと思うんだが、誰もそれに同意してくれない。

「美雪さんや徹平おじさんが寂しいだろう？」

諭すような言葉にも、沙夜はかたくなに首を横に振った。

「沙夜ははじめお兄ちゃんと結婚するからいいの」

この子には俺を喜ばせる素質があると思う。

ただか四歳年下の女の子に落とされるのは、男としてどうかと思うけど、そんなことが関係なくなるくらいには嬉しかった。

たとえば、何年か経ってそのことを忘れてしまったとしても。

「あらあら、沙夜ちゃんは一を誘惑するのが上手ねえ。サンタさんモ一にはいらなにかしら？」

母がこちらをみてにやりと笑う。

まるで、『これでうちの子は独身のまま一生を過ごすことはないわね』と確信しているかのようだった。

「母さん!!」

言葉の意味が分からない沙夜だからよかったものの……と思う反面、もう少し大人になってくれたらなあ、と思う。まあ、俺だってまだ小学生だけど。

「サンタさん、こない？」

泣きそうになったので、慌てて抱き上げた。小さい彼女は本当に軽い。こつん、と額同士をつけ、沙夜に視線を合わせる。

「沙夜。サンタさんは来るよ」

「ーさん？ はーじーめーさん？」

トントントン、と階段を上っていく。

今日はクリスマスなんだから、好きな人に会いたくなるのは必須だと思っただけど、どうも四歳年上のお兄さんはそうではないらしい。

まあ、完全な片思いなんだけど……。もうずっと、この生まれてこの方、十六年間ずっと、片思い中なんだけど。

「ーさん？ 入るよ？」

もう何年も繰り返されてきた動作だ。

始めのうちはノックさえしなかったんだけど、何年か前に着替え中に入ってしまったことがあって以来、きちんとノックするように

なった。

返事がないので入ろうか入るまいか迷ったけれど、いることは確かなので部屋へと滑り込む。音楽でも聴いてるんだろう。

それでそのまま論文でも書いてる。それが最近のパターンなんだから。

「あ、やつぱ……アレ、ヘッドフォンしてない」

机に向かっている一さんの耳には、ヘッドフォンがされていない。かといって、イヤフォンというわけでもないし……。

「寝てる……？」

細心の注意を払い、足元に乱雑に積んである本をよけ、机へと到達する。

わけの分からない本に囲まれて、一さんは組んだ腕の上へ顔をおき、寝ていた。顔のいい人は寝顔見られても気にしないはず。私なんて、寝顔なんか見られた日には憤死する。

「一さんが相手してくれないから、私は帰りますよ？」

一瞬、本当に一瞬だけ、唇でも奪ってやろうかと考えたけれど、『実は起きてました』なんて少女漫画的な展開はイヤなので止めておいた。

プレゼントだけおいて帰ろうと思い、もっていた箱を邪魔にならないように机の上に配置した。

そしてまたそつと本に気をつけて足を踏み出そうとした。

「沙夜」

びくりと心臓がはねた。

寝た振りしていたの？！ そう聞き返そうと振り向いても、一さんは寝たままだった。そのまま一さんはまた言葉を紡ぐ。

「サントさん……ちゃんとくるから」

いつだったか、何年か前に言われた言葉だ。

わがままばかり言っていた私に、母がサントさんは来ない、と言った。それを聞いて、哀しくなって、すぐに一さんのところへ来たときに言われたのだ。

それで、安心した。きつと、一さんが言っなら絶対なんだろうって、無条件に信じきっていた。

「サンタさん、いるの？」

そして、その後、聞いたのだ。

意地悪な男の子が、私に『サンタさんはいないんだ』と言ったから。それを話すと一さんはほんの少しだけ眉をひそめて。

「いるんだよ」

沙夜は、どっちの言葉を信じるんだ。俺と、同級生と。

「また、嘘ついてる」

そして、月日が経ち、私もサンタクロースを信じる年ではなくなつたとき、一さんを嘘つきと呼んだ。

『一さんの嘘つき！ もう信じないんだから』

一さんの優しさを理解するほど大人ではなかったけれど、こども扱いされたのがひどく気に障つたのだ。

でも、確かに私は。

「一さんのたくさんの嘘に元氣付けられているんだよね」

それがほんの少し、分かり始めたとき、謝るには遅すぎる。

「ありがとう……一さん」

優しい嘘を、また私にくれますか？　嘘でも、私はきつと。

「嘘でも、私、多分喜ぶんですよ？」

本当の言葉が欲しいとは、さすがに言えないから。

ボタン、と扉が閉まつたと同時に顔を上げた。

「俺、今絶対人に会えない」

独り言のように呟くと、赤くなっているであろう顔に手を当てる。
「自分の言葉の力を知らないって……タチ悪いな」

クリスマスの力を借りて、告げてしまおうかとも思っていた言葉を呑み込んだ。

「空気に流されるのは、イヤだろ」
にやり、と笑う。欲しいのなら、いつだって、手に入れるまでだ。
「美雪さんに、殺されるかも。俺」

正直じゃない男の子が、素直じゃない女の子を手に入れるまであと何ヶ月？

優しい嘘（後書き）

ヒロイン

ヒーローですので、甘々好きな人はよい
かも……しれないです。はい。珍しく、甘い感じを目指してますよ。

S t ・ V a l e n t i n e ' s D a y (前書き)

少女小説もどきとしては、書いておかなければいけない感じのシチュを一つ。年の差が多分、最高潮だったんだろうなと思います。

St・Valentine's Day

そもそも、バレンタインデーと言うのは、日本のお菓子業界の戦略であり、決して日本人がもっているチョコレートが正式なイメージとは言いがたく、むしろ外国では男性から女性というのも珍しくないし、バレンタインデーとは元々一人の司教様が元になっていて……。

「何ブツブツ一人で言ってるのよ」

そこで私はうんちくを打ち切った。強制的に終わらざるを得なくなった。

私の目の前にあるのは、目の回るほど沢山詰まれたチョコ、チョコ、チョコ。

どこを見渡したって、その他の商品は私の目に映らない。ついと言うと、その棚と棚の間にいるのは全て女性だ。

つまりは、チョコレート売り場だ。

「来るんじゃないかった」

自然とこの言葉が口について出てきた。そんな私を、一体誰が責められるだろう。いや、攻められない。が、私をこのチョコ専門店に連れてきた我が友人なら、あるいはするかもしれない。

「本当に、そんなこと思ってるわけ？」

ほら……。彼女の手にはすでに十数個のチョコが入っているカゴが。

「か、彼氏のチョコを買いに来るだけじゃなかったのか、お前は」

皮肉にならない程度に、しかし抑えきれない怒りを混ぜて奴に

木村 百合に問う。

奴は今日、私にこうのたもつたのだ。

『彼氏のチョコが決まらないから、一緒に来て欲しいの。三年目になってるんだから、って思いかもしれないけど、特別なことがしたいから』

と。

だから私は、わざわざ用もない、この店に来たのだ。が、しかし、奴はにこりと笑って答えた。

「そんなの嘘に決まってるでしょ？ あいつに特別なことがしたいなんて、そんな時期とつくに過ぎたわよ。全てはあんたのためよ」
今年で三年目と言う奴の彼氏殿は、一体どうやって奴の手綱を握っているのか。

私は今、それが無性に知りたくなった。ぜひこいつの扱いからを教えてください。彼氏様。

しかしすぐさま。

『百合の扱い方？ そんなのあるわけないじゃないかあ。もう、沙夜ちゃんは分かりきったことを〜』

百合は扱うものなんかじゃないよ。人を扱うなんて、ありえないだろう。』

というのほほんとした、しかし結構まともな回答が返ってきた気がした。

今もし、彼がいたなら間違いなくそう答えていただろう。百合の彼は、百合の性格に似合わず天然癒し系だ。

可愛いというのかもしれない。そんなことを考えながら、私は百合へ向き直った。

「私のためって言うんなら、今すぐこの店から出る。それが望みよ」
百合の手首を掴み、私はレジへと向かう。が、悲しいかな体格は百合の方が私よりはるかによい。

ゆうに一六〇？を超えているのだ。一五〇？ちょいの私が敵うはずもない。

「あんたも買うのよ」

奴が一回私を引っ張れば、私に抵抗する術はなかった。

「私には必要ない！！ 一体誰にあげるって言うのよ」

「そんなの彼に決まってるじゃない」

『彼』ねえ？

「もう、沙夜のテレ屋さん」

そんな言い方されても気持ち悪いんですが。

「^{はじ}くんよ〜」

ウフフって、お前が一番気持ち悪いわ。

「は、一くんって、一さんのこと？」

何で、何で、何で百合がそんなこと知ってるの?! しかも”くん”付け? 私より馴れ馴れしい気がするのは私だけですか?!

一さんっていうのは私の家の隣に住んでいる、四歳年上のお兄さん。

そうただの、お兄さん。

「べ、別に一さんには買わないよ。ってか、何であんたが一さんを知ってるの?」

平静を装ってみたものの、それが失敗したのは自分でも分かった。でもって、焦って、顔が赤くなるのが分かったけれど、誤魔化す術を私は持っていない。

ふーんという百合がものすごく憎らしい。

「彼氏の、晴夏^{はるか}のお友達なんだって」

ケロリつと言ったのけた。そうね、世の中結構狭いものね。そんなことも、あるわよね。

百合の彼氏ってのほんととして、優しくて、誰にでも好かれるタイプだもんね。友達だって多いわよねって、納得できるかあ!!

「じゃあ、何で私が一さんにチヨコレートをあげる、っていう設定になってるのか教えてくれる?」

「一くんが隣の家の女の子が、すごく可愛いって言ってたから、何かあるなあ。と思ってたのよね。そもそもあんたが可愛い、とかどうなのよ」

そんな、本人に失礼だと思わないんですか? 百合さん。可愛いってどうよ、とか。

「もう、沙夜は本当にテレ屋さんだからなあ」

からかうような声で百合は言い、ついで真剣な顔を私に向けてき

た。

「そんなことしてると。いくら沙夜思いの、『一さん』でも他の子に取られちゃうかもね」

わざとらしい言い方。わざと『一さん』と言っているのが、何だか悔しくて……。

確かに一さんは優しい。ちょっと優しすぎるんじゃないかって思うくらいに、優しい。

私に甘いのも周知の事実だ。小さい頃から、これでもかというほどに一さんは私に甘かった。自分でも『一さんって甘いよなあ』と思う。

だけどそれは少し年の離れた妹を溺愛するようなもので正直、複雑以外の何ものでもないのだ。

それなら、少し意識して、距離を置かれるほうが余程脈ありと言うものではないだろうか。

だから今年は、毎年あげていたチョコをあげるのはよそうと思っていた。

百合が何か言いたげな顔でこちらを見る。あまりにも長い間黙り込んでしまった私を心配しているのが分かったが、あえて気が付かないふりをする。

百合を構っていられるほど私の心に余裕があるわけではないから。少し困らせたいというのが、本音かもしれない。百合のことではなく、一さんのことだけ。

いつも私の前で穏やかに微笑む顔を崩してやりたかったのかもしれない。

どうせ私がチョコをあげなかったくらいで、動揺なんかしないだろうけど。そんなこと分かりきっているけど。でも、何かやりたかった。

「そうかもね」

やっとのことで言葉が出た。その言葉に百合は意外そうな顔をしてこちらを見る。

「沙夜？」

一さんはただのお兄さんで、私はただの妹で。きつと家が隣でなければ、接点も何もなくて。

顔を合わすことさえもなかったかもしれない。なのに、なのに、どうして。

どうして、それが分かっているのに私は今、顔と目頭が熱くて、今にも泣き出してしまいそうなんだろう？

「百合ごめん。私やつぱり帰るわ」

百合はもう、私の手を掴んではなかった。私は逃げるように店から出た。

人の喧騒から逃げるように人通りの少ない方へと走る。にぎやかな通りから見えるチヨコたちと、それを嬉しそうに買う女性たちがひどくうらめしかった。

と、その時、見慣れた姿が前をよぎる。

「はじ……」

声をかけようとして、やめた。

今まさに考えていた人に、八つ当たりのように恨んでいた人に、話しかけたくないという幼い意地と、一さんの前にいる女の人気がなくなったから。

長い髪をゆるいカールにして垂らし、いかにも女の子と言う人。フワンと揺れる髪は柔らかそうで、女の私でも見惚れた。

遠くから見ても分かる、ケアのしっかりされた髪と顔が、私との落差をうかがわせた。

可愛らしい、ふわふわとしたコートに短めのスカート。そこから形のよい、長い足がすらりと伸びていた。

いかにも清楚です、というラインで固めてあり、あちこちの男性が振り返っていた。

顔を赤らめて……。ああ、一さんに気があるんだなあって分かった。一さんと同じくらいの年、綺麗で一さんの隣にいてもおかしくない人。

違和感なんかなく、つりあっている人。

私みたいに幼くなくて、十人並みの顔じゃなくて、素直でひねくれてなくて。

涙を流すと惨めになるだけだから、それが分かっていたから、唇を噛んでそれをやり過ぐす。顔を上げて、零れないようにせき止めた。

「私って、運悪いなあ」

何も思い人が告白されてるところになんて出くわさなくても。くると踵を返し、駅へと向かう。

ここで鉢合わせとかになったら、さすがに泣いてしまいそうな気がした。

ルルルルルルルルルルルル

友から色気も面白みもないといわれる着信音。

面倒だからと言う理由で買って以来、一度も変えていない。あの子からの電話とメール以外は。

あの子は嬉々として、自分の好きな歌手の着うたを入れて設定したから。

それを変えずに、あの子からの電話とメールだけ音楽がついていたら、特別だと皆に知らせているようなものだと思ったが、変えるのももったいなくて結局そのままにしている。

ディスプレイを見ると、丁度今考えていた子の友達だった。最近では少し珍しい、着信。

「もしもし？」

「あ、一くん？」

いつから”一くん”呼ばわりされ始めたのか聞いてみたい。

「何ですか？ 木村 百合さん」

この子の彼氏とは友人だが、電話をされたのは初めてだ。一体何の用なのか。

「ああ……。怒らないで聞いてくださいね」

そう前置きされると、俺を怒らせる何かが起こったのかと危惧してしまう。

彼氏を振ったとかか？ でもそんなじゃあ怒ったりしないしな。本人たちの勝手だし……。

後、この子との共通点といえば、あの子しかない。しかも、俺が怒ることと言えばそれしかないようにも思えた。

「言いにくいんですけど。その、ちょこつと突っつきすぎちゃいました」

ぶつり、と何も言わずに電話を切る。

これくらいの意趣返しくらい多めに見てくれるだろう。誰を、突きすぎたなんて言わない、けど分かる。

彼女はわざとおどけているが、その実とても焦っているのが分かった。すぐさま家に帰ろうとした、が面倒はまだ残っていた。

「ねえ、伊藤くん」

あの子より長い髪。あの子のしない化粧を、香水をしている”女”。あの子のするような無邪気な笑い方を知らない人。

何もかもを比べてしまい、小さな自己嫌悪が自分自身に襲い掛かる。

上野 沙夜 それがあの子の名前。四歳年下で、現在高校一年生。小さい頃から俺を”兄”として慕う可愛い妹。

小学校低学年くらいの時は「お兄ちゃんのお嫁さんになる」と言っ
つて、随分と俺を舞い上がらせてくれた。

「あのね、あたし伊藤くんのことか」

「ごめん」

彼女の言葉を遮った。何に對しての謝罪なのかは自分にも分からなかった。

しかし、彼女は小さく笑う。あの子にはない、こういうことが慣れた笑み。

「さっきの、彼女？」

「いや」

短く答えると、彼女は”そうだと思った”と笑みを深くする。先程までの恥らうような顔は嘘のようにその表情を消していた。

そして再度、口を開く。

「きつとあなたを射止めるのは、色気があって知識が豊富で。

あなたの隣にいても違和感や、遅れもないような人　だと思ってたわ。今の今まで。でも、違うのね？」

どこか確信めいた、言いきるような言葉に頷いた。

「そうね、可愛い子、かしらね。さっきの惚けた顔からするとしかも、ちょっと年下。四、五歳ぐらいかしら？」

事も無げにそう分析した彼女の顔を驚いて見ていると、彼女は俺の顔を見て『バレバレよ』と艶やかに微笑む。

「何か緊急事態なんでしょう？　行かなくていいの？」

そう言われ、はつとすると彼女は俺の背中に手を置いて小さく押した。

「失恋させた女の前に長くいるのはルール違反なんだからね？　逃げ去るように素早く立ち去りなさいよ」

強気にそう言う彼女は、泣いているようには聞こえなかったが強がっているようにも見えてしまった。

「俺、もう行くわ」

言い訳のようにそう言うと、駅の方へと足を向けた。早く、早くと気ばかりが逸る。

電車を待つのも、家へ歩いて帰るのも、いつもの倍かった気がする。実際はいつもの半分の時間だったが。

家の前に着き、そつと隣の家の一階に目をやった。

あの子の部屋に電気はついておらず、それでも携帯に手をかけた。滅多なことでは自分からしない電話。

電話帳の一番上のグループは「00」。そこには沙夜のものしかない。

そのボタンを押そうとして、止めた。強がりの得意なあの子を崩落させるにはどうしたらいいか。

付き合いの長い自分は分かっているはずだ。分かっているはずなのに、冷静さを欠いている自分がいる。

もともと布団から出る。母も父もないことが 珍しく夜勤が重なったことが唯一の救いだった。

こんな風に、泣き出しそうな顔なんて、見られたくない。

両親は明日の昼以降に帰るはずだから、それまでには何とかなるだろうと勝手に、希望的観測込みで推理する。

だから、布団から出たくないなら今日はもうこのまま不貞寝もできてしまう。

しかし布団の中で拗ねるのも馬鹿らしくなった。幼い行動を取り続ける自分に嫌気が差す。

こんな自分のくせに、一さんの近くにいた彼女へ嫉妬するなんて馬鹿みたい、馬鹿みたい、馬鹿みたい！！ でも、でも、でも！！

「一さんのバーカ」

少しくらいなら一さんに非があるもん。そうだよ、一さんが、妙に甘いから。

「馬鹿でごめん。沙夜」

笑いを含んだ声が耳朶をかすめ、思わず『ヒヤッ』と声を上げた。一さんの声は普通に聞いても心臓に悪い。耳元なら威力は倍増だ。

「な、なっ……何でいるの?！」

しかしその問いは、一さんの持っている小ぶりなお鍋と猫のキー

ホルダーがついた鍵で解決した。

つまりは両親がいないことを心配したおばさん（一さんのお母さん）は、『お夕飯のおすそ分け』と称して、一さんを私のところへ行くように言っただけのことだ。

ちなみにおばさんは変なところで鋭いので、私の気持ちなんてとつくの昔にあばかれていた。

だからわざわざ一さんが帰って来るまでうちには来なかったんだ。「ふ、不法侵入で訴えてやる」

苦し紛れに出た一言に一さんは目を丸くする。

そして、ポンポンと頭を叩き、「沙夜がそんなこと言う年になるとはね」と呟いた。その発言は私の神経を逆なでするのに十分すぎた。

「それ、どういう意味、一さん。私だってこのくらい知ってるわよ！！」

噛み付くように言い、その幼さに小さな後悔が生まれた。しかし言っただけを撤回しようなんてこれっぽっちも思わなかった。

その様子を一さんは笑いながら見ていた。実はこの笑顔が大敵だなんて、誰も知りはないだろう。

「ハイハイ。俺が言ったのは、夕食を持ってきた隣のお兄さんに、不法侵入なんてことを言い出す皮肉屋さんになったんだねってことだよ」

宥めるようなその口調とは対照的に、その内容は私を馬鹿にしている以外の何者でもなかった。

私を宥めようとしているにもかかわらず、まるでその気がないような言い方。

いつもなら、踊らされてるな、と思っても怒れないような言い方をする一さんにしては珍しいことだった。

それを分かっていながら、一さんにしては珍しいと思いつつも、それでも治まるような怒りではなかった。

「お兄さんなら、妹の部屋に勝手に入ってこないでよ。嫌われちゃ

「うよ、お兄ちゃん」

皮肉半分、自嘲半分。その台詞を搾り出し、私は一さんを部屋から追い出した。

そしてその扉に背中をつけた。鍵なんてものが付いているはずもないので、背中を付けたままそこにズルズルと座り込んだ。

コン、と頭を扉に持たせかけ、足を伸ばした。しわくちやになっているスカートのプリーツと、脱ぎっぱなしのままベッドからずり落ちるブレザー！

どれもこれも、一さんとの違いを表していて。

涙が、こぼれそうだった。

「沙夜」

呼ばれる。この声に、私は抗えない。それは、抗うことさえ許さないとされているようで。

背中越しに感じるのは、扉の冷たさ……それと混じる人の温かさ。背中合わせで座っているのに、扉なんてそんなに厚くないはずなのに、体温以外は何も伝わらなさそうだった。

「一さん、なんて」

一さんなんて大嫌い、そう言ったら、この人は何か反応してくれるだろうか。少しは、動揺してくれるだろうか。

「俺なんて？」

その声は楽しんでいるようだった。少なくとも私にはそう聞こえて仕方がなかった。

私に追い出されながら、私が唇をかみ締めているのさえ分かっているから、まだ私をからかおうとするの？

「嫌い」

”大”はつけられなかった。私が言いたくなかったから。

「へえ」

少しだけ、少しだけ声が低くなったように感じた。いつもみたいな、穏やかそのものの声じゃない。

怖い、男の人の声だった。一さんは好きだけど、改めて一さんが

『男の人』なのだと感じた。

「俺、十年間沙夜を思い続けてきたのに」

振られちゃったな。一さんはおどけるようにそう言った。

その言葉がどんなに私を揺さぶるか、どんなに私を傷付けるか知らずに。知らず、涙がこぼれた。

「嫌い」

沙夜のこの言葉に、ここまでの威力があるとは正直思わなかった。多少のショックは覚悟していたけれど、自分の思考回路がとまるようなことは想像もしていなかった。

どうやらこの病、自分が思っている以上に重症らしい。いや、前々から重症だと自覚はしていたけれど。

それでもこの娘には動揺する自分なんて見せたくなかった。

「へえ」

震えそうになった声を押さえ込むように出した。ばれたりはいらないだろうか？

そしてそれを隠すように、さらに言葉を紡いだ。おどけるように、まるで何でもないように告白まがいの言葉を口から出した。

「俺、十年間沙夜を思い続けてきたのに」

「っ」

扉の向こうから、何かを堪えるように声ならぬ声が上がった。

沙夜？”と声をかけると、小さな声が聞こえた。

「一さんは……、さあ」

涙声になっていて、びくりと肩を震わせた。

「そんなこと言って 私のこと妹にしか見てないくせに！！ 何でそんなこと言うの！！」

怒りをはらむ声。それでも弱々しく、思わず腰が浮いた。

「分かつてるの！？　それで私誤解しちゃうよ！？　一さんが私に甘いのは、私が、妹みたいだからなんでしょう？」

なら。ならもう、そんなこと言つて、私に希望持たせないでよ。お願いだから、もう、やめて。これ以上、甘やかしたり、優しくなんてしないで、お願い」

涙をこらえるほどに、強くなる声。聞いているこつちが痛くなつてきて、それでも沙夜の涙を止める術を知らなかった。

一番泣いて欲しくない女の子を、泣かしている自分。自分でやったことの始末もできない子どもな自分。

欲しくて欲しくてたまらないくせに、素直にそれが言えない自分。素直に好きだと伝えることができない、自分。

「一さん、帰つて」

「沙夜」

「帰つてつてばあ！！」

やっと出た声に続く拒絶。その後も続く嗚咽。もどかしくて、痛くて、悔しくて　でもどうしようもない。

自業自得なうえにこの娘まで巻き込んでしまった罰だから。

「沙夜。俺はさ、我が俤言いたくても言えない沙夜が好きだよ？」

優しくて、でもそれを表に出すのは苦手で　でもちゃんと分かっている。沙夜は優しい。そんな沙夜が好きな俺じゃダメ？」

カチャリと扉が静かに開いた。扉に寄りかかっていたままだった体は、抵抗も何もなく重力にしたがつて床に沈んだ。

「一さんのバカ」

「ハイハイ」

顔を目も赤くした沙夜がいた。ショートカットというには少し長すぎる髪にまだまだ幼さが残る顔。床に倒れたまま、沙夜を見つめた。

上から覗き込まれ、その拍子に最後の一滴が零れ落ちた。その雫が頬に落ち、それはそのまま流れた。

「それじゃあ、誤解しろって言うてるもんなんだよ？ それを分かって、まだ私をからかうの？」

「からかってないよ」

今度は割合素直に言葉が出た。そう思い、そつと息を吐き出した。

「誤解、しちゃうよ？ いいの？」

「いいよ」

こくんと頷き返せば、沙夜は再び泣き出しそうな顔をした。

「バカ」

「ハイハイ」

「バーカー!!」

「うん、そうだね」

俺はバカだよ。そう返すと、沙夜は”そんなことない!”と即答する。

そして自分が言ったことに気が付き、口元に手を当てた。その顔はほんのりと桃色に染まる。

「本当に、誤解しちゃうよ？」

それでもしつこく聞いてくる沙夜を黙らせるために、沙夜の腕を引つ張った。

ポスン、と一回りも、二周りも小さいからだが腕の中に納まる。

沙夜は急に大人しくなった。

「誤解、でもないけどね」

呟くようにそう言えば、腕の中で小さく動く気配がした。

「女の人からたくさんチョコを貰っておいで、よく言っね」

自分の腕の中から声が上がる。服に顔をうずめたまま、決してこちらを見ようとなんてしていなかった。

それは、彼女の照れ隠しだと分かっている。しかし、その言葉は照れ隠しゆえの嘘とも思えなかった。

少しだけふてくされたような言葉の意味を取りかねた。

「はい？」

そう返すと、キッと沙夜が顔を上げる。その顔は見事なまでの朱

色だった。

「きよ、今日、貰ってたもん。キレイな女の人からっ!」

最後のほうはもう意地になって言った、と言う気配がにじみ出ている。

そして、沙夜はそんな自分を恥じ入るようにフイッと顔を背けた。何、この可愛さ。

どうしよう。すっごく嬉しい。どこまで単純なんだよ、俺。

と、つつこみながらも緩みそうな頬を引き締めた。いつも穏やかな表情といわれるが、意識して作るなんてほぼ初めてに等しい。

「何、ソレ? やきもち?」

意地悪をしてそう言つと、赤い顔が一段と赤くなる。

『ち、違 う、もん』と聞き漏らしそうなくらい小さな声でそう言つても、説得力はない。全く、ない。

「大丈夫だよ。沙夜。俺は沙夜以外からチョコレートなんて貰わないって決めてるし。」

実際、もう何年だ? 物心ついてからだから、一〇年以上その決まりを守ってるぞ。俺は」

ギューッと服を掴む沙夜の力が強くなり、また顔をうずめた。フルフルとその手が震えて、なんだか自分が 犯罪をやっている気がしてならない。

数十秒たって、沙夜は小さく息を吐いた後ゆっくりと言葉を紡いだ。

「一さんは、私に甘すぎると思う」

くぐもった声にニヤリと口角が上がるのが分かる。

「ん」。そんなこともないけどなあ。

結構、沙夜に甘いのは自覚してるけど、ってかよく言われていい加減認めてるけど 甘すぎってほどでもないと思うよ、俺は。多分その証拠に、これから俺にチョコを用意してない沙夜にお仕置きしようかと思ってるし」

俺って好きな子いじめちゃうタイプだったんだ。と納得したよ

うに呟くと、サディスト……と呟くような声が聞こえた。

「どんなこと、して欲しい？」

そう聞くと、沙夜はガバッと顔を上げた。すごい勢いだっただ。

「わ、私、Mじゃないもん!!」

何となく、ずれた回答だったが、そんなこと関係なかった。

「すきあり」

沙夜の頬に唇を押し付ける。沙夜の全ての行動が止まった。一秒、

二秒……三秒。

「は、ははははーさん」

先程とは比べ物にならないくらい朱い顔。自分の頬を押さえ、懸命に言葉を紡ごうとして失敗する沙夜が、すごく、すごく　可愛くて。

「あー。俺、末期だわ。完全に」

頭を押さえて、上を向いた。まだまだ幼いこの娘に、俺は悪いことを教えている気がしてならない。

いや、教えているんだろう、もうすでに。

こんなことを考えているなんて、きっと沙夜は知らない。教えるつもりもない。

だって。

「一さん、何かの病気なの!?　末期って!!　大丈夫なの?　ねえ!!」

真面目に俺の身体を心配している沙夜にこんなこと言えない。言えるはずがないだろう。

St・Valentine's Day(後書き)

年上の余裕は結構ギリギリということでしょうか。それとまただ
たんに一さんがむつつりというだけかもしれません。

女の子 男の子と見せかけて、実は女の子 男の子の構図がツボ。

あと2話くらいブログに載っているので、ホワイトデーもUPで
きます。書きだめはしとくべき。

お返しは白日に（前書き）

前回は英語だったので、今回は日本語。安直ですか？ 自覚はしております。彼氏さん目線というのは単純に面白い。

お返しは白日到

「晴夏^{はるか}……」

「ん？」

「俺たちは何をしてるんだっけ……」

「愛しの彼女さんたちに、バレンタインデーのお返しを買ってるんじゃない」

結構まともな、というかすつごくまともな答えが返ってきた。それは、そうだ。そうなんだけど。

「どうして、男二人で雑貨店に入らなきゃいけないんだ」

押し殺していても、怒りは通じるらしく『何がいいかな』と考えていたらしい友人がこちらを見た。

「何？　—こつ^はついうところ苦手？」

まだ寒いのでマフラーをつけている友人が笑う。真っ白いマフラーをつけて似合うのは、こいつだけじゃないだろうかと思ってしまう。

「お前と違って、俺はこつ^はついうところに男と二人ではいる趣味はない」

「僕もないよ」

さらりと答えて、晴夏が再び店の中へと視線を移した。

「どうせ^は一のことだから、もう用意はしてるんでしょ。いいじゃん、僕に付き合ってよ」

未だに百合の好みって分かんないんだよね、と晴夏は笑う。性格そのままの雰囲気と話しかたで怒る気も失せた。

「何買ったの？」

「ぬいぐるみ」

答えると、晴夏はびっくりしたようにこちらを見る。ただでさえ女のように大きな目をことさら大きく見開いたのだ。

一瞬、こいつの彼女よりもこいつの方が可愛いんじゃないだろう

かと思ってしまう。(失礼)

「一……、そんなの買ってるの」

「沙夜はそれで喜ぶんだよ」

何がほしい？ と毎年聞く。普通の女の子ならアクセサリや何かを頼むはずなのに、毎年沙夜は『ぬいぐるみ』と答えるのだ。

「はあ、あの沙夜ちゃんがねえ。見る限り、ぬいぐるみ愛好者には見えないよ」

「そうか？」

毎年選んでいるので、かぶらないかどうかだけが唯一の心配だ。ぬいぐるみと言っても『何の』かは限定されていないだけマシではあるが。

「でもっ。一がぬいぐるみ持ってレジ並ぶの見てみたいかも」

笑いを抑えきれないように、晴夏は笑う。

「お前にだけは見せない」

「どうせ、ちよつと怖い顔してるんでしょ。店員さんかわいそー」

まだ止まらないらしく、くつくつと少しだけ頭にくる笑いを続ける。

「早く決めるよ。あと一時間後なんだろ。約束」

「一は？」

「俺は夕方。どうせ家近いし」

「両親公認だし？」

ばつと晴夏のほうを見ると、ニヤリと顔に似合わぬ表情を出した。こいつのどこが『天然癒し系』だ。ただの優しい顔した詐欺師だろうが。

心の中で『晴夏さんは優しそうな人だね』と笑った沙夜に文句を言う。

「沙夜ちゃんの両親はまだ知らないんだっけ？」

「知ってるけどあえて黙ってたんだろ。おばさ……美雪さんに殺されるまであと少しだったこと」

怖いんだよなー、と言うと晴夏は『何？ まだ沙夜ちゃんのお母

さん、認めてないんだ』と首をかしげた。

「諦めればいいのにね。大体、自分だって幼馴染と結婚してるんだし」

「それも不本意なんだろう。『マインドコントロールで恋愛してるみたいでイヤだ!』ってプロポーズ一回断ったらしいし」

「うわ。一、気をつけないとそれは本当に危ないかもね」

軽口をたたきつつ、店内を見回すと一つのものに目が行った。

「一? ああ。そういうのもいいね。おそろいで買う?」

晴夏が笑う。

「お前の彼女と、だろ」

「それもそうだね」

ソレの一つを手を取った。

「はい。バレンタインデーのお返し」

「今年は何のぬいぐるみ?」

少し大きめの袋の中には柔らかな毛ヘアの毛皮のテディベアが座っている。薄茶色の肌に、真っ黒な丸い瞳が二つ。

無邪気な瞳は沙夜を見つめる。

「可愛い!」

きゃーと歓声を上げ、小さなテディベアを抱き上げて抱きしめる。しかしそこで何かに気がついたのか、いったん体からテディベアを離れた。

「何か……いい匂い」

スン、と鼻を動かして、テディベアの胸元に気がつく。

「コレだ」

指でテディベアの胸元にかけているシルバーペンダントを弾

いた。

「アロマペンダント、だって」

「アロマ？」

「アロマオイルをこの中に入れて、匂いを楽しむ。沙夜最近よくアロマ焚いてるだろ？」

市販のでも入れて大丈夫なんだって。

「そうなんだ。だからいい匂い」

ありがとう、と沙夜が笑う。毎年、この笑顔を見るためだけに『我慢して』ぬいぐるみを買っているのだ。

「この匂い、何？」

「ネロリ、だったかな」

美しい透かしの入った、ドロップ型のペンダント。その透かしから柔らかな、優しい花の香りが漂ってくる。

「優しい、香りだね」

この子にぴったりだ、と沙夜はティディベアを抱きしめた。

……そしてそのペンダントはしばらく『ティディベア』のアクセサリーとなる。

「それ、沙夜がつけるんじゃないの？」

と友人が言うまで。

お返しは白日に（後書き）

ホワイトデーでした。アロマ&ティンバーは私の永遠の癒しと疑いません。大好きです。

と、いうか短いですね……。ブログからだったので、コピペして初めて気が付いた。書く年数が長くなると、文章も長くなるのか……。それとも短くまとめられなくなっているのか。ともあれ、更新できて一安心です。

f i r s t (前書き)

ただのロリコンとか言われても、彼は平気だと思います。そして多分、本当にロリコンなのではないかと最近思っています。

first

そのきっかけはささいな友人の意見だった。

「で、どこまでいったの？」

頬にキス、では遅すぎるんでしょうか？

「遅いでしょうよ」

「そうかなあ」

「……一さん、可哀想に」

友人の同情したかのような発言に眉を寄せれば、彼女はにかつと笑った。

「ま 沙夜はお子ちゃまだからね」

お子ちゃまって、やっぱり幼いつてこと？ 彼とはつりあわない
つてこと？

「遅いのかな。一さん」

我が彼女殿は実にあっけらかんと、あけすけもなく言った。一瞬
こちらの思考回路が止まるうが、ショートしようが関係ないという
ことだろうか。

むしろ、狙ってるんだろうか。狙ってるんだろうさ。もし狙って
ないなら、相当タチ悪いぞ！ 沙夜。

「さあ……。人それぞれなんじゃないか？」

何とかそう切り返す。この娘、本当に新学期から高二なんだろう
かと思ってしまう。

春休み中、沙夜は何をするわけでもなくこちらへ来ては、ゴロゴ
ロしている。

もちろん、勉強道具を持ってきて、それらしいことをしているよ
うに見えるが、半分以上は俺がやっているようなものだ。

「一さん。この問題、xもyも0（ゼロ）になる」

「なるわけないだろう。二つを代入したとき、この式は4になるんだろ。xもyも0なら、ここは2になるはずだ」

「そっか。アレー。どうして？」

そう言いつつ、ノートと解答を変わりばんこに見つめる。その様子を横目で見ると、まだあどけない。幼い、と言ってもいいだろう。本人にいえば間違いなく怒られるが、こちらから見る限り、沙夜はまだまだ子どもだった。

反面、ペンを片手に考えつつ、垂れてきた髪を耳にかける仕草はどきりとするほど色っぽい。（変態と言ってくれてかまわない）

……変な目で見ているわけではないと、一応言い訳はさせてもらうが。

「よって、この式の連立方程式を最後に解けば、この問題は解決。連立は簡単だろう？ 一見複雑そうに見えて、連立方程式だと思えば、この問題もそう難しくないってわけ」

そもそも、この問題の難しいところは……、と言いかけて、沙夜がこちらを向いた。純粹な目であることは間違いない。

「でも、付き合って一ヶ月でどこまで行けば、人並みなのかな？」

また戻った！ 乗り切ったと思ったのに、また振り出しか。このやろー。

「さあ、どうだろう」

それだけいって、等式を書く手元に集中する。これで諦めてくれればいい。むしろいっそ、忘れてしまえばいいのに、そんな話題。

「百合は『一さん、は、間違いを起こさなさそうだね』って言うてたよ」

バキッと、書いていたシャーペンの芯が折れる。いや、もう、俺の心が折れた。シャーペンよりこっちが重症だ。ついでに流れるように書いていた等式の内容が頭から吹っ飛ぶ。

やばい、高校一年生の数学が分からなくなるって、大学生としてどうだ？ しかも理系で大学受験したのに。

「『間違い』って何？ 一さんは、ってことは、他の人は間違っの

？」

ひょんつと後頭部で一つにまとめられている髪が揺れた。かけていたはずの残り髪がまた頬にかかっている。あらわになっている、それまでほとんど意識しなかった白い首筋が艶かしく感じる。

あー。完全に変態の思考だ。美雪さんに殺される。

むしろ、自分自身で、自分って人間としてどうなんだろうと思う。ずっと妹みたいに思っていた子を、こんな目で見るなんて。

変態か、変態なのか。

「沙夜」

ちよつとちゃんと話さなければいけない気がした。（父親の心境とでも言っておこう）

「何？ 休憩？」

先ほどから一回も使われていないペンを投げ出し、すぐさまベッドヘダイブ。

誘っているのかと膝詰めで説教したいところだが、残念かな本人はとっても無意識のうちにやっているのだ。何も言えるはずがないと、言うか、言ったが最後、彼女はここへ来ない気がしてならない。（あながち間違いではないだろう）

今まで培ってきた理性を総動員し、沙夜が寝ている少し横へ座った。沙夜が下から不思議そうにこちらを見る。そんな目で見ないでください。頼むから。

「一さん？」

「沙夜、よく聞いて」

そつと髪を撫でると沙夜はされるがままで目を閉じた。そして小さく擦り寄る。猫並み……いや、それ以上に可愛い。

ああー、もう、下心なんて抱く人間が悪いみたいだ。

「俺は沙夜の兄じゃないし、まして父親でもない」

「知ってるよ」

瞳を開き、無邪気にそう言う。

それは分かつてるよ、とこちらも笑顔を返した。

「沙夜が好きだし、大切だ」

今度は顔を赤くし、わずかにはにかんだ。可愛い。

「それで？」

「だから、早く進むことはないよ」

焦ることはないと言ふ。歩くより遅くても、それが遅々として進まなくても、沙夜が大切だから。

何よりも大切な女の子だから。ぎゅっと沙夜が腰にしがみついてきた。

『ありがとう』とわずかにもれ出る声は照れているようだった。

「ちよつとね。心配だったんだ」

こちらを見て、沙夜は笑った。

「私と違って、一さんは大人でしょう？ だからね」

我慢してもらって、それでいつか……。

「いつか嫌われちゃうんじゃないかって」

私子どもだから。一さんがこうしたい、とか、ああなりたい、とか、そういうことを聞いたなら『いやだなあ』って思っちゃうかもしれないから。

不覚にも押し黙ってしまった。もう、何でこの子はこう可愛いんだろうか。今更ながら発言の殺傷能力を実感してしまう。

あー、やることなすこと全てが可愛いなあと、惚気て仲間から彼女バカなのがばれるのも時間の問題だ。（晴夏あたりには既にばれている）

「大丈夫だよ」

もう何年も待つてるんだから。後数年だってあつという間だ。これまでがそうだったように。これからもきつと、ハラハラしながら、ときに心配しつつ、それでも目が離せないんだから。

早く大人になってと願いつつ、まだ『お兄ちゃん大好き』と言つて欲しいと思いつつ。

「一さん」

大好きだよ。その言葉とともに頬へ落ちてきたのは柔らかい感触だった。

……不意打ちだ。

「この前の仕返し」

バレンタインデーの時のことだと分かるまで数秒。

次の行動に移るまで、コンマ数秒。気が付けば沙夜を抱きしめて、キスしている自分がいた。あ、言ってることとやってること違うくないか？ 俺。

「っ！！ 早く進まないって言ったのに！」

触れるだけの、分相応なキスだった。幼い彼女に、その彼女が好きな自分に。

大学生にもなって、それさえ経験がないなんてありえないだろうというような、そんなキス、だったはずなのに。

「倍返し」

「ひどいっ！」

なのに顔は熱くて、心臓は早く脈打っていて、思考はあっけなく崩壊した。

そしてまた、合わせるだけの口付けを贈る。怖がられないように、優しいだけの口付けをした。 ステップアップが楽しみな、ある春のこと。

f i r s t (後書き)

変態なんです、ようするに。

0・5歩分（前書き）

あまりに短編少ないので、書きかけの遠距離もの投下！。彼女と彼の交互に視点が入れ替わるので、苦手な方注意。なお、遠距離に対する見方はただの妄想です。

本当にしている人を知ってはいますが、やっぱり当事者の感覚は得られませんでした。

一話は一話が短め。そして短編で終る気もしない。短編連作です。

0・5歩分

彼までの距離　　〽0・5歩分〽

わたしは大人じゃないから、上手くあなたに安心させてあげられるような言葉は持たない。

『頑張つて』と心からの祝福もあげられない。だけど、それを面と向かつてあなたに伝えてはいけないことくらいは分かる。

それくらいには、“オトナ”なのだ。

それならばどうか……傷つけることがないようにと祈る。応援も祝福も、わたしにはできないけれどどうか、彼の足枷にはならないように。

新幹線乗り場。騒がしいホーム。わたしにはそれら全てが、どこか絵空事のように思えて、ぼんやりとする。

隣を歩く彼もそうなのだろうか、ちらりと視線を上げた。するとこちらの視線に気が付いたように、彼もこちらを向いてポン、と何も言わずに頭を撫でられた。

不意に泣きそうになつて、上を向いて笑った。それから泣き言を言わないように、口を開いて全く関係のないことを話し始める。

黙っていたら、泣き出しそうな自分がいて、全く関係のないことをしゃべらないと、酷いことを言ってしまうような自分がいた。

「あの歌を思い出すよね。ほら、汽車を待ちながらさ、彼女が遠くへ言っちゃう歌。汽車じゃなくて、新幹線を待つてるんだけど」

いつも、こうだった。あまり話さない彼に、拙いながらも話すわたし。

そして時々、思い出したように彼が口を開くのだ。彼の言葉は量よりも質なのだろうと思う。人の話に耳を傾け、自らで咀嚼し、言葉を紡ぐ。

いつも聞き手なのに、言いたいことは時間がかかっても言う。そんな彼だ。元々おしゃべりでなかったはずのわたしが、彼の隣でよく話すようになるくらいには、彼が好きになった。

まあ、少し慣れた今は、無理をして話すこともなくなったんだ。

「もうすぐ、桜も咲くね」

ぼつり、と何の気なしに呟く。急に『あと10分』が現実味を帯びて、また泣き顔を隠すように笑った。

「咲。^{さき}……ごめん」

何で謝るのか、分かっている。何も言わず、県外の大学へ行くからだ。しかもそこへ行くと告げられたのは、ほんの一週間前。

怒りも悔しさもなかったと言えは嘘になる。

だけど、進路は他人が口を出すものじゃないこともよく分かっていた。だから、怒りも悔しさも全て流れて、残ったのはただ何とも言えない感情だけだった。

一言言っただけだった、というのが正直なところだった。たとえば、県外の大学へ行くのを決めた後だったとしても、もう少し早ければよかった。

早ければ、心の整理がついたはずだ。少なくとも、今よりは。

「いいよ、別に。謝るようなことでもないから」

少しだけ厳しい口調は、自分が思っているよりずっとそのことを気にしているのだと気付かせる。他に何を言っても同じように、彼を責めるようなニュアンスになりそうで口を閉じた。

「湊くんが、考えもなしにそういうことしないで、分かっている」^{みなと}

それでも口をついて出てくるのは、彼へのフォローと見せかけた自らへの戒め。彼を庇っているわけではなく、自分自身にそうだと言い聞かせるための言葉。

そうしないと、彼にとって自分はそのまでの存在だったのだからと、考えなくてもよいことを考えてしまうから。

所詮、学生同士の恋など、そんなものだと思ってしまうようになるから。

「ほら、湊くんのことだから、どう言おうかな、とか考えてたんでしょ？ わたしに分かりやすいように、納得するようにって。

わたしが、傷ついちゃわないようにって、考えてくれてたんだから、怒る必要なんてない」

早口でまくし立てるわたしは、彼にどう映っているんだろう。

顔は歪んでいないはずなのに、笑顔で話しているはずなのに、彼の少しだけ寄せられた眉を見ると、そうじゃないことが分かった。

離れてほしくない、そんなこと無理だと分かりつつ、口に出しそうになる。

行っってほしくない、今更だと知りつつ、泣き出しそうになる。縫いそうになる手をぐっと握り締めて、それだけは我慢する。

「咲、ごめん」

「だから、謝ることでもなっ」

「無理して笑わせて、ごめん」

謝る顔はこちらも泣き出しそうで、そこでやっと明日から彼がいらないんだと漠然とだが実感した。掴めないような空しさと寂しさではなく、はつきりと彼の存在を失う気がした。

朝早くに二人で教室で笑いあうことも、彼の部活が終わるのをじっと待っていた放課後も、もうないのだと知ってはいた。

だけど、感じてはいなかった。

だけでもう、本当に。

制服の裾を引っ張ることも、朝練を覗くことも、校舎の周りを仲間と一緒に走っている彼を見かけることも。手を振られて、恥ずかしくても振り返そうと思うことも。

もう、二度と。

「……あの学校を、受ける前から『言おう』って思ってた。だけど、

願書を出しても、合格通知が来ても言えなかった。迷ってる自分がいて、どう言っていいいか分からなかった」

ギリギリまで、あそこへ行くかどうか迷ってたんだ、と彼は苦く笑って、それからまた慰めでもするようにわたしの頭に手を置いた。優しく、撫でるように労わるように。

「咲と距離が開くのが嫌で、でもそれで進路を変えようとする自分はもっと嫌で……。そんな状態で咲に相談するようなことは、絶対にしたくなかった」

彼までの距離が遠くなる。たった数歩だった『あの頃』でさえ遠いと思っていた彼が、今度は手の届かないところへ行ってしまう。

今、こんなに近いのに。

「咲に、『行けばいいよ』って言われたら、傷つきそうな自分だった」

手を伸ばして、彼の服の裾を掴んだ。

引き止めたくて、それでも声は出なくて。彼がわたしの背に手を回し引き寄せた瞬間、ついに我慢していた涙が零れて、彼の肩口を濡らした。

0・5歩の距離がひどく遠くに感じてしまうわたしは、彼がいなくなる事実を寂しがっているんだろうか。

0・5歩分（後書き）

どこまで続くか分からないので、連載にもできないもの。遠距離は聞いているだけで辛い。

短編連作ですけど、どこまで書こうかなあと迷い中。

ドア一枚分（前書き）

現代モノがそんなに得意ではないことにやっと気付いたこの頃。
いまどきの子ってどんな風に恋愛してるんですかね。

ドア一枚分

彼女までの距離　くドア一枚分く

抱きしめた彼女の体は僅かに震えていて、懸命に抑える声も痛々しかった。

彼女をこれほど傷つけることが、自分への罰なのだとしたら、自分にとって一番辛いことを神様は知っているのだろうと思う。

自分の中途半端な決意が、想いが、彼女に涙を流させている。泣かせている。

「ごめん、咲。本当に、ごめん」

泣いている彼女の名を呼べば、『みな、とくんのせいじゃ、ないよ？』と途切れ途切れに言葉が返ってきた。

謝るという行為は、許しを強要することなのだと、初めて知った。彼女に許されたくて、自分を許してほしくて、謝罪の言葉を口にしていてのかもしれない。

優しい彼女なら、許してくれるだろう。……心の中はどうであれ、許してしまうんだろう。

それでも、少なからず俺を許せない部分が残って、許せない咲を自分自身で責めるのかも知れないと思うと、抱きしめる腕に力が入った。

許さなくてもいいと言えない自分は、どこまでも自分の勝手に彼女を縛り付ける。

「湊くん、ごめん、ね」

応援してあげられなくて？　素直に見送ることができなくて？

何について謝っているのか、よく分からなかった。彼女が謝ることなど、何一つないというのに。

早く『行く』ことを伝えればよかったのに、迷っていた自分は怖くて彼女に言えなかった。自分一人では何も決められない自身もどかしくて、何度苛付いたことだろう。

引き止めて、ほしかったのかもしれない。

いや、『かもしれない』というあやふやな表現ではなく、自分は引き止めてほしかった。

彼女に相談して、『行かないで』と止めてほしかった。絶対、彼女はそんなことしないと分かっているのに。

自分も彼女も、そういうことを求めて付き合っているわけではないと、知っているのに。

引き止められたら、自分は行くのを止めたとも言うのか？

本当に、彼女が行かないで、と言えば自分は。自分は一体、どうしていたんだろう。彼女が縋りついて、引き止めたら。

「……逆に、覚悟決めたかも」

なんて勝手なんだろう。

引き止めてほしいくせに、いざ引き止められると、その腕を振り解くなんて。抱きしめたまま、そんなことを考えているとき、新幹線の到着を知らせる、甲高いベルが鳴った。

そして続いてアナウンスが流れる。

どこへ行くか、なんて言わないで。彼女に聞かせないで。

今更ながら、自分たちの距離を思い出すから。これからどんなに離れるか、なんて知りたくもない。

耳障りなその音に抵抗なんてできはしないのに、彼女の耳を塞ぐように手を当てた。せめて、彼女に届かなければいい。

「いつてらっしやい」

顔を上げた彼女は、赤い目のまま優しく笑った。

もうその目から涙は零れることなく、ただこちらの門出を祝っているようにも見える。そんな彼女に、もう謝罪の言葉も何も言えなくて、背に回していた手をそっと離れた。

離したくない。

放したくない。

逃げ込むように新幹線へ乗り、そのまま振り返ることができなくなった。振り向いたら、そのまま戻ってしまいそうだった。

行きたくない、と彼女を目の前にして言ってしまうそうだった。自分も彼女も、『付き合う』なんて初めてだから、こういう場合どうすればいいのかわからない。どうするのがいいか、なんて誰も言わなかった。

何が一般的で、どうすれば最善なんだろう。

距離が広がれば、それはそのまま『別れ』に繋がるんだろうか。

物理的な距離は、そのまま精神的な距離を表すんだろうか。

『遠さ』は別れを誘うのだろうか。

不安になって、今度は無性に彼女の顔を見たくなる。まるで彼女の顔さえ見れば、その不安も解消できるとでも言うように。

彼女の顔さえ見れば、全て上手くいくとも言つように。

「湊くんと、遠距離恋愛だね」

苦笑いのような、泣き笑いのような、何とも言えない表情が振り向いた瞬間目に入った。そのときドアが閉まって、声も何も届かなくなる。

自分は大切なことを何一つ、伝えてはいないのに。大切なことは全て、いつも言わずにいるだけの自分が小さく思えた。

『す、き、だ』

そう口を動かして、彼女に伝えようとする。彼女に伝わっているのかさえ定かではなく、ただその行為を続けた。

初めて彼女に伝えて以来、数度しか口にしていなかった、けど確実に心にあつた想いが、後から後から溢れてきて、そのまま口を動かし続ける。

こういうとき、別れる？ と聞くべきなんだろうか。

それとも、付き合い続けよう、と言うべきなんだろうか。

そのどちらとも言えず、彼女の意見も聞かなかった自分は、やっぱり腰抜けなのかもしれないけど。それでも今更、聞く気になれず、

ドア越しに彼女を見つめる。

ドア一枚分の、彼女との距離。

数字にしても、たかが知れている距離。だけどその距離は、彼女の声が届かない距離だ。

今から、それよりずっと遠くへ離れるというのに、ドア一枚分でさえ我慢できない自分がいた。

咲、今だけ許して。

……今だけ、君から離れる決断をしたことを、後悔させて。今だけ、だから。

いつか間違つてなかったと、そう思える日が来ると信じているから。だから、ほんの数秒だけ、『離れるべきじゃなかった』と思わせて。

離れたくないと、行きたくない、と。

今のままの関係は、ちゃんと続くんだろうか。物理的な距離に、心は負けてしまわないだろうか。

自分たちなら、大丈夫。

そんなことを言えるほど強くないからせめて、彼女は大切な人だと言ひ聞かせる。

泣いてしまいそうな自分を叱咤して、身勝手にも彼女が少しでも幸せであるようにと祈る。どうか泣かないで、笑って見送って。そんなこと言えないけど。

……祈るしか、できなかった。

時速200km以上分（前書き）

題名が少し日本語おかしいですけど、ニュアンスで受け取っていただけたらと思います。それだけの速さで距離は開いていつてるんだよー、という感じで。

時速200km以上分

彼までの距離　　↳時速200km以上分

進みだした新幹線は、瞬く間に速くなって、わたしと彼の距離を広くしていった。

平日のお昼で、しかも都会でもないここにいるのは数えることのできる程度の人数で、その人たちが一齐にエスカレーターの方へ向かって進みだす。

それを避けて、わざと人の少ない階段へと向かった。呆気ないその動きに寂しさは浮かばず、ただ何とも言えない喪失感に呆然とした。

一歩、一歩と階段を下りる動作はひどく緩慢としているだろう。

別れというのは、案外悲しみを伴わないのかもしれないと思いつつ、目の端に溜まった涙を拭った。

「情けないっ」

軽く両手で頬を叩く。鈍い痛みになんだけ勇気付けられて、波と言うには人数の少ない人ごみに紛れ込んだ。

彼は時速200kmで、わたしはそれよりずっと遅く、でも確実な速さで、お互いの距離を広くしていた。駅の中よりさらに人がまばらな外へと出る。

「あつたかい」

よく晴れた、太陽の暖かさがよく分かる日だった。ここ数日、まだ肌寒さを残していたのに、それが嘘のように温かく、春の陽気が回りに満ちている。

明るいその雰囲気、少しだけ疎ましく思ってしまうのは仕方のないことだと、心の中で言い訳した。

しばらく人ごみと陽気を避けるように足早に歩く。早く帰ってしまいたかった。見送ったばかりなのに、もう携帯を意識している。そう言えば、彼と出会ったのはまだ少し寒かったときだなと思う。

日にちにしてみれば、出会ったときのほうが春というに相應しいときではあったが。

二年生のクラス替えした翌日、つまり始業式の次の日、わたししかいなかった教室に、大きなカバンを持った彼が現れたのだった。

その頃は名字しか知らなかったし、部活も知らなかった。

彼の顔も、まじまじと見たのはそのときが初めてで、その長身のせいで少し怖かったのだ、そういえば。何も知らず、ただ『部活ですごい人』という情報しか得てなかった。

もっと知っていれば、遠回りも少なかったのかもしれないと思う。

何をするでもなく朝早く来て、春休み明けのテストの範囲であるテキストをぼんやりと見ていた。

一人が好きというわけでも、人ごみが嫌いというわけでもないけれど、わたしはただこの静かな空間を好いていた。

学校という場所は常に人で溢れていて、少し忙しく感じて苦手なのだ。

人がいれば気を遣ってしまうのは必至だし、目まぐるしい変わる話のネタや、流行にはついていけない。そういう意味では、わたしは少し浮いていたのかもしれない。

静かな学校は少々不気味に見えるものの、好きな瞬間の一つだった。

そのとき、遠くのほうで足音がした。一人分、一つ一つの間隔が広いから多分男の人……先生かもしれない。

無意識にそんなことを考えて、背筋が自然に伸びる。ちらりと時計に目を走らせるも、まだそんな時間ではなかった。

登校するにしても、少々早すぎる。

「あ……」

扉を開いたのは、今年初めて同じクラスになった男の子だった。すらりとした長身と、少しだけ無造作な髪の毛。短めのその髪は弄っている様子は一切なく、最低限切っている、という感じだった。一瞬鋭いと思った瞳は、次の瞬間にはすでに生氣を含んでいない。鋭い、というよりも深い色の瞳と目が合い、思わず目を逸らした。じっと見ることに、見られることに慣れていない。

今にして思えば、彼も面を食らっただけなんだろう。だからちよつと驚いて、目が細くなっただけ。緊張すると、険しい顔をする彼だから、当ても緊張していたのかもしれない。

「おは、よう。えっと、日野くん」

乏しいクラスメイト情報を総動員して、思い出した彼の名を口に載せる。

わたしの左斜め前の席の彼は、学年のみならず学校単位で有名だった。何でも、部活でとても活躍しているらしい。

……バスケか、バレーか。たぶんその辺。室内系でボールを使った気がする。そんなことを昨日クラスの女の子達が嬉しそうに話してたつけ、その姿がすごくかっこいいらしい。

「おはよう、……ごめん、名前」

知らないんだ、と呟くように添えられる声。日野くんは眉を寄せ、宙に視線を彷徨わせる。

そして諦めたように息を吐くと、すまなさそうに聞いてきた。気分を害すことはもちろんない。彼と違って、部活もしていないわたしの名前など、覚えているわけもない。

そもそも同じクラスになったのは、今年が初めてだ。むしろ知っていたら、どうして知っているのかと訝しんだだろう。

「高木、です。よろしく」

彼は小さく『高木さん』と呟いた。覚えようとはしてくれているらしい。

「高木さん、早いんだな。何かの朝練？」

「ううん。何て言うか、早めに来るのが好きなの。日野くんは？」

「俺は朝練。眠くて毎日大変だから、早めに来るのが好きとか、ちよつと羨ましい」

「大変だね、部活してると」

言葉の少ない彼の第一印象は、少し怖い人、だった。

ふと、新幹線が発発する寸前の彼を思い返す。無愛想な顔に笑顔が浮かぶのも珍しいが、泣き出しそうな顔はもつと珍しかった。

何か言っているような口の動きは分かるのに、彼の声は聞こえてこなかった。

だから、自分勝手に想像しても許されるだろう。

もしも、自分勝手に許されるなら、思ってもいいだろうか。彼の口から、滅多に出ない『想い』が、溢れていたと。

いつも大事にされているから、『大切』なんだとは思っていたし、伝わっていた。

だけど、口に出すことが少ないから時々不安になることも事実だった。口に出されると、何だかくすぐったいけどすごく嬉しい。

「わたしも、言いたかったな」

いっ言ええば、彼は喜んでくれるだろう。

時速200km以上分（後書き）

遠距離恋愛が主というよりは、距離が広くなってお互いに過去に
思いを馳せる時間が長くなり、改めて相手が大切だと自覚する小説
……みたいなのをコンセプトに。

してるはずだったんです、もともと。現代モノ苦手なくせに、こ
ういうのが書きたくなるんです。

県一つ分（前書き）

書き足せない日々が続きます。

県一つ分

彼女までの距離　く県一つ分く

新幹線のアナウンスで、早々に隣の県へ入ったことを知る。

窓際へ寄りかかるようにして外を見れば、眩しいくらいの太陽が目を焼いた。携帯を開いて、それから閉じて、じっと見つめて、それからまた開いて……。

そんな無意味な行動を繰り返す。

今自分はさぞや情けない顔を晒しているんだろう。そう思って瞼を閉じた。ちらちらと、彼女の赤い目が瞼の裏に現れては消えてゆく。

自分を責めるような目では、決してなかったはずなのに。

彼女を思い出して、また泣き出しそうになる。じんわりと熱くなった目を隠すように俯いて、肺の中に溜まったよどんだ空気を吐き出した。

吐き出しても、心の中に溜まるものは出てはくれなかったけれど、ぐんぐん早くなる新幹線に身を任せつつ、彼女と自分の距離の長さを考える。

未だ止まらない新幹線のせい、さらにその距離は開いているんだけど。そして、あと2時間はその距離が開くのを、じっと耐えることしかできないんだけど。

流れるような景色も、痛くなる耳の奥も、全てのことが彼女の気配を消していくように思えて下を向いた。

一昨年の春頃、つまりは恋などに全く興味のなかった自らに言うてやりたい。

二年年後の自分は、部活が彼女か、で半年以上悩んだぞ、と。

比べたつもりは全くないが、彼女にしてみればそう見えても当然だろう。そして自分より部活……バスケットを取ったと思われても仕方のないことをした。

「ああ、クソッ」

口下手な自分に嫌気が差し、髪をかきあげた。何かもつと、言うべきことはあつたはずなのに。伝えることも、あつたはずなのに。「あの頃は、考えもしてなかったな」

自分がここまで悩むなんて。ましてや、彼女を作るなんて。

……同級生の女の子に、恋をするなんて。

『高木 咲』の第一印象は“不思議な子”だった。

特別変人、というわけでも、言動がおかしいというわけでもなかった、はずだ。

人に興味のない自分なので、正しいかどうかは分からないけれど、ただその身に纏う雰囲気はとても静かな気がしたのだ。

かと言って、クラスで一人静かに座っているだけでもなかった。

他者なんて気にしないはずの自分だったのに、特に『女子』という生き物が苦手な自分だったのに、何故だか彼女は気になった。

初めて話した朝以来、二人っきりの朝の時間は、小さな楽しみになつていった。

あれだけ朝を嫌っていた自分が、無遅刻になるくらい。

朝練も、毎日続いた。

「おはよう、高木さん」

「おはよう。日野くんは早いね。朝練、好きなんだ」

テストのある日はテキストを、それ以外の日は文庫本を眺めている彼女はもうお決まりだ。

一回くらい彼女よりも早く来たいのに、ついぞ二年間それが成功することはなかった。彼女が欠席した日以外、いつも彼女は自分より早く来ていた。

それが悔しかったが、それと同時に一種の安心感も持っていた。毎日、彼女が迎えてくれたから。それが心地よく、嬉しかった。彼女より早く来たい、と思うくせに、実際そうなるのを少しだけ恐れていた。

「……朝練っていうか、練習は好きだよ。まあ、それだけじゃないけど」

君に、会いたいただけだ。

今思えば、この頃からそれは恋と呼んで差し支えのないものだった。

「最近ね、日野君の足音、分かるようになったんだ」

朝話すようになって、少しずつ彼女のことを知った。

たとえば人ごみが苦手なこと、人の少ない学校は安心すること、騒がしいより静かな方が好きだけど、静か過ぎると寂しくなってしまうこと。

友人と話すのも、一人でじっと考えるのも、両方好きなこと。

……思ったとおり、少しだけ不思議な子だった。不思議だけど、一緒にいて心地よく、安心する子だった。

「どんな感じの足音？」

「口では上手く言えないんだけどね。うーん、軽い足音？　なんかこう、はつきりとは言い切れないんだけどね、日野くんだっ！　ってはつきり分かる足音だよ。他の誰かの足音とは違うって」

いつから、という明確な区切りはないのに、『特別』になっていくことは分かる。

一つ一つの動作が、言葉が、彼女らしいと思う度に、彼女のことが分かっていく気がして嬉しくなった。

彼女は、自分がいつも素通りして気付かない『楽しいモノ』を見つけることが上手かった。今の足音だって、言われるまでは気にも留めていなかった。

彼女に言われて、初めて気が付いた。

「高木さんの足音も、聞き分けられたらいいな」

「わたしの？　いいよ、何か恥ずかしいし。絶対、日野君のと比べたら笑っちゃうくらい変だと思う。わたしの足音、きつと重そうな音だよ！！　だから、しっかり聞こうとしないでね」

彼女の足音が聞き分けられるようになったら、きつと楽しくなるだろう。

後ろから、その音が聞こえるだけで、きつと笑ってしまうんだろう。そう思って小さく笑うと、彼女は少しだけ眉を寄せて、『絶対聞かないでね』と念を押した。

彼女に泣き顔を見られなくてよかったと思う。あんな情けないところ、できれば見せたくない。

一回見せれば、十分だ。自分の泣き顔なんて。今更になって溢れそうになる感情を押し殺して、目を瞑る。

窓の外の眩しい光が瞼を越えて、目を焼く感覚に眉を寄せた。腕で目元を覆い、涙を隠した。

泣き出したいのは自分ではなく、きつと彼女の方だろう。でも、彼女はもうきつと、泣いていないんだ。

「咲」

彼女を引き止める力も何もなく、ただ縋りつくことしか出来ない自分なのに、彼女は手放せないという事実は知っていた。

付き合い始めて、そんなに時間は経っていないはずなのに、それだけは嫌と言うほど分かっていた。

県一つ分（後書き）

学校自体は県一つ分じゃ済まされなくらい離れている設定です。感覚で言えば、フォッサマグナ越えちゃうくらいな？ 因みに私は西日本住まいなので、自然と遠くを考えると東日本になります。

フォッサマグナを越えたのは、人生で一回だけです、今のところ。西日本中心の旅行くらいしかしたことないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5328/>

larme ~ 短編集 ~

2011年10月9日03時21分発行